

---

# 廻る運命と囚われた神様

himame

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

廻る運命と囚われた神様

### 【Nコード】

N9678U

### 【作者名】

himame

### 【あらすじ】

その時が来るまで蛇は廻る。自らの尾を喰い繰り返す。それを出すことがどれだけ辛いことなのか……。蛇はまだ知らない、自分が何なのかを。蛇はまだ知らない、世界の秘密を。やがて蛇は眠りから目覚めた。

「……此処何処？」

これは男がある目的のために過ごしていくひとつの物語。

「現代に生きる神様」 「廻る運命と囚われた神様」に変更しま

した

## 一話 ダンボールの神様（前書き）

どうも初めましてh i m a m eです。今回初めて書かさせていただきます。

## 一話 ダンボールの神様

神様は本当にこの世にいるのだろうか？

人々はこの世に神がいると考えているのだろうか、それともこの世にいないと考えているのだろうか。

正直私にとってはそんなことどうでもいいことだ。

私は神だって人間のように生きたっていいのではないかと思う。神がこの世にしようと思われていようがないと思われていようが信仰されていない神など大きな力を持っている以外はただの人間と大した差などないからだ。

・・・ならば彼だって縛られる必要などなく人間のように生きたっていいではないか。

・・・眠い、けど臭いし暑いし、なんでこんな暑苦しい上に臭いんだよ鬱陶しい。食い殺すぞ。

「・・・起きるか」

さつさとこの臭い原因見つけ出して消してやる。

俺が目を開け起きようと体を起こすと顔に何かぶつかった。

「・・・???」

目が暗闇に慣れてないからか最初は分からなかったが徐々にその正体が分かってきた。

「・・・・紙？」

いや、ここまで分厚いのだからただの紙じゃないか。

「???」

正体は良く分からないが暑いのはこれが原因だろう。・・・・ちょっと待て、普通こんな物の中で寝ないだろう。げんに俺は寝る時にこんな物に入った覚えはない。そしてこんな事をしてくる奴は一人しか心当たりは無い。

「とりあえず出よう。まずはそれからだ。」

俺は紙(?)で作られた箱を破壊して外へと出た。

「俺、復活!・・・・って臭っ!?!?」

とりあえずこの部屋の臭いからどうにかしよう・・・・俺はそう心に決め一歩踏み出した。

## 二話 神様現代に進出

「・・・・・・・・何これ」

部屋の掃除をしようと室内を見回した俺の言葉はこれだけだった。

「いつの間にこんなに人間社会は発達したんだ？俺は一体何年寝てたんだ？」

俺の頭の中は疑問ばかりだ。まずこの明かりがつく物体は何だ。次にこんな複雑な時計なんていつの間に出て来た。何よりも一番疑問に思うのはこれだ・・・

「何故俺は蔵に入れられている？」

何だ俺はいらないものなのか？それとも置きものか？何にしる物というのには変わりないが。

これは怒ってもいいよな。仮にも敬うべき存在を蔵に放置なうえダンボールに入れているんだから。

「とりあえずアイツ絞める前に外でも見てくるか・・・」

「お願いだから、それで外に出るのだけは止めてね。」

噂をすればご本人の登場か。

俺は声のした方を向いて言った。

「おはよう、そして久しぶり彩」

「久しぶり。もう少し寝ていたら生ゴミとして出そうかと思ってたわよ。」

「……相変わらず酷いなお前」

ホント何でこんな奴が『巫女』何だろうか……

「とりあえず服をきちんと着なさい。『戦闘神』の名が泣くわよ。」

「実際は『戦闘神』と言うよりも『処刑人』の方が正しいような気もするけどな」

俺はそんな大層なもんじゃない。

「てか、何でこんなボロボロになってるかなあ。」

どうやら俺の着ていた服はボロボロで使い物にならなくなっていたようだ。下半身は何とか隠せているが上半身はぶっちゃけほぼ裸だ。

「はい、これ」

彩はそう言って俺に服を渡してきた

「時代は変わったもんだなあ……」

昔と今の服の違いを考えしみじみと想着ってしまった

「てかよく俺が今力無いの分かったな」

本来俺の服は全て俺の力で作っている。その方が便利だし俺の力で



出来ているから耐久性も結構ある。

「瞳が紅から紫になってるんだからそりゃ分かるわよ。大丈夫？眠ってボケたんじゃないの？」

彩はそう言って蔵から出て行つた。

「・・・こりゃ、ホントにボケちまったかなあ・・・」

俺はその言葉に言い返せず、内心冷や汗の中佇んでいた。

とりあえず明日からは昔の感覚を取り戻せるよう何かした方がいいかもしれない。俺はそう決心すると彩から貰った服に着替え後を付いていった。

三話 神様VS現代社会

ホントに時代は変わった。俺は改めてそう感じた。

「とりあえず、以上の事が現代で生きるために必要な事よ。」

「・・・納得いかん。・・・何故・・・何故力を使つてはいけないんだああああああああああああああああああ！！！！！！」

俺が目覚めてから一週間がたった。この一週間はひたすら常識と昔の感覚を取り戻すことに費やした。

俺の瞳は基本的に力を使っていないか力がなくなると紫になる。最も常に力を使って探知用の結界か障壁を發動しているから紅だが。

「しょうが無いでしょ。時代が変わったんだから昔と違って目立つような事をするすぐに世間に広まるのよ。」

[illegible]

そうだけど、そうだけども、すっげえ納得いかない。四百年前までは神の怒りとか神罰とか言われてて絶対にばれることなんてなかったのに……

「何にしても諦めなさい。」

神の力をもってしても文明は壊せても時代の流れは壊せない。文明破壊なんてしたら他の神との戦いになっちまう。

「・・・ハア、畜生。ところでアマテラスやスサノヲ達は元気なのか？」

力の事は諦めた俺は他の神の事について聞いてみた。

「ええ、アマテラス様もスサノヲ様も元気よ。あんたが復活したのは伝えといたから問題ないわ。・・・それよりも問題があるとしたら北欧の方ね。」

「??何で？俺なんかしたっけ？」

「アンタ自分がしたこと忘れてんの？アンタ、オーディンやらトールの配下に散々暴れてたでしょうが。」

「・・・なるほど」

眠る前

正確にはそのずっと前だが

は散々暴れて

たからなあ・・・だいたい向こうが先に手を出してくるんだけど。オーディンに至っては殺し合いにまで発展したからな・・・ちなみに彩が日本の他の神に敬語をつけるのは本人に聞いたところ、「アンタ以外の神にはきちんと礼儀ぐらいあるわよ。一応アンタより常識を皆分かってるんだから。」とのこと。他の神に敬語をつけないのはそんなことをする義理がないからだそうだ。

「面倒くせえ」

「しっかりしなさい。あんたも一応『神』でしょう。」

・・・『神』、アマテラスやスサノヲ、オーディンにゼウス達は紛れもない『神』だ。だが俺は『神』ではない、というよりも『

神』や『人間』、自分以外の『すべて』を食らうために生まれた存在だ。

それが今となつては、信仰されて『神』になるとは・・・

「・・・・・・・・面倒くせえ」

その言葉は誰にも聞こえることなく消えた。

### 三話 神様VS現代社会（後書き）

次回からシリアスな雰囲気・・・もうすこし上手く戦闘描写を書けるようにしておきます。少し文章の間を開けてみましたがどうでしょう？

#### 四話 神様のリハビリ相手

彼が神を殺すと言うならば私も神を殺そう

彼が人間を食らうと言うならば私は人間を彼に差し出そう

彼が世界を壊すと言うならば私も世界を壊そう

彼が私を望むのなら私は喜んでこの身を捧げよう

私は彼が望む事を叶えよう私の身は彼のためにあるのだから

それだけが何もできなかった私に出来るたったひとつの事なのだから

けれど、私は彼が死にたいと言った時果たして彼を殺せるだろうか

分からない・・・私にはその時が来る事が無いように祈る事しか出来ない

「……………退屈だ（ね）」

俺たちは神社の縁側に座つてのんびりとしていた。

「……………敵!!」

「・・・・・・・・・・実力があるのか、それともただの馬鹿か」

「何にしても行くしかないわね」

人さまの土地で力を使うとはいいい度胸だ。

俺は準備をしながらもこの前の説明を思い出していた。

彩が言うには今の時代には大きく分けて三つの力があるらしい。一つ目は『神』のみが持つ事の出来る

神力。二つ目は妖怪等が持つ妖力。三つ目は人間や吸血鬼等の西洋で言う悪魔達 吸血鬼は悪魔なのか多少疑問だが が使うことのできる魔力だ。まあ、細かく分類すると他にもある。実際あやは魔力と霊力を持っている。ただ一般的にはこの三つが多いだけだ。

それと別に特別な者のみが持つ『能力』がある。

これは『神』や『妖怪』、『人間』、『悪魔』のなかでもさらに特別な者たちが持つ事が出来る。能力によって力は変わるが『能力持ち』は生まれたばかりでも最低中級の力はある。―――まあ、能力にもよるが。

今回感じた力は中の上といったところだ。そこそこの実力者だが負けることはないだろう何を隠しているか分からんから油断はしないが。

「準備出来たわね。」

「ああ」

服もすでに能力によって変わっている。地面につくほどの長さがある漆黒に染め上げられたコートを着ている。ズボンも全て漆黒に染まっている。

「行くぞ」

「ええ」

俺達は侵入者の元へ向かった。

「ヒイイイイ」

辺りはすでに暗くなっており足元に何があるか分からないほどだった。

そんな中で港にある1つの倉庫の中で一人の男が走っていた。黒いスーツを着た少し細いが筋肉の付いた男であった。

「ハア・ハア・た、助けてくれ!!」

男は何かに脅えているように走っていた。

「逃げちゃだめだよ」

そんな倉庫の中で男以外の声が聞こえた。まだ幼い可愛らしい少女の声だ。

けれど男にはまるでそれが死神の声のように聞こえていた。その声を聞いた男の顔は真っ青になりさらに逃げるスピードを速めようとした時つまりいたのか転んでしまった。



男はそれすらも理解できずもう一度立とうとした時気づいた。自分の足の膝から下が無くなっている事に、いや無くなっているのではない。男の足はあった、ただその原型が分からないほどに壊されて（・・・）いた。

「ひつ、あアあああ、がああアああアあア嗚呼！……！！！」

男がそれを理解した瞬間体に激痛が走り、絶叫した。

「つゝかまゝえた。鬼こつこはもう終わりだね」

男は激痛に意識が割かれて少女の言っている言葉が全く聞こえずただ叫び続けていた。

「いただきます」

少女はそう言つて男に噛みつく。

「あ、あああああ」

すると男の体がまるでミイラのように干からびていく。

「まあまあかな。ごちそうさま」

少女はそう言い残すと去って行った。さっきまで生きていた干からびた男を残して・・・

#### 四話 神様のリハビリ相手（後書き）

この少女のイメージとしてあるキャラを使わせてもらいました。  
次回からは戦闘です。今日中に投稿したいと思います。

種族名をモンスターから悪魔へと改名しました。 9 / 10

## 五話 神様と犯人

昨日俺達は侵入者を見つけることが出来ず。その日は神社へと帰った。

俺達は翌日テレビの前で真剣な表情をしている。  
その原因は今ニュースで流れている事件だ。

『港で成人男性の変死体発見』

男性は全身の血を抜かれておりミイラのように干からびた状態で見つかったらしい。両足はその原型を失っており警察としてもこの異常事態にひどく混乱しているようだった。

「ねえ、これって・・・」

「・・・間違いないだろうな」

「それじゃ!？」

「お前はここに残れ・・・」

「なっ!」

「お前じゃ手に負えない」

「でもっ!!!」

「足手まといだと言っているんだ・・・」

「つつつ！！！！」

その言葉に彩は唇を噛んで俯いた。実際この犯人と彩じゃ圧倒的すぎる。あまりにも相性が悪すぎる。

「行ってくる」

俺はそう言って神社を出た

「ユー」

部屋に残された少女は小さな声でその『神』の名を呼んだ。

辺りが暗くなり時間が十時を回った頃、俺は一人事件のあった倉庫の中にいた。

「（・・・・・・やはりこの能力は・・・・）」

俺が探査用の術式を発動していると

「お兄ちゃんここは危ないよ？男の人が殺されちゃったんだって」

「そついうお譲ちゃんも危ないよ？俺が送って行ってあげようか？」

俺は声のした方を向いて言った。

「地獄まで」

## 五話 神様と犯人（後書き）

次回から戦闘です。キャラについては次辺りで参考にしたものが分るかもしれません。

## 六話 喰VS破壊（前書き）

投稿遅れました。今回書いてて思いました。

中二病・・・乙

## 六話 喰VS破壊

「アハハハハハハ！……楽しいよお兄ちゃん！……こんな相手初めてだよ……！」

少女は狂ったように笑いながら俺にビームの様なものを向けてきた。

「そうだろう……！ならもつと楽しませてやるよ……！」

俺は片手に障壁を出しレーザーを防ぐと少女に獣の様な笑みを向け少女に接近し

「『首狩り』」

自分の足を少女の首に叩きこんだ。まるで魂を刈り取る死神の鎌の様に……

ゴキイイイ……！！

少女の首から骨の折れる音がして少女は地面へと叩きつけられた。

「ガッ……！！……！！……！！フフ、ハハハハハ……！！スゴイ、スゴイよ、スゴイ、スゴイ……！！私に傷をつけるなんてスゴイよお兄ちゃん……！！」

少女はまるで何もなかったかのように、さっきまでと同じ狂った笑いでこちらを向いた

「……そうだな、楽しいよなあ、俺も目覚めてから最高にいい気

分だ！！！」

俺も少女にさっきまでと同じ笑みを浮かべていた。

分かる。この少女がやはり彩は連れてこなくて正解だった。こいつは俺と（・・）同じ（・・）だ。

少女は俺の言葉を聞いて思案顔し意味が分かったのかさっきとは違う純粋な笑みを浮かべた。

「眠ってた？・・・ああ、お兄ちゃんがあの噂の『殺神鬼』なんだね？私ずっと会いたかったんだよ？私と同じ狂っていて、私と対等に渡り合えるかもしれないと思って。」

少女は一度そこで言葉を区切るとさっきの純粋な笑みを消し再び狂った笑みで

「だから遊んでよ、お兄ちゃん！！！！！！！！！！」

そう言った少女は腕をこちらに向け

「『壊れた玩具の心臓』ブロックン・ユア・マインド！！！！」

その言葉と同時に俺の左腕が変化した。骨は折れ腕の肉を引き裂かれ傷口からは血や骨が見えていた。

「（やはり！！？）」

彩は連れてこなくて正解だった。俺は腕が破壊されても冷静に考えた。



「ふふふ、驚いた？これが私の能力『壊れた玩具の心臓』任意の空間内にある存在を全て破壊する力。でもスゴいねえ、本当は体全部を壊すつもりだったのに・・・気づいてた？」

少女は笑って俺に問いかけた。

「ああ、さっきここを探知した時の感覚とあの死体を見れば大体予想はつく。」

常人なら絶対に分かりはしねえが・・・

そう答えながらも俺はこの状況をどうするか考えていた。

圧倒的再生力と全てを破壊する能力。ホントに反則だ、やはり彩は連れてこなくてよかったな。

「・・・お礼に俺も少しだけ能力を見せてやるよ。」

そう言って俺は言葉を紡いだ。

「我は全てを蹂躪せしもの

我は全てを喰らいし闇

世界を破

壊し深淵なる闇へと誘え」

「発動『蹂躪せし暴君』」  
ヘル・ブレイズ・タイラント

俺の言い終わると同時に血の様に紅と闇の様な漆黒が混じり合った影の様なものが俺の腕を包みこみ

消えた時には俺の腕は元通りになっていた。

「へえ〜・・・すごいねお兄ちゃん。でももう少し本気で来ないとーーーー死んじゃうよ。」

少女は笑みを浮かべ俺に聞いてきた。

「あんまり大人を嘗めるなよ!!!」

その言葉と同時に俺の周りからは先ほど出現した影の様なものが少女へと向かった。

「壊れちゃえ」

可愛い声とは裏腹に少女は俺の影に手を向け破壊の能力を使った。

ガガガガガガアアアアアアア!!!!!!!!!

しかし影は壊れず破壊の力とせめぎ合っていた。

「私の破壊も喰らう気？欲張りはダメだよ？」

少女はさらに力を込め俺も負けじと力を込める

「ハアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!」

「オオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!」

一方は破壊しようと、もう一方は喰らおうと・・・

そのせめぎ合いに耐えきれなかったのか周囲を破壊は滅茶苦茶にしながら俺達は戦っていた。

「まだまだあゝ」

「さっさと喰われるお!!」

強い!!戦っていて分かるがこれは中の上なんてレベルじゃない。能力だけで言うなら最高神すら殺せるようなレベルだ。せめてもの救いは彼女自身の力が俺より下だということだろう。

俺達は力を振り絞り互いに力を強めていきそして・・・両者の力は消滅した。

「むゝゝゝ、相内かあ。つまんない。」

「・・・次は手加減なしで食い殺す」

俺達ももう一度発動させようとした時、少女の後ろの空間に扉が出現した。

それに気づいた少女は不貞腐れた顔をした後

「もう時間か・・・じゃあねお兄ちゃん、また遊んでねゝ」

笑顔でそう言って少女は扉へ入って行った。

少女が入ると扉は消え残ったのは俺と爆弾でも落としたかのようなクレーターや瓦礫だけだった。

「・・・疲れた」

俺は地面に座り込み髪止めがとれていることに気付いた。

「ま、いいか」

それにしてもリハビリ相手にしてはとんでもなかったな。おかげで感覚は戻ったけど・・・

俺はもう一度周囲の様子を見てため息をつきなるようになるかと考え家へと足を向けた。

「なんであんなに力を使っただの！？周りに人がいなかったから良かったけど明日は大騒ぎよ！！？」

家についた俺を待っていたのは彩の説教だった・・・勘弁してくれ。

「随分と楽しそうね。そんなに服を汚して」

扉を開けて入ってきた少女は満面の笑みで椅子に座っていた。

「うん。とっても楽しかったよ。また遊びたいなあ」

少女は満面の笑みで向かいに座る女性に言った。

「良かったわね（この子がこんなに楽しそうな顔をさせるなんて・・・少し妬けるわね）」

少女の今までにないほどの笑顔を見て向かいに座る女性はそう感じた。

「うん　楽しみだなあ・・・」

そんなことも知らず少女は笑顔で今日戦った少年のことを考えた。

「ホント・・・楽しみだなあ」

## 六話 喰VS破壊（後書き）

登場させた能力ですが、東の方の妹様の能力を参考にして使わせてもらいました。

容姿もだいたいあんな感じだと思ってください  
今日中に7話も見直して投稿したいと思います。

## 七話 神様と集会

「・・・ユー」

「・・・な、何だ？」

彩が静かな声で俺の名前を呼ぶ。俺はその声色に思わず一步後ずさる。おそらく今奴は怒っているのだろう、顔を見れば分かる・・・  
凄い仏頂面だ。無表情でないという事は完全に怒っているわけではないのだろう。

足手まといと言われた事なのか、忠告したのに力を使ったからなのかどっちだ？

最も分かってても謝る気はないが・・・仕方のないことだったし、何より面倒くさい。

「・・・これ」

彩に渡された封筒の中をのぞくと八つ折りにされた紙が入っていた。

「なんじゃこりゃ・・・」

その紙を開いてみると差出人はアマテラスと書いてある。というか筆とかじゃなくてボールペンで書いてるよアイツ・・・俺が言うのもなんだが、いいのかそれで？

中身に関しては要約すると俺が目覚めた事だし久しぶりに顔合わせで騒がねえ？という事だ。・・・てかあいつらが仕事から逃げて酒飲みたいだけだろ。

「何だったの？」

「宴会、今度顔合わせしないかだとさ・・・」

「ふん」

如何にも興味無いように振舞っているが俺の目はごまかせん。さっき一瞬だがこちらに「行きたい」という目を送っていた事を。自分が怒っていたから恐らく言いづらいんだろう・・・

「彩お前も来るか？」

「・・・行く」

「了解、むこうには俺がその事伝えておくから」

俺が居間を出て連絡に行くふりをしそつと居間の襖を開けて中の様子を見ると・・・ニコニコしてますね。半端ないほどにニコニコしていますよ。

「まあ、これで機嫌が直ればいいか」

さて、アマテラスのところに連絡するか・・・

「~~~~~」

自身の宝石の様に綺麗な赤髪をゆらしながらアマテラスは上機嫌で歩いていた。原因は・・・



「なあ、何故姉上はあんなに上機嫌なのだ？」

「これはスサノ才殿、．．．なんでも『殺神鬼』とかいう者から連絡があつてからずつとあんな調子なのです」

「．．．なるほどあいつか（これを口実にして仕事をサボりさらにはユーヘルトの奴と遊ぼうという事が．．．）」

「何か心当たりが？」

「まあな」

男の質問に返事をしスサノ才はアマテラスの元へと歩いて行った。

「姉上」

「ゝ おお、なんだスサノ才かどうした？」

「いえ、随分機嫌が良いものですから。ユーヘルトから連絡があつたそうですな？」

「ああ、宴会には出席すると、巫女も一緒だそうだ」

「左様で．．．今回は騒がしくなりそうですな」

「ああ、毘沙門天の奴にも連絡しとくか、あいつも喜ぶだろうよ」

「．．．．．そうですな（喜ぶだろうが、絶対に後でケンカするな．．．。救護係も配備しておくか．．．）」

喜ぶアマテラスと反対にスサノオは冷や汗が止まらなかった。今回のケンカの予想被害について……。

「行くぞ、彩」

「分かつてる」

誘いがあつた日から三日がたち俺達はアマテラスの元へと向かった。

何にせよ彩の機嫌が直つたのは良かった。

「……相変わらずでけえな」

「まったくね」

俺達の前には大きくそびえ立つ鳥居があつた。さすがだな……。すげえ悔しい

「おうよく来たな」

俺達が境内に入ると目の前には赤髪のロングストレートの姿をした美女がいた。……間違いなくアマテラスだ。

「相変わらず変わらないなお前」

俺がアマテラスにそう言うとアマテラスは笑いながら

「お前だつて変わつてないだろ？」

と笑顔で言ってきた。

「お久しぶりです、アマテラス様」

「ああ、久しぶりだな彩」

二人も挨拶を交わした後しばらく話していると他にも多くの神がきた。

「久しぶりだな、ユーヘルト」

その中で体つきの良い三十代ほどの精悍な顔つきをした男が挨拶をしてきた

「げっ、毘沙門の爺!!」

「誰が爺だ!!相変わらず可愛げのねえ餓鬼だな」

「黙れ、ロリコン」

「ロリコンじゃねえわい!？」

「すまない、間違えた変態殿」

「クソ餓鬼、絞めるぞ」

「やれるもんならやってみろゴリラが」

「上等だ！！ぶっ殺してやるわい！！」

「逆に喰らい殺してやらあ！！！！」

「（（（・・・相変わらず二人とも馬鹿だな）（（（」

俺と毘沙門は昔からケンカばかりしていたが眠りから覚めてもそれは変わらないようだ。

俺達がケンカをしている中他の奴らはすでに酒を飲み騒ぎ始めていた。

やっぱり何年たっても変わらないなあ。俺はその事に安心し満足するまで暴れまわっていた。

翌日、彩が二日酔いになっていてとんでもなく苦労したというのはここだけの話だ。

## 今さらのキャラ紹介（前書き）

何というかキャラ紹介をするタイミングを見失ってしまったのでここらへんでキャラ紹介をしておきます。

## 今さらのキャラ紹介

「……………今頃か」

ユーヘルトは手に持った紙を見て呆れていた。

『作者の代わりに頑張って自己紹介してくれたまえ！！君たちならできる！！』

「……………どうするの？」

そう書かれた紙を見た彩はユーヘルトにそう問いかけた。

「……………やるっきゃないだろ」

ユーヘルトはそう言ってどこからかホワイトボードを取り出した。

「(……………今どこから出した？)」

彩の疑問は解けないままユーヘルトは説明を始めた。

「まず俺の紹介だ……………」

名前

・ユーヘルト

## 能力

・ 蹂躪せし暴君…あらゆるものを喰らう力。それが目に見えないものでも喰らうことはできる。本編で手を治すことができたのは傷を負ったという事実を喰らったため。

・ ……ユーヘルトの本来持つ力。蹂躪せし暴君はこの力を喰らうことに特化させた能力。

## 身長

・ 179?

## 体重

・ 73?

## 瞳の色

・ 紫、紅（能力使用時）

## 髪

・ 金髪。長さは肩にかかる位

## 趣味

・ 物造り、読書。最近は現代の街の様子を見に行ったりなど

## 嫌いなモノ

・ G（黒い生き物）、雨、根性のない奴

「……と、まあこんな感じかな」

「……もう少し何かあっても良いんじゃない？」

「別に良いだろ。それについては他の奴の紹介の時にやれば問題ないだろうし」

「・・・まあ良いけど」

「ほれ次はお前だ」

「はいはい」

名前

・ 彩（名字を教える必要はない）

能力

・ ????????

身長

・ 167cm

体重

・ 「……………」

「……………」 言わないのかあゝ あゝ あゝ あゝ ……!!!!!!」

「……………」 殺されたいの？」

「……………」 ごめんなさい」

瞳の色

・ 茶色

髪

・ 茶髪。腰ぐらゐの長さにまで伸ばしている

趣味



・のんびり、ユーをいじること、家事全般、

嫌いなモノ

・ユーの勝ち誇った顔（殴りたくなる）、一人でいること、裏切り

「こんな感じでいいのかしら？」

「……ちょっと待て、何故趣味と嫌いなモノに俺が入っている」

「別に良いじゃない。殴られるの好きでしょ？」

「やめろ、俺に変なキャラ付けしようとするな」

「意地悪」

「引っぱたくぞ」

「愛してるわ（棒読み）」

「……（ー）」

「……さて今回はこの位で良いでしょ？」

「……ああ」

「キャラ紹介も随分遅かったわね」

「ああ、作者も色々考えていてな。キャラ紹介をもう一つの連載の『混沌都市』のメンバーと一緒にラジオ風にでもしてやろうかと考えていたらしいが……」

「ああ、あっちがそこまでキャラがでてきてないから」

「まあ、そんなところだ他にもそうすると毎回そうする必要があるとか珍しくちゃんとしたことを考えていたぞ」

「……ホントに珍しいわね」

「今回のキャラ紹介はここまで次回は……未定だ」

「それじゃ……」

「「また次回……！」」

## 八話 『殺神鬼』 序章 ？

夜、俺は縁側に座っていた。

「…………『殺神鬼』か」

何時からだろうか、そんな名前と呼ばれ恐れられるようになったのは…………

俺はそこまで考えてそれ以上思い出すのを止めた。それ以上は俺にとってもあまりいい思い出ではない。けれどしばらくすると無意識のうちにまた思い出そうとしてしまう。

「もう何年経っつけ…………」

俺は月を見ながら昔を思い出した。

もう何百年前になるだろうかもしかしたら何千年前かもしれない。

『境界』と呼ばれる世界。その中心部にある教会の象の目の前。気が付いたら俺はそこにいた。

自分が誰なのかもよく分らない、名前は覚えている。力も分っている、けれどそれ以外はよく分らない。俺の目に映っている世界はモノクロで色なんてどこにも付いていなかった。ふと視線に気付き後ろを向いた。こういう人を美しいと言っんだらう。月の光を受け神秘的な輝きを放っている長い銀髪、宝石のように綺麗な碧眼。その

少女はこちらを微笑みながら手を伸ばし言った。

「初めまして。私の名前は。貴方と同じ存在よ」

それが『俺』が生まれた瞬間だった

八話 『殺神鬼』 序章 ？ （後書き）

もしよかつたら感想お願いします

## 九話 『殺神鬼』序章 ？

神殿の中一人の少年が聖母の象の前で祈りを奉げていた。しかし何故か少年は修道服を着ていて少年と言われるより修道女 本人は気付いていないが と言われる方が納得するだろう姿だった。

「ユー、起きてる？」

凜とした美しさを感じさせながらもどこか優しさを感じる声が聞こえると少年は祈りを止めて声のした方を向いた。

「起きてるよ」

実際自分にとって睡眠とは必要がなくなったただの娯楽の様なものだが、それを言ったら目の前にいる少女はきつと無理やりにも寝かせようとするのが容易に想像出来るので言いはしない。

「それは良いことだ。人間にとって早寝早起きは良いことだからね」少女は満足そうな顔をした。正直少女がどうしてここまで人間に拘めるのか自分には良く分らないがそこは少女の個性だとして考えようと俺は思った。

「それにしてもシスターが生き物を殺すなんてねえ」

「俺はシスターじゃないし、それ以前に魔術師だ」

自分が人間でないということは分っていたが詳しいことはよく覚え

ていないので少女が言うには魔術が使える者を魔術師と言うそうなので便宜上魔術師と少年は言っていた。

「でもシスターの得意魔術が破壊関係って・・・」

「だから俺はシスターじゃない。そもそも俺を修道士にしたのは君だろう。俺よりも君の創造の方がよっぽどの姿が似合うと思うよ。」

実際自分たちがどういう存在なのかは薄々気づいていた。だがその言葉を口にするとかこの関係が変わってしまうのではないかと俺達は考えていた。

「まあまあ、良いでしょそんなこと」

「そんな事って・・・」

自分にとってはそんな事ではないのだが・・・だが言っても少女が気にすることなんて無いということが分っているのだから言うても無駄だと俺は考え直した。

「今日は何するの？」

「決まってるでしょ。貴方の世界に色を付けるのよ」

《

「・・・」

彼女と出会い2カ月が経つが、未だに俺の世界には彼女以外のモノには色がなくモノクロの世界だった。少女もそんな俺を気にかけて

くれ色々なことを教えてくれたり他の生き物とも出会ったりなど頑張ってくれていた。

「そんな心配そうな顔しないで・・・」

自分のせいで少女を縛っているのではないかと考えているのが伝わったのだろう。少女は優しく微笑んだ。

「私は貴方の傍にいるから」

「・・・ありがとう」

少女の言葉に俺は情けなく思いながらもそう答えるしかなかった。

九話 『殺神鬼』く序章 ？く（後書き）

すこし間があいてしまいました。夏休みって結構忙しいと改めて感じさせられております。

正直話が長すぎるかなあと思っているのですが、わけないと長くなるのが目に見えているので複雑です。

感想、質問があればよろしく願います。



十話 『殺神鬼』く序章 目覚めく（前書き）

お久しぶりです。課題という地獄から解放されようやく復帰できます。今回は少し短めです。

十話 『殺神鬼』 序章 目覚め

目の前は辺り一面が赤く染まっている。火は燃え広がり、周りには赤黒く染まる何かが広がっている。

「くそっ!!」

その地獄の中を俺は走っている。どこを見てもあるのは死体と瓦礫、そればかりが続いていた。それを見て心の中には不安ばかりが広がっていた。

「どこだ、どこにいるんだ・・・」

「――!!」

俺が走っていると目の前には体中を血で赤黒く染めた鬼の様な生物が現れた。

「邪魔なんだよ!!」

俺はその鬼に右手を向け何かを握りつぶす動作をする。ただそれだけで目の前にいる敵は消えうせる。

地獄の中を走り続けようやく教会が見えてきた。きっと彼女はここにいる。

「――!!」

「ユ・・・ウ・・・」

「!？」

教会の扉を開けた俺の目の前には床に倒れ伏した彼女の姿が写った。

「大丈夫か!？」

「だい．．．じよ、ぶ．．．に．．．見える？」

「しっかりしろ!!」

「ユー．．．最．．．後に、ひ．．．と．．．つだ．．．け聞い．．．て」

「聞いてやる、聞いてやるから最後なんて言うな!!」

「あのね．．．」

俺は彼女が消えてしまわないように力強く抱きしめた。しかし、彼女が少しずつ冷たくなっていくのが感じた。それでも彼女は俺に微笑んで言った。

「．．．．．っ」

俺は寄りかかっていた柱から背を離し身を起こした。

「寝てたのか．．．．」

おかげで最悪な夢を見た。

「お前の願いは必ず叶えるからな」

俺はかつての『聖女』と呼ばれた彼女との約束を自分に言い聞かせるように言った。

十一話 『処刑人』と『境界』と『願い』（前書き）

今日は二つ、出来たら三つ投稿するようになりたいと思います。

## 十一話 『処刑人』と『境界』と『願い』

「『断罪』」  
ギロチン

俺は手に持っている黒と銀で染め上げられた剣で相手の首筋に傷をつけた。傷をつけただけの首はゆっくりとその主の胴体から離れて行った。

「・・・・・・・・・・」

俺は蔑むようにその姿を見つめていた。その瞳にあるのは憤怒だけだった。

俺は歩きながら一人また一人と首を落としていった。どうして世界は『彼女』を否定する。世界が『彼女』の敵だというのは俺は世界の敵になろう。全ての『人間』が彼女を殺すというならば俺は全ての人間を殺そう。それが『俺』なのだから

そして俺は死体の山の上で『彼女』の骸の前に立ち・・・・彼女の願いを叶える事を誓った。『俺』が『俺』であるために

「・・・・・・・・・・」

俺は全身に汗をかきながらゆっくりと体を起こした。

「・・・・・・・・・・暑い」

既に季節は夏に迫っていた。俺が目覚めてから一カ月が経った現代の事にももう慣れ俺はのんびりと生活していた。

「でも、昔と違って暴れられないのは残念だ」

それさえよければ俺はこの生活を気に入るのに……。今日は彩も用事があるとかいないし一層暇だ。

「街にでも出るか……」

「やはり何時見ても何というかはしゃぎそうになっちまうな」

元々俺がここまでの文明を見た事が無かったからなんだが、興奮はなかなか冷めないな。

俺はこちらを好奇心の目で見てくる人々の視線を気にせず街中を歩いていた。

「というか何で皆こっちを見る……」

今の俺は黒のスーツを少し着崩してはいるが何だそこまでだらしないのか？それとも髪と目か？俺の髪は金髪で日本人としてはありえないだろうしなあ能力で今は瞳も紅だからなおさらか……

気にならないと言ったもののいい加減鬱陶しくなったので俺はスーツをすぐに直しきちんとした格好になり髪と瞳は……。諦めた。

「……ここまでやって変わらないとは。あれかとはたから見たら俺はそんなに落ち着きが無いように見えているのか？」

だとしたら恥ずかしいな。俺はそう思いなるべく表に出さないように再び歩き出そうとした。

「お兄ちゃん」

が、俺はすぐにその足を止めた。いや止めざるを得なかった。なぜならそれは俺が目覚めて最も印象強く残っている人物だからだ。

「お久しぶりだね、お嬢ちゃん」

俺は真後ろにいる少女に微笑んだ。

「お久しぶり、お兄ちゃん」

少女もそれにこたえるように笑った。

「改めて、お久しぶり。名前は言ってなかったよね？フィーナ・ヴァレンシュタインだよ　よろしくお兄ちゃん」

「ああ、俺の名前はユーヘルト・ヴァーミリオンだ。よろしくフィーナ」

俺達は今街中にある喫茶店で向かい合って自己紹介をしている。ここに来るまで人の目が凄かった。フィーナも俺と同じく金髪に紅といるところから兄弟のように見られていた。フィーナが可愛いというもあるんだろうが　フィーナが言うには俺もイケメン（？）というものだかららしいが

彼女は純白のワンピースを着て頭には麦わら帽子を被っていた。今はとっているが人形のように見える可愛らしさだ。・・・言っておくが俺は決してロリコンではない。



「それでも貴族なんだよ！」

フィーナは胸を張って言った。

「でも勝手に来て大丈夫なのか？」

「大丈夫！お姉ちゃんにはちゃんとやってあるから！それよりも私はお兄ちゃんの名前にビックリだよ！！」

「？何で？」

「だってヴァーミリオンって『聖女』の名前でしょ！？それを持ってるってことはお兄ちゃんは血縁者なの？」

俺はその言葉に苦笑しつつ成程と思った。

「有名だったもんね。まあ、血縁者と言うより相棒って方が近いかもな・・・」

「へえ、お兄ちゃんが強いのも納得だよ。」

フィーナはそう言ってアイステイのストローに口をつけた。

「しかし、日が出てても平気なんて驚きだよ。」

吸血鬼は本来そうやすやすと日の光を浴びていいものではない、能力低下はもちろん下手したら焼け死ぬ。俺が感心したように言うとフィーナは少し照れながらも

「うん、真祖じゃないけど能力を使ったりして頑張ったんだよ」

そう満面の笑みで言ってきた。

「そう言えば、今回は襲ってこなかったんだな」

「うん、昼は人の目も多いしね。それに今日はお誘いに来たの」  
「誘い？」

「うん、今夜零時ここに来て。二人つきりだよ？楽しみにしてるから」

そう言つてフィーナは店から出て行つた。

「……………」

俺はフィーナから渡されたものをもう一度見た

今夜零時、場所は境界の大聖堂にてお待ちしております。  
フィーナ・ヴァレレンシュタイン

よりによつて『境界』か……………」

『境界』、かつて全ての神と人間と妖怪、悪魔がそれぞれの命を賭けて戦い合つた1つの世界。悪魔たちの世界である『地獄』と神の世界である『天界』、そして人間や妖怪達が住まう『現界』の間にある無法地帯。そして……………」

「……………」俺』と『聖女』の願いの場所」

俺の呟きは外の喧騒に消え俺は席を立つた。

今日彩がいなくてホントに助かった。もしいたらまた面倒臭い事になつていた。

「久しぶりに本気で行くか」

この前の戦闘から本気でいった方が良さだろう。

「こい、我が僕たちよ」

その言葉と共に俺の影からは赤黒くさまった影が噴き出した。

影は俺を包み込むように噴出しそれによって次第に俺の姿が変わっていった髪は黒く染まり目はその輝きを増した。やがて影が消え俺の右腕には闇を表す漆黒と光を表す銀で染め上げられた剣が握られていた。

「・・・ふんっ」

俺はその剣を振り下ろした。たったそれだけで『境界』への道を開ける。

俺は剣を振り下ろして出来た穴をくぐって行っただ。

「La~~~~、La~~~~」

フィーナは大聖堂の中で歌っていた純白のドレスに身を包み月明かりに照らされながら、もしこの光景を他のものが見ていたら必ずこう答えるだろう『天使』と……

ガタン！

大聖堂の扉を開ける音に気付いたフィーナは先ほどよりも美しく可愛らしく微笑み扉の方を向いた。そこにいる人物へと……

「こんばんわ、ユーヘルト・ヴァーミリオン。」

「ああ、こんばんわ。フィーナ・ヴァレンシュタイン嬢」

「ここに来たという事は分かってるよね？」

ユーヘルトはその言葉に気を引き締め、フィーナは笑い

「さあ！！踊りましょう！！！！楽しませてね、お兄ちゃん！！！！！！」

戦いが始まった。

## 十二話 終幕（前書き）

久しぶりの戦闘回です。前よりは良く書けた・・・かな？  
良ければ感想ください。

## 十二話 終幕

ユーヘルトとフィーナは互いに睨み合い動こうとしなかった。隙を見せれば間違いなく殺られる。しかし互いに隙が無いのならつくるのみ。

「いくよー！ー！！！」

先に動き出したのはフィーナだった。フィーナはユーヘルトへと手を向けるとその手から無数の深紅の槍が飛んできた。

「なめんなよっ！！！」

それをユーヘルトは右手に持つ剣で次々と打ち落としていく。

「お次はこっちの番だ！！！」

ユーヘルトはそう言うのと剣をフィーナの方へ突く動作をする。フィーナはその行動に首を傾げるがそれはすぐに驚愕へと変わった。ユーヘルトの持っている剣から次々と他の剣や槍や斧が木の枝のようにこちらへ向かってきたからである。

「っ！？」

その攻撃を何とか回避するもフィーナの体には多くの切り傷がついていた。しかしその傷も吸血鬼の持ち前の再生力によって元通りになっってしまった。

「やっぱりすごいよお兄ちゃん！！！」

フィーナはそう喜び先ほどよりも多くの魔力で作られた弾 魔  
弾 を放ってくる。

「とんでもねえ弾幕だなおい!!」

回避は無理だと判断したユーヘルトは右手にある剣を地面に刺した。

「星の護り手よ!!」  
ほし まもりて

その言葉と共に地面に刺した剣は姿を変え青い光の壁となり魔弾を  
防いだ。

「オラアッ!!!」

魔弾を防ぎ終わると同時にユーヘルトはフィーナへと向かい剣を袈  
裟懸けに振り下ろした。

「アハハハ!!!!!!」

その剣をフィーナ右手に作り出した白い剣によって防いだ。  
ガキイイイイイン!!!!

互いに負けじと剣を鏑迫り合う、するとフィーナが自らの背後に魔  
方陣を出現させそこから紅いレーザーを放ってきた。

「チッ!」

けれどもユーヘルトは後ろへ下がらず逆に前へと進みフィーナとの  
距離を詰めた。そして剣を滑らせるようにフィーナを切りつけた。

「まだまだあ!!!!!!!!!!!!!!」

ユーヘルトは次々とフィーナを切りつけていった。傷が治る前に多くの傷をつけていく。いくら吸血鬼とはいえ決して死なない訳ではない。特殊な能力や真祖でない限り殺すことは出来る。ユーヘルトはサマーソルトをかけると左から右へと切りつけた。フィーナは全身を血で赤く染め重力に従って下へと落ちた。

「・・・・やったのか？」

訝しんでいると。ユーヘルトは辺りを見てあることに気付いた。

「（血が落ちていない！？まさか！！）」

辺りにはフィーナが流した血が漂い徐々にだがそれは魔方陣を描いていた。

「まづっ！！！」

ドゴオオオオオオオオン!!!!!!!!!!

ユーヘルトのその言葉は全方位にある魔方陣からの光と轟音によりかき消された。

「・・・・この程度じゃやられないよね。・・・お兄ちゃん」

フィーナは煙に包まれた場所を見て笑いながら言った。

「当たり前だ。正直少し焦ったが」



その言葉に答えるようにユーヘルトは煙の中から姿を現した。

「悪いが少し本気で行くぞ」

「終わりにき罰」  
エンドレスパニッシュ

ユーヘルトの周りに魔方阵が展開され、無数の黒と銀のナイフと巨大な釘の様な形をした赤黒いモノが六本現れた。

「やれ」

その言葉と共に展開された術式はフィーナへと殺到していった。

「全部！壊れちゃえー！！！！」

フィーナはそう言うのと両手をナイフと杭の群れへと向け

「壊れた玩具の心臓」  
ブローケン・ユア・マインド

握りつぶした。それだけで目の前にあったナイフは次々と壊れていくだがそれでもまだ目の前には視界を覆い尽くすほどのナイフと六本の杭があった。

「はあああああああ！！！！」

しかしフィーナはそれを次々に壊していく。無数にあったナイフも着実にその数を減らされていった。

「がつ！！」

それでもやがてナイフはフィーナを襲っていった。体中にナイフが突き刺さるうともフィーナは目の前に迫りくるナイフと杭を破壊し続けた。

「・・・はっ、はあ・・・はあ」

「まさか今の防ぐとは思わなかったぞ」

ユーヘルトは驚いたような口調で言った。

「これで終わりだよ・・・お兄ちゃん」

限界が近いのだろうフィーナは右手に残っている全ての魔力をかき集めた。右手には人の血のように紅い魔力の塊が出来てきていた。

「ああ、終わりだ」

ユーヘルトもこれに答えるように右手にある剣に魔力を集めた。剣もまたその姿を変え巨大な剣とも槍とも言える形をした白い焰へと姿を変えていった。

「レッド・クイーン  
赤の女王」

「グランシャリオン  
夜空照らし光の刃」

赤と白の二つの力が攻めぎ合う。

「ハアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

何時間にも感じるその拮抗は数秒で終わった。

「あつ・・・」

「オオオオオオオオオオ！！！」

赤の光は白い光に飲み込まれ二人のいる空間は白く染まった。

## 十二話 終幕（後書き）

ルビが上手く出来ませんorz  
どなたか分る方いましたらどうか教えてください!!!

## 十三話 神様と同居人（前書き）

今回はフィーナ視点でお送りします。

### 十三話 神様と同居人

「・・・・ここは？」

目が覚めた私は簡素な造りのベッドで寝かされていた。

「私は・・・・」

そこまで言って私は思い出した。私はお兄ちゃんと戦って・・・

「そっか、負けちゃったのか・・・」

でも何でこんな所で寝てるんだろ？私がそう考えていると部屋の扉が開きそこには右頬を赤く腫らしたお兄ちゃんがいた。・・・・何で頬が腫れてるんだろう？お兄ちゃんは私が起きたのを見ると、にへらっと笑って私の傍に来た。

「よっ、気分はどうだ？」

「んっ、大丈夫」

私がそう答えるとお兄ちゃんはそうか、と言って私の近くに椅子を持ってきて座った。

「なあ、お前家は大丈夫なのか？」

「どうして？」

「いや、前に姉ちゃんがいるって言ってただろう」

私はあぁって言って姉の事を思い出した。大丈夫かなあ、姉は結構心配性だから私が黙っていなくなってる心配しているだろうなあ。

「でも私自分の家が分らないんだ」

「分らない？」

「うん、私ここに来る時はお姉ちゃんのを能力を借りて無断で来たから、お姉ちゃんがここにすることが分ないとダメなんだ」

私はそう言うとお兄ちゃんは、はあ？と間抜けな顔をして言った。

「じゃあお前俺に勝ったら帰りはどうするつもりだったんだよ」

「ふふふ、ホントだね」

お兄ちゃんのそんな言葉を聞いて私は思わず笑ってしまった。今考えれば邪魔が入らないとはいえ無茶をしちゃったなあ。お兄ちゃんは私のその様子を見るとボリボリと頭を掻き私に向かい言った。

「なら、お前の姉ちゃんがお前を見つけるまで俺の家に来るか？」

私は思わず驚いてしまった。今は仲良く話しているけれど私は敵だ。それなのにこのお兄ちゃんは敵である私を家に来ないかと誘っている。

「……………ねえ、何でお兄ちゃんはそんなに優しいの？」

さっきだつて寝ている時に私を殺してしまうのは簡単だったはずだ。私がそう聞くとお兄ちゃんはニヤニヤと笑った。

「そうだな・・・気分、ていうのもあるけど。一番は気に入ったからかな」

「気に入ったから？」

「そう、気に入ったから。それに女子供を殺すのは気が引けるんだよな」

そう言つてお兄ちゃんは今まで見せなかった大切なものをみるような優しいけれど哀しそうな顔で笑った。その時私は思った、きつとこの人は馬鹿なんだろう。お人好しで騙されようと愚直に生きていくきつとそんな人なんだろうと。何だろう・・・

「お兄ちゃんつてロリコン？」

私がそう言つとお兄ちゃんはorzというポーズをして落ち込みだした。それを見て何だか面白くなつてつい私は笑つてしまい、何だかこんな生活も悪くないと私は思つてしまった。

「それじゃあ、これからお邪魔しちゃうかな」

私がそう言つて右手をだすとお兄ちゃんもニツと笑い私の右手を握った。

「ああ。これからよろしくなフィーナ。・・・おっと出来ればお兄ちゃんじゃなくてユーって呼んでくれ中の良い奴は大体そう呼んでるから」



「分った。よろしくねユー」

こうして私のこれからの生活が決まった。とりあえずは・・・

「ユー扉の向こうにいる人は誰？」

私がそう言くとユーは水たまりが出来るんじゃないかという程の脂汗をかきだした。

その後ユーは扉の向こうにいた女の人にボコボコにされました。終わり。

### 十三話 神様と同居人（後書き）

こんな感じでどうでしょうか。感想、アドバイスなどがもしあれば  
よろしく願います。

## 十四話 神様と家族(?) 旅行

フィーナが家に住み始めてから一週間がたった。一番の問題である彩も何とか説得し 骨を幾つかやられたが 今では二人の間にあつた壁もほとんど無くなり平和に暮らしている。

「なあ、彩」

「何？」

「・・・暇だ」

「知らないわよ」

退屈だ ああ退屈だ 退屈だ。最近は特に退屈だ。やることもなく俺は縁側でごろりと横になった。

「・・・どつかで事件でも起きないかなあ」

「変なこと言っていないで暇ならフィーナの相手でもしてなさい」

「・・・フィーナの相手ねえ」

フィーナの相手をしてもらいたいが。如何せんフィーナがとんでもない程に強い。将棋や囲碁、チェスを試しにやってみたら圧倒的だ。しかも地味にこちらが何とか攻撃に移せるようにしてきやがる。まるでこちらが必死に足掻いているのを上から嘲うかのようだ。他のテレビゲームなんてのもやっても同じだ。悪魔の貴族は化け物か。

「どうすつかねえ」

今暇を潰せること……

「どっか皆で出かけるか」

「神が自分の神社放つといてどうすんのよ」

「結界張つとけば問題なしだ」

「何が何でも行くのね」

「おうよ、フィーナー出かけるぞー!!」

「お出かけー!!どこ行くの!!」

「そうだな……そうだ京都に行こう」

「京都!？」

俺の提案に彩は驚き手に持っていた。箒を落とした。

「ちょ、ちよつと待ちなさい!!」

「何だよ」

「京都って一体何日出かけるの!？」

「無論飽きるまでだ」

「そしたら準備だつてあるし、いろいろ大変でしょうが」

「知らん。思いついたら即行動だ。フィーナ準備するぞ!!」

「うん!」

「ま、待ちなさい!!!」

後ろで彩が何か言ってるが無視だ無視。俺とフィーナはすぐさま部屋に戻り旅行の準備をする。彩もついには諦めたのか自分の部屋に戻り旅行の準備を始めた。

「よし、全員準備OKだな」

俺が確認すると二人とも頷き俺は神社に結界を張りついでに式も置いといた。もし何かあれば式から俺へと連絡が来るのでこれで問題はない。

「それじゃ、行くぞー!!」

「おー!!!」

俺の声とともに手を上にあげ元気に声をだすフィーナ。初めての三人での旅行で何だかんだ楽しみにしているのだろう笑顔で一緒に歩く彩。それを見て俺はこの案をだして良かったと上機嫌で出発した。

## 十五話 神様と天井と京都巡り（前書き）

昨日の失敗は今日の成功のための伏線だったのだ――！！！！  
・・・・はい、実は書き溜めていた分の小説間違えて消してしまいました。  
o r z

## 十五話 神様と天井と京都巡り

やって来ました皆さん！！京都です、京都に着きました。ここまで来るのに大変だった。フィーナに電車の乗り方を教えたり、フィーナが迷子になったり、フィーナが駅弁を買いに行ったら電車のドアが閉ったり・・・フィーナさん？あなた俺より現代っ子ですよ？

まあ、何はともあれ京都に到着だ。

「さあ、これが京都だ！！」

「わー！！！！」

「二人ともあんまり大きな声出さないで、周りの人から注目されるから」

なんだお前らそんなにこつちを見ても何もやらんぞ。

「さて京都に着いて一番最初に行き先は・・・」

「それは？」

「今日泊まるためのホテルを探すぞ」

「ええー！！！！」

しょうがないだろ。急な予定だったんだから。俺は後ろから聞こえる二人の文句を無視して今日泊まるための場所を探すために歩き出した。

「ここはどうよ？」

俺達は今高級とは言えないまでもそこそこ良い様に見える旅館の前にいた。

「まあ、良いんじゃない」

「早くお出かけしたいよー」

俺は二人からの了承とフィーナの声を聞くと目の前の旅館へと入って行っただ。

「ふむ、まあ、なかなかかな」

中に入って内装などを見ると中も外同様になかなかの造りになっている。

「はい、紅坂様ですね。こちらお部屋の鍵でございます。どうぞ、ゆっくりしてってください」

「ああ、どうも。お～～い行くぞ二人とも」



俺は受付から部屋の鍵を受け取ると二人を呼び部屋へと向かった。  
あ、ちなみに紅坂つてのは俺の名前だ。創作時間30秒の適当に作  
った名前だ。どうせ今回しかこの名前は使わないだろうし適当でも  
構わないだろう。

「402・・・ここで会ってるな」

俺は渡された鍵の番号を確認するとドアを開け・・・・・・・・硬直し

ボタン

ドアを閉めた。・・・・・・・・うんあれだきつと久しぶりに旅行なんてし  
たから疲れたんだな。俺はそう思いもう一度ドアを開けた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

うん、問題ないな。部屋は和室でなかなか快適そうだった。俺は先  
程見たものがない様に念のため部屋を注意深く見まわした。畳、テ  
ーブル、座布団、障子、窓の外、テレビの裏・・・・・・・・最後にふ  
すまの中を確認した。・・・・・・・・何もないな。俺がそう思い肩から  
力を抜き上を見上げ、再び硬直した。

「「????」」

俺の行動を疑問に思ったのだろう。二人は首を傾げ俺と同じく天井  
を見上げ同じく硬直した。

「・・・・・・・・ずずず」

お茶を啜っていた。いや、これじゃ分らないか。正確には俺が最初

に見た時と同じ人が天井に（・・・）正座しのんびりとお茶を啜っていた。それを見て絶句する俺達。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・すすっ」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・ん？」

あっ気付いた。

「・・・・・・・・・・（にっ）」

えっ、笑っただけ俺にどう反応しろと！？

その様子をみて俺達は一度顔を見合わせもう一度天井を見上げると、先程までいた女性は消えていた。

「・・・・・・・・・・」

アイコンタクト会議の結果。とりあえず俺達は何も見なかった。見なかったんだ・・・・・・ということにした。

「すごい、すごいよユー！！彩！！」

俺達は今旅館を出て京都の街を観光していた。

「しかし、やっぱり時代が変われば随分変わるもんだな」

改めて自分がどれだけの時間眠っていたかが良く分る。

「そりゃあそうでしょ。科学が発達してきてるからね」

「は～～昔はここらも奇麗だったんだがな」

「ユー！！！！次はあそこ行きたい！！」

そう言ってフィーナが指したのは一つの店だった。

「ありゃあ・・・甘味処か」

甘味処つてのはもう古いのか？とりあえず・・・

「もう15件目だぞ」

どれだけ食うつもりなんだ。

「お金の心配がないとは言え恐ろしいわね」

まったくだ。俺は心の中でそう答えるとフィーナの後を追った。

「今日はこんなところかな」

俺がそう言つと二人とも満足したのか笑いなが頷いた。空ももう日が沈み始め夕陽で赤く染まっていた。

「さて二人とも準備は良いな？」

俺がそう言つと二人とも真剣な表情で頷いた。そうこれは決して気を抜いてはいけない。

「それじゃあ……行くぞ!!」

俺はそう言つとともにドアを勢いよく開け即座に部屋に入り天井を含め辺りを見回した。

「……いないな」

そう俺達が入ってきた時の女性が入ってきていないか確認していたのだ。彼女がいないことを確認すると俺達は温泉へ行くための準備を始めた。何でもこここの浴場はとんでもなく広いらしい。全員が準備を終えると俺達は部屋を出て浴場へ向かった。

あつ、サービスシーンなんてものは無いから期待すんなよ？

## 十五話 神様と天井と京都巡り（後書き）

はい、前に書いた時の記憶を頑張っと思い出しつつ書きました。取りあえず場面が変わったりする場合なるべく今回の様な感じの区切りを入れていきたいと思います。ではまた次回で

## 十六話 神様と彩とフィーナ

京都に来て今日で二日目。さすがに一日で全てを回れるほど京都は甘くなかった。予定としては何時帰るかは特に決めていなかったりなので問題はないが。

「明日、明後日のうちに奈良も見ておきたいな」

「少し予定増やしすぎじゃない？」

「大丈夫だ、問題ない」

「大丈夫じゃない、問題だ」

俺と彩が朝からそんなやり取りをしているとフィーナが目を覚ましてしまった。まだ眠いのか　　といつてもすでに9時を回っているのだが　　目を擦っている。

「おはようフィーナ」

「おはようさん」

「んっっ・・・ふぁ・・・おはよう」

何この娘可愛いんだけど。彩も同じことを思ったのかいつもより笑顔が10割増しでまぶしい。ああ言つとくが彩の笑顔の基本値は10分の3ぐっ「ごっつー!!」

「・・・い・・・いきなりなんだよ」





「とりあえず今日は昨日回れなかった所行くか」

「ねえn」言っておくが今日はあんまり寄り道はしないからな」ちえっ」

「明日だつてあるんだからいいじゃない」

「明日は奈良に行きたい気分だ」

「ああ、どうしても奈良には行きたいのね」

今朝(？)俺が言っていたことが本当だと思っていなかったのか彩は大きいため息をついた。全く失礼な奴だ。

「まあ今日は大体寺だな」

というか昨日はほとんど寄り道で終わったからな。

「まずは〴〵清水寺からだなその後は近いところから行って最後は・  
・・・金閣でいいか」



「えへへ　楽しそうだね」

# 清明神社

「生命神社？」

「いやそちのせいめいじゃなくて阿部清明の清明だから」

「誰？」

「あゝなんつうだろう。まあ妖怪退治のプロってところか・・・  
・。ちなみに実力は相当なもんだった。」

「え、あつた事あるの？」

「ああ、前にな」

「へえ」

その後も俺達は様々な所へ行き体験談などを語ったりなどした。  
・。ちなみにフィーナに余計なことはもう言はないと俺は心の中で  
固く誓った。

# 金閣

「凄い金ぴかだね」

「まったくだ。無駄な金使いやがって」

「ほんとね。家の寶錢箱に誰か入れてくれないかしら」

そんな事を言い合っていると辺りは暗くなっており既に他の観光客の姿もなかった。ただこの感じは……

「……お前ら」

「ええ」

「分ってるよ」

俺達はそう言うところから奇襲が来ようと対応できるよう気を張り詰めた。そして俺達が辺りを警戒していると突然真下から紫に発光した。

「なっ、転移術!!」

視界が紫の光に塗り潰され光が収まった時には俺は二人とは引き離されどこか分らない屋敷の門の前にいた。

「……何処だここは？」

「ここは妖怪達が住む桜花殿だ」

俺が辺りを見回し呟くと上から声が聞こえてきた。上を見るとそこには陣羽織を着、背には自らの背丈を優に超える野太刀を背負った正しく侍とでも言うべき様な人物が満月を背に立っていた。

「貴殿の相手は拙者がしよう」

「他の奴らは」

「何、心配など要らぬ。無事であるよ。最も今は、だがな」

男はそう言つと背負っていた野太刀を抜きこちらにその切っ先を向けた。

「ちつ、面倒くせえ」

「拙者の名は水月刀断。推して参る！！！」

## 十六話 神様と彩とフィーナ（後書き）

今回はこんな感じでどうでしょう。

次回は他の二人のバトルシーンを書いて行きたいと思います。彩の能力もそろそろだそうかな・・・

## 十七話 2人と襲撃者

side 彩

「っ……ここは？」

私が転移術の光に飲まれ目を開けるとどこか森の様な所だった。辺りの暗さからさすがに国外ということはないだろう。問題はどう二人と合流するか……。敵のねらいはおそらく分断しての各個撃破。さすがにユーは心配いらなだろう。むしろ敵と周りの地形が変わっていないかが心配だ。となるとまずはフィーナを探した方がいいか。

「さっさと出て来てくれない？こっちは時間が惜しいのよ」

私はわずかだが気配のする方向に顔を向ける。

「ふむ、さすがにこれぐらいの事は出来るか……」

そこには正しく赤鬼とでも言うべき姿をした妖怪がいた。全身が赤く染まっており身長は2メートルを裕に超えるだろう巨体、そして額には一本の角があった。

「鬼……で間違いないようね」

「むしろそれ以外に見えていたら不味かろう」

鬼はそう言って豪快に笑った。その姿は見た目と相まってとても似合っていた。

「それで？何の用かしら。さつきも言っただけど急いでるのよ」

「なあに、簡単じゃよ。ただ俺の相手をしてくれれば良い」

「面倒臭いわね」

「儂としてはあの男か小娘が良かったんだがお。あっちの方が楽しめそうじゃ」

「・・・それはどういう意味かしら」

私は目の前の鬼を睨む。

「そのままの意味じゃよ。主よりもあちらの二人の方が強かるうて」

その言葉を聞いた瞬間私は目の前の鬼に殺気をぶつける。

「言ってくれるじゃない。貴方はただじゃ済まさないわよ」

「言っのおただの巫女にそれが出来るかの」

「残念ながらただの巫女じゃないわよ！！」

私はそう言った瞬間鬼の顔にひざ蹴りを入れた。その衝撃に後ろに倒れこむ鬼。私はそこから後ろへと回り込み背中へと肘打ちをし靈力を込めた弾を次々と放った。

「・・・・・・・・」



私は鬼の吹きとんだ方向を油断せずに構える。手ごたえがあつたとはいえ相手は鬼だ。戦闘能力だけなら間違ひなく最強クラスの敵、油断をして一撃でも喰らつたら危険だ。

「くくく、くはははははは！……少々主を甘く見ていたようだのお。済まんかったなあ！！！」

事実鬼は平然とした様子で愉快そうに笑いながら出てきた。

「済まんかったのう、未熟者だと思つていたがとんでもない巫女じや。儂も本気で行かせてもらおうかのう」

鬼はそう言々と今まで押さえていた妖力を解放する。ただそれだけで周りの木々はざわめき息苦しくなる。

「我が名は爆鎖！！桜花殿が誇る鬼神なり！！」

「水面神社が巫女彩！！貴方を退治する！！」

その声とともに私と鬼。『鬼神』爆鎖との闘いが始まった。

Sideフィーナ

[illegible]

私は今湖の前にいた。転移された私はとりあえず周りの様子を確認するために空を飛んでいたのだが、飛んでいるとちょうどこの湖を見つけたのだ。

「ん？」

私がどうするか考えていると感じたことのある力を感じた。これは・  
・・・彩かな？どうやら敵と遭遇して戦闘になっただけらしい。

「とりあえずは彩の方に行こうかな」

まずは合流した方がいいだろう。

「よしまずはそうさ。もう行っちゃうんですか？」・・・誰？」

人が喋っている時　一人言ではあるが　に。私は声をかけてきた人の方を向くとさっきまでは誰もいなかったはずの湖の真ん中に女の人がいた。

「おこんばんわ。四方院家やらせてもらっておるんや。亀井花湖と言いますわ」

女の人はそう言うのにこりと笑った。私から見てもそれはとても似合っていて綺麗だった。

「こんにちわ。私に名前はフィーナ・ヴァレンシュタインだよ。よろしくね」

私も相手に自己紹介をした。名前を言われたのに自分が言はないなんて失礼だもんね。

「それで亀井「花湖でええや」花湖はどうしてこんな所にいるの？」

それに四方院家って何？」

私は疑問に思っていたことを言った。すると花湖は何処からか出した扇子で口元を覆い隠し愉快そうに笑った。

「そうどすなあ。まず、四方院家としゃべるのは京都に東西南北それぞれに配置されとる名家のモン達のことや。それぞれ北が玄武、南が朱雀、東に青竜、ほんで西に白虎とそれぞれ四神を所有したはるんや。ほしてうちがここにおるのは・・・あんさんの相手をするさかいによ」

花湖はそう言うともそれまでも笑顔から一転、さっきの笑顔が嘘の様なほどの殺気をぶつけてきた。

「北の玄武、亀井花湖。本気で行きますえ」

「吸血鬼、フィーナ・バレンシュタイン。喜んで？今から貴方を壊してあげる」

敵ならば壊しても構わない。私はそう結論付け目の前にいる花湖に全力を出した。

## 十七話 2人と襲撃者（後書き）

なんか中途半端かなあ。でもなあ・・・

とりあえず活動報告にも書きましたがレイアウト変えてみてついでに章を付けてみました。

それとキャラの名前ですが亀井<sup>きいかし</sup>花湖と読みます。ちなみに京都弁。分りづらいかもしれませんが勘弁してください。

花湖よ、なぜ京都弁なんて分りづらい言葉なんだ。・・・自分で書いて結構大変だったよ

## 十八話 神様の本気（前書き）

最近になってようやくPVの見方などを覚え始めました。  
とりあえずは明日も更新はする予定です。

## 十八話 神様の本気

「……っらあ!!!」

神速。正しくその通りの速度で迫る刃を俺は手に持っているナイフで弾く。しかしその一撃に耐えられなかったのかナイフは粉々に碎け散った。

「畜生が!!! 何でこの時代の奴らは皆バケモンみてえに強いんだよ!!!」

俺はそれを見てそう毒づく、刀断の扱う剣技は型にはまったものではなく、闘いの中で磨かれていった無骨なものだ。だがそれだからこそあらゆる攻撃に対応し逆にこちらを追いつめてくる。

「ちっ、喰らい尽くせ!!!」

俺は蹂躪せし暴君を発動する。少し前の俺なら詠唱の必要があったがフィーナとの戦闘や最近の鍛錬のおかげで全盛期程ではないまでも十分に戦える。

「そんなもの断つまでよ!」

刀断はそう言うのと野太刀を上段から振り下ろす。それによって刀断に向かっていていた影は真つ二つにされる。

「今度はこちらから行くぞ」

刀断は刀を構え一閃、その瞬間に俺は木の蔭へと隠れる。すると隠

れていた木は二つに両断される。刀断の能力は文字通り『断つ』能力。既に何回か喰えないか試したものの結果は喰った瞬間に断たれた。

「はあっ！」

一瞬にして俺の背後へと回り次々と斬撃を繰り出す刀断。

「ぐっ！くっそがあゝ！！！」

一撃目と二撃目は躲せたものの次から次へ繰り出される斬撃に俺は体中を切り刻まれる。

「覇！！」

「っがあゝあゝあゝあゝあゝ！！！！！！」

刀断は懷から一枚の札を出し俺に投げつけた瞬間、その声とともに俺の全身を痛みが襲った。

「ち・・くしょう、が」

s a i d 刀断

「よもやこの程度で終わりではあるまいな」

拙者は今の衝撃によって煙に包まれた場所をみて言った。しかし――

向に煙の中からは動く気配がない。眠りから覚めたばかりとはいえまさかあの程度の力とは……

「とんだ期待はずれだったか。やはり老いとは恐ろしいものよ」

とんだ鈍刀だったな。拙者はそう思い門へと足を進めた。

「誰が爺だゴラ。喰い殺すぞクソ餓鬼」

煙からではなくそこは見当違いの方向からその声は聞こえた。見ると奴は一本の木の上にたち此方を見降ろしていた。だが、その姿は先程とは変わっていた。目は先程よりもより紅く獲物を狩る獣の様な眼、髪は黒に、そしてその表情は何が可笑しいのか不敵に笑っていた。

「ほう、まだそれだけ動けたか」

「いやいや、これでも結構効いてるぜ」

「ほざけ。それだけ動けて何を言うか」

現に奴には先程受けた傷は全くなっている。

「ま、さっきまでの俺ならきついだろうな」

「ほう、今のお前は違つと？」

「ああ、今の俺はユーヘルト・ヴァーミリオンというよりもアレイスター・クロウリーと言った方が分りやすいかもしれないな」



奴は昔の気に入った名前だがな、と言って肩をすくめた。

「アレイスター・クロウリ・・・稀代の魔術師か」

「ああ、違う違う。あれは違えよ。俺はアイツに魔術を教えはしたが名前は勝手にアイツが俺のを使っただよ」

「つまり奴はお前の名を語った偽物だとしても？」

「まあ俺の弟子みたいなものだから名前の継承は構いやしなから偽物ってわけじゃないな。正確にはアレイスター・クロウリ二世か」

「ふむ、まあいい今の貴様は先程よりも楽しめる。それで十分だ。いくぞ夢桜」

拙者はそう言っただけである妖刀・夢桜を構える。

「？ ？ だ」

「何？」

「ト・メガ・テリオン。俺の能力名にして本来の名前だ」

side ユーヘルト

「ト・メガ・テリオン。俺の能力名にして本来の名前だ」

やはりこいつには言う価値がある。俺はそう思い自らの名前を言った。

『境界』でみつけた俺の名前。本来なら　ですら知っているかどうか怪しいものだ。知っているのは彩だけだが・・・

「お前にはこれを教えるだけの価値がある。認めよう！！お前は俺の『敵』だ！！俺が全力を持ってあたるにふさわしい力だ！！！！」

俺はそう言うのと両手を広げる。それが合図のように空には一瞬にして無数の魔法陣が展開される。

「さあ、始めよう！！俺が目覚めてからの初めての宴だ！！！！踊れ僕ども俺の目の前にあるありとあらゆる障害を喰い殺せ！！！！」

魔法陣からは次々と銀に輝くの光の矢と黒く染め上げられた漆黒の矢が目標へと向かい飛んでいく。それに続くように漆黒の甲冑に身を包んだ騎士や異形の形をした悪魔たちが召喚されていく

「来い、ウロヴォロス」

俺がそう言うのと俺の体には全身を黒く染め上げ、蛇のような形状をした七体の黒竜が現れた。

「ははははははは！！！！いくぞ水月刀断！！！！」

俺の声とともにオフィスを残した僕達は刀断へと向かっていく。

「くくく、面白い。これが貴様の全力か」

刀断はそう言うのと刀の切っ先をこちらに向け

「ならば！！これらを全てを切り伏せるのみ！！」

刀を横に一閃。それにより多数の矢と僕が断たれる。

「なるほど、召喚のための魔力を断つか」

たしかに召喚獣や悪魔達が現界するためには魔力が必要だ。ならばその魔力を断たれた者は元の処へと還って行く……有効な手段の一つではあるな。

「だが、何時まで持つか……」

現に切っても切っても僕達はその数を減らしているようには見えな  
い。これは肉体的だけではなく精神的にも辛いだろう。

「これはやりすぎたか……」

最も止める気は全くないがな。久しぶりの本気なんだ……

「桜花断！！」

その声とともに刀断は五本の紫の斬撃を放ち此方への道を切り開い  
た。

「……やるな」

数十メートルではあるが奴は確かにあの軍勢の中から此方へその刃  
を届けようとした。

「ふむ……そろそろ終わらせるか」

俺はそう言っただけで右足に魔力を集中させる。繰り出すものは俺の得意技。しかも今回は本気の一撃だ。集めた魔力を回転、そして振動させる。

「ま、今でいえばチェンソーか」

まあ、切れ味は戦車だって紙の様に引き裂く代物だがな。

「終わりだ」

俺は一瞬にして刀断の背後に移動する。

「なっ、つつ夢幻桜！！！」

まさか自ら近付いてくるとは思っていなかったのだろう。刀断が自らの妖力を全てを込めた一撃を放つ。だが

「そんな急ごしらえの技で！！！」

俺は音速を超えた速度で死神の鎌を振るう。

「首狩り！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！

俺達の技の衝撃によって大地は砕け木々はなぎ倒された。辺りには土煙が舞う一つの影があった。そして煙がはれそこに立っているのは……俺だった。

「はっ、俺に勝つにはまだまだ甘いんだよ」

俺はそう言つと倒れている刀断に背を向け歩き出した。殺されてないだけましと思え。

「さて行きますかねえ」

こんな楽しいところ招待してくれた奴のところへ、ね。俺は心の中で  
そう呟き桜花殿の門を潜って行った。

## 十八話 神様の本気（後書き）

なんか、今回は一番時間がかかりましたね。書いていてユーが悪役の様に感じて来ましたよ。

ちなみにアレイスター・クロウリーですがこの物語では史実を捻じ曲げます。正式には『ウロヴオロス・オフィス』ですが何か『オフィス』だと仕事の様な気がしてくるので『ウロヴオロス』に変更しました。

## 十九話 神様と亡霊姫（前書き）

前回のト・メガ・テ・リオンはギリシア語で「大いなる獣」という意味です。

## 十九話 神様と亡霊姫

「御邪魔しますよ〜っと」

俺は門を潜り桜の咲き誇っている庭園の中を歩いていく。庭園の向こうには城・・・というには小さすぎるが屋敷の様なものが見えた。いかしさつきから誰一人としてこの妖怪に出くわさないな・・・

「ふむ・・・」

俺はその場で止まり少し考え込む。もしかしてさっきの戦闘でも見たのか？いや、それはないな。視線は一切感じなかった。・・・となる

「最初からこうなると思っているのか。それとも刀断が負けるとは思っていなかったのか」

まあとりあえずは・・・

「一匹捕獲」

俺は一匹の尾が二つある黒猫を手にとってぶら下げていた。

「にゃ、にゃあ~~~~~!!!!」

「よう猫。俺の質問に答えろ」

「にゃ、オイラは猫じゃなくて猫又だにゃ~~~~~!!!!」



「黒助、何で他の妖怪は出てこないんだ？」

「オイラは黒助じゃなくてタマって名前があるにゃ！！」

名前あったのか。というか名前はそこの猫と変わらないのな・・・  
まあいいか

「でタマ。他の妖怪はどうした」

「皆姫様から言われてるんっすよ〜。旦那が来たら手を出さずに通せって」

「『姫』ね。まあようは来るのを待ってるんだろ？で、何でお前はここにいるんだ？」

「それは・・・あれっすよ、刀断様を倒したのがどんな奴なのか見たくて」

「ふ〜ん。まあいいや。タマお前ちょっと俺の暇つぶしになれ」

「え〜・・・いやっ「おっとこんな所に良いサンドバっぐが」なります！！なりますからその拳を引っ込めてくださいっす！！！」

「ちっ、行くぞ」

とりあえず俺が姫とやらについてタマを脅迫・・・もとい尋ねたところなんでも美しいとか綺麗だとか優しいだとか・・・猫何かに期待した俺が馬鹿だった。

「ここか」

俺がタマに案内され着いたのは屋敷の一番奥の部屋だった。ここに『姫』とやらがいるのか・・・

「姫様、旦那を連れて来ましたっす」

「入れてちょうだい」

「失礼しますっす」

タマが部屋の襖を開くと俺に入るよう促してきた。

「こんばんわ姫さんや」

「こんばんわ。昨日ぶりね」

そこには藍色の着物を着て桜色の髪を腰まで伸ばした美しい女性がいた。というか昨日部屋で天井に座っていた女性ですね。

「衝撃的すぎて今も鮮明に思い出せるよ」

「あら、嬉しい。もしかして惚れちゃった？」

「んなわけねえだろ。普通、天井に座ってる奴がいたら誰だって衝撃的すぎて忘れねえよ」

「あらあら」

姫はそう言って扇子で口元を隠しながらからからと笑った。

「まあ、こうして会うのは二度目ですが」

姫はそこでこほん、と言うと

「お初に（？）お目にかかります此処桜花殿の主、夜桜華詠でございますわ」

そして姫、華詠はにこりと笑った。

「で、何でもまたこんなことしやがった亡霊」

「あら、貴方にだって不利益なことではなかったでしょ？吸血鬼との戦いで感覚を取り戻し今回の闘いで鈍刀から研ぎ澄まされた刃になった。これなら大分戦えるようになったでしょ？」

「まあな、久しぶりに本気でやったから思ったよりも随分早く戦えるようになったな」

「お陰で私の側近はボロボロよ」

「知るか。そっちが仕掛けてきたんだろっが」

「まあこのことはどうだっていいわね。貴方の仲間も今戦闘中よ」

「そうか」

「心配なんですよ？・・・特にあの吸血鬼の女の子は」

「・・・・・・・・・・」

「よくあの子の狂気を押さえられたものね。でも貴方が刀断との戦闘で本気を出したことによってあの子の抑圧されていた狂気は完全に表に出てしまったものね」

「・・・・・・・・何が言いたい」

「いざという時の保険は欲しいでしょ？私達の所にはあの子の狂気を押さえられる者がいると言うことを知っておいてもらおうと、・・・・・・・・その代わり貴方達の力を借りたいのよ」

華詠は真剣な表情でそう言った。確かにフィーナの狂気は俺が押さええている。前の戦闘の時もそれが厄介だったからこそ俺はフィーナの狂気をばれないように少しずつ押さえこんでいた。だがそれが無くなってしまうえばフィーナは自らの破壊衝動に赴くままに全てを壊し始める。それが防げる奴が少しでもいるのならこの程度の条件は安いものだ。

「いいだろう。協力してやるよ」

俺がそう言つと華詠は安心したのかまたにつこりと笑った。

「そう、それじゃあ説明は全員揃つてからの方がいいでしょ？二人の様子を教えてあげる」

華詠はそう言つと扇子を横に一閃した。すると俺達の目の前に二つの映像が現れた。

「案ずるより見るが易しというでしょう」

そう言つて華詠は笑つた。とりあえず・・・

「見るじゃなくて産むだ。それに意味が全く違つ」

「あ、あら」

華詠は扇子で口元を隠しおほほほと言つてごまかした。

## 十九話 神様と亡霊姫（後書き）

京都編で今のところ出てきたキャラクターの読み方です。

- ・夜桜華詠 よばくらかよみ
- ・水月刀断 みづきとうたん
- ・爆鎖 ばくさ
- ・亀井花湖 きいかこ
- ・タマ

以上です。

感想、誤字、脱字等があつたらぜひお知らせください。

## 二十話 二人の戦い見守る神様

side 三人称 彩VS爆鎖

彩と爆鎖が戦いだしてすでに一時間が経過していた。戦況は爆鎖が優位に傾いていた。

「どうしたあ！！こんなものか巫女よ！！？」

「ならこれでも喰らいなさい！！」

爆鎖が彩を見ると同時に彩は手に持っていた五枚の札を爆鎖へと投げつけた。

「こんなちけな攻撃で儂を倒せると思っているのかあ！！！」

爆鎖はそれを迎え撃とうと構える。

「残念ながら攻撃じゃないわよ」

「何！？」

爆鎖に向かっていた札は突然向きを変え爆鎖を囲う様に結界を張った。

「そんなもの儂には効かぬ！！」

爆鎖は拳を振り上げ結界にぶつけた。そのたったの一撃で結界はガラスの様な音をたて破壊された。

「後ろが御留守よ」

しかし爆鎖が結界を破壊すると真後ろには彩が立っておりすでにその手からは数えきれないほどの札が放たれていた。

「破魔の焰」

彩がそう唱えると同時に札は人が一撃でも喰らえば灰にでもなってしまうほどの業火に包まれ爆鎖へと向かった。

「ぐおおおお！くっくくく、そうじゃもつと儂を楽しませてみるお！！！！」

だが爆鎖は数えきれないほどのその業火を喰らってなお立っており、その体には火傷の跡すらなかった。

「炎塵爆発！」

爆鎖がそう言つて拳を振るうと突如爆発が次々と起きそれは彩を包囲するよう爆発していった。

「そらそらそらあ！！まだまだ続くぞ！！爆陣！！！」

爆鎖が地面を叩きつけると彩の立っていた地面が爆発し、余りの威力の大きさに空にまで爆風は届き地形は完全に変わってしまった。

「どうした！もう終わるかあ！！！」



爆鎖がそう言つて煙に包まれた場所へ声をあげると

「っ……そんな訳ないでしょ」

彩がでてきた。しかし服はボロボロになり腕や足からは出血している場所が多く見られた。

「こうなつたら本気で行くわよ」

彩はそう言つて靈力を集中させた。

「あまのかこゆみ  
天鹿兎弓！！」

そして彩から光が溢れ出しその手には一つの弓が握られていた。

「神器。それもとんでもない程の力じやのっ」

彩は矢をつがえていない弓の弦を引き爆鎖へと狙いを定めた。

「あめののはは  
天羽々矢」

彩がそう言つと弦を引いた弓には蛇の様に捻じれ奇怪な形をした矢がつがえられていた。

「私の靈力のほとんどを注ぎ込んだ一撃よ。これを受けて立っていられるかしら？」

そう言つて彩は矢を放った。

「ふははははは！！！！面白いならば僕はその神器を正面から破壊

「してやろう！！！」

爆鎖は向かってくる矢を笑いながら迎え撃ち自らの妖力を右腕に集中させた。

「えんじんばくさつぱくりゆつさ炎神爆殺爆流砂！！！」

爆鎖の右腕が天羽々矢とぶつかった瞬間正しく流砂ともいえる爆発の波が起きた。

ドガガガアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！

「ぐ……つ……なかなかのもんじゃ。だが防ぎきったぞ！！さあ、次はどのような手を打つ！！！」

爆炎のなか爆鎖は今だ立っていた。体中から血を流してはいるが今だ爆鎖は笑っている。

「……まさか今のを防ぐとは思わなかったわ。……けど」

彩は心底驚いたように目を見開いた。だが次の瞬間には勝利を確信したように微笑んだ。

「誰が一回で終わりだなんて言ったかしら？」

「何？」

彩がそう言つと爆鎖は怪訝そうな顔をしたがその意味を理解したのか後ろを向く。

「なっ！！」

そこには遠くからだが焰を出しながら確かにこちらへと向かっている一本の矢が見えた。

「その矢はね、対象が死ぬまで追尾するのよ？今の攻撃で弾かれてしまったから随分遠くにあるけどね」

ばかな。爆鎖はそう思った。いくら神器に自らの霊力のほとんど集め強化したからと言っても爆鎖は大妖怪だ。やろうと思えば神でさえも殺せるだけの力はある。その一撃を受けて破壊ではなく弾かれるだけとは思いもしなかっただろう。しかし爆鎖は笑みをより深くし笑った。

「面白い！！ならば今度こそ破壊するまでよ！！！！」

爆鎖はそう言いもう一度右腕に妖力を集中させた。

「はああああああああああ！！！！！！」

爆鎖はもう一度向かってくる矢に向けて自信の残りすべての力を放つ。矢は流石に二度の攻撃には持たなかったのは粉々に砕け爆鎖もまた力尽きたのか地面に大の字になって倒れた。

「ははははは、やりおるわい。これほどの強者と戦ったのは久方ぶりよ」

「まさか、弾くだけじゃなくてその体で破壊すなんて思いもなかったわ」

「まあ主に一泡吹かせただけましかのう。儂の負けじゃ。これを使えおそらく主の神社の神もおるじやろう」

爆鎖はそう言って一枚の紙を取り出した。

「そう。まあアンタ達が何者なのかは向こうにいる奴に訊くわ」

「済まんのう」

爆鎖はまた豪快に笑った。彩は貰った札に靈力を込めやがてその場所から転移した。

「これなら儂らにとって心強い仲間になるかのう」

奴らには迷惑かけるがのうと、爆鎖は苦笑した。

side 三人称　フィーナVS花湖

フィーナは本来持っている狂気によって異常なまでの破壊衝動を持っていた。普段は自分でもある程度押さえることはできるがやはり限界がある。だからこそ戦闘の時フィーナは今まで押さえていた分の反動により普段以上の狂気が表に出る。だがユーはその狂気を魔術によって押さえていた。喰らうことも可能ではあるがそうしなかったのは喰らってしまったえばその狂気により自分がどうなるかわからなかったからだ。

だが、それによって本来なら発散されていた狂気が今まで抑圧されていた事により爆発してしまっただろうか。人間であるならば廃人になるだろう・・・だがフィーナは吸血鬼だ。並大抵な

ことでは死なない不死性や人間を遥かに超えた身体能力を持っている。それがフィーナにとっては不幸中の幸いだろう。最も相手からしたらたまったものではないだろうが・・・。

「アハハハハハ！！早く逃げないと壊れちゃうよー！！」

フィーナはそう言って紅い槍と魔弾を次々と飛ばしていく

「危ない子どすなあ。ほな、これでどうどすやろ」

花湖は目の前に亀の甲羅の様な盾を出し魔弾と魔槍を全て弾いた。

「玄武」

花湖は巨大な白蛇を呼びだすとフィーナへと向かわせた。

「クスくす、そんなのじゃワタシはトメラレナイヨ？」

フィーナはそう言って両手を前に出すと

「壊れた玩具の心臓」  
フロックン・ユア・マインド

握りつぶす動作をした。

ぐしゃあつ

フィーナに向かっていた蛇は無残にも引き裂かれた。しかし潰された蛇は氷の氷像に変わりフィーナへと向かって氷弾を放った。

「ソンナノ無駄だヨ」

フィーナは向かってくる氷弾を次々に破壊していく。

「土蛇」

すると地面から土で出来た無数の蛇がフィーナに絡みつき地面へと落とした。

「封殺壁」

その直後にフィーナは土によって作られた土壁により潰された。

「これぐらいじゃ吸血鬼は死ないでしょ？」

花湖はそう言つて土壁の上に巨大な亀の甲羅を出現させ

「追加や」

勢い良く落とした。花湖は油断せずに甲羅によって潰されたフィーナがいつ来るか警戒した。

びしっ

すると甲羅にひびが入りフィーナは勢い良く飛び出て来た。

「凄いよ！！京都には貴方みたいに強い人が何人もいるの！？」

フィーナは嬉しそうな顔をして花湖に尋ねた。

「ええ、うちより強い方もいまんねんよ」

「なら、皆コワシテあげる!!!」

フィーナはそう言つて手に魔力を集中させ紅い光を放つ剣をだした。

「コワレチャエ!!!」

フィーナは素早く懐に入ると剣を振り上げる。しかし花湖は周囲の地面を操り土槍を繰り出しフィーナの剣を受け止め胴体に突き刺していく。

「まやまやこれさかいや」

続いて花湖は金や銀、鉄鉱石で作られた剣や槍を放っていく。

「きゃあああああゝあゝあゝあゝ!!!!!!」

金や鉄鉱石は耐えられるが吸血鬼の弱点である銀で作られた槍に刺されたフィーナはその痛みに耐えられず悲鳴をあげた。

「つく!!!ケルベロス!!!」

フィーナはそう言つと刺さっている武器を破壊し、紅く染まった三つ首の獣を召喚した。

「噛み殺しちゃえ!!!」

フィーナがそう言つとケルベロスは花湖に向かい走り出した。

「玄武」

花湖は自らの聖獣を呼びだすとケルベロスへ向け無数の氷柱と土槍を放つ。

「アハハハハハ！！！！そんな脆い技じゃケルベロスは殺せないよ！！！！」

ケルベロスは向かってくる氷柱と土槍をもつとせずに花湖へと向かって行った。

「なら・・・氷葬！！」

そう言うとき突然ケルベロスの足が凍った。

「このみなを凍らせる死の大地で無事でいられへんかしら」

花湖を中心として周囲が凍りだし先程までは足しか凍っていなかったケルベロスはいつの間にか首までもが凍っていた。

「ケルベロス！！？」

フィーナが叫ぶときケルベロスはその体を膨張させ爆発した。

「つく・・・」

目の前での爆発による爆風に花湖は目を瞑った。

「これで終わりだよ！！！！赤の女王<sup>レッドクイーン</sup>！！！！！！」

フィーナはその隙を逃さずに自らの最大の技をぶつける。



「壊れちゃえこわれちゃえコワレチャエコワレチャエーーーーー  
!!!!!!!!!!!!!!」

赤の女王は周囲にある物を次々に引き寄せ破壊していく。

「……難儀なトーさんでっせー。……ちよつとの間お休み  
よし」

何時背後に回ったのか花湖はそう言ってフィーナの首に手刀を放ち  
気絶させた。

「疲れたんやな。思っただ以上に厄介だった」

花湖は全身に切り傷や痣をつくり、左足は折れているのか青く腫れ  
引きずっていた。

「とりあえずうちの役目はしまいでっせー。後は連れていかはった  
やけどすか……」

花湖はそう言っただけを取り出した。

「ほな行きまひよか」

そう言っただけ花湖はフィーナを連れて転移した。後にはめちゃくちや  
に破壊された湖と森の痕だけが残った。

## 二十話 二人の戦い見守る神様（後書き）

はあゝ。今回は話の内容が大変だ。うまくフィーナを狂わせられなかったし。内容が薄くなってしまったかも・・・。

まあどんまい!!!

## 二十一話 神様と獣と誰かの記憶

「どう？これで分ったでしょ」

二人の戦いの様子を見て華詠はこちらを見た。

「・・・・・・ああ」

俺はその声に頷く。フィーナを止められる奴がいることは分った。

「それよりも彩の攻撃に耐えられるとは・・・・」

彩の能力は神話や実在した武具を呼びだすものだ。その性能は正しくどれも危険なものばかりだったのに。

「家の鬼の大将ですもの」

華詠はそう言って愉快そうに笑った。

「それじゃ、用意しようかしら」

「????」

俺がその言葉に首を傾げると華詠につこりと笑って言った。

「宴よ」

「さあ、飲め飲め！！おいお前ら、久しぶりの客だぞ！！！」

桜花殿の庭では宴会が始まっていた。とういか爆鎖何でお前の傷はもう治ってるんだよ。……。はあ？酒で傷が治るわけねーだろうが。フィーナもボロボロだったのに服は着物を貸してもらい騒いでいた。

「で、良いの？」

隣に座った彩が俺に尋ねる。二人には既に取引の事は話している。

「何がだ？」

俺は彩に問い返した。

「約束の事よ。いくらフィーナの狂気を押さえるためだからって」

「そんなことか」

俺は溜息をつく。

「良いんだよ。どっちにしろ魔術で押さえたって限界がある。だってら押さえずに徐々に自分の意思で何とか出来るようにした方がいいだろ。遅かれ早かれこうするつもりだったからな」

「……そう、なら良いけど」

彩はそう言ってそれ以上何も言わなくなった。俺は彩の頭にポン、と手をおいた。

「お疲れさん。まさかお前があそこまで追いつめられるとは思わなかったぞ」

そう言つと彩はぶいと顔をそっぽへ向けた。

「仕方がないでしょ。それだけ強かったのよ。……それにアンタだって本気出してたじゃない」

「まあな」

俺はそのまま無言で彩の頭を撫でた。彩も気持ちいいのか目を細めじつとしてされるがままだった。

「……眠っちまったか」

俺は眠ってしまった彩を起こさぬようその場から移動した。

「綺麗だねえ」

俺はそう言つて庭の中を歩き屋敷の奥へと向かっていく。

「やっぱり来たのね」

すると奥の桜の木に華詠が一人佇んでいた。

「まあ、な」

「やっぱり見に来たのはあれ（・・・）かしら？」

「そりゃあんだだけの力を出してれば嫌でも気が付くだろ」

俺はそう言っただけで肩を竦めた。

「それにしても良く此処が入口だと分ったわね」

「何となくだよ。勘みたいなものだ」

そう言っただけで俺も目の前にある桜を見た。その桜は周りにある桜と違い遥かに大きく見ただけでも途方もない程の年月を生きてきたのが分る。

「・・・・綺麗だな」

俺は思わずそう呟いた。

ザッ                      ザザッー

俺が桜の美しさに見惚れていると頭の中にノイズの様なものがはしった。

キレ                      だ

何処かの木の下その場所に誰かがいる。

そ                      な

もう一人の誰かが何かを言っている。誰だこれは、此処は何処だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ユ・・・・ユー!!!!」

俺はその声にハッと意識を浮上させた。

「大丈夫？何だかボーっとしてたけど・・・」

「いや大丈夫だ」

俺はそう心配そうにしている華詠に笑いながら言った。

「そう、なら良いけど」

俺の言葉に安心したのか華詠はそう言っただけで安心したような顔をした。今のは何だったのか、気になりはするが俺は今は目の前の事に集中しようと考えそれ以上考えるのを止めた。

「それでどうやって入るんだ？」

「ええ、この桜からよ。これこそが桜花殿の名の由来にして私達が守ってきたもの」

華詠はそう言っただけで桜の木に触れた。

「本来は京都の中心にあるものなのよ。だけれど文明の発達とともに人間は私達を忘れやがては幻想のものへとなってしまった」

「今ではあそこにあるのは何時壊れるかも分らない境界だけ・・・」

この木はね、その結界の中にいる獣を封じる為の鎖なのよ。あそこに入るためには此処からかもしくは結界に直接干渉するしかない」

「もし結界とこの桜が消えたら？」

「完全な状態で復活するでしょうね。どちらかが欠けるだけでも一国を滅ぼす力を持っているのよ？それが完全な状態で目覚めたらどうなると思う？」

「・・・・・・・・・・」

少なくとも京都とその周辺は火の海になるだろう、俺はそう思った。

「それを目覚めさせようとしている者たちがいるのよ。だから貴方達の力が必要なのよ」

華詠はそう言って此方を振り向いた。

「それじゃ行きましょう」

華詠は俺の手を握って桜の根元へと誘った。

「……」



俺が華詠に連れられて来たのは半球状の部屋だった。辺りには闇が広がっているのにどうしてか自分の周辺は認識することが出来る。

「ここに獣がいるのよ」

華詠はそう言っただけで部屋の中央へと進んで行った。俺もその後が続くように付いて行く。

「・・・これがそうよ」

華詠がそう言っただけで指差した先には札のついた鎖で何重も縛られた黒い何かがあった。僅かにだがそれはドクン、ドクンと脈打っているのが分る。

「獣と言うよりも悪魔と言った方が正しいんじゃないか？」

「そんな可愛いもので済んだらいいわね」

そう言っただけで華詠は不敵に笑った。やめろ、マジで怖くなってくるじゃないか。

「しかし良くこんなものを封印出来たな」

「ええ、これを封印するのに何万と言う犠牲を出したと聞いているわ」

「そりゃまた」

随分な被害だもんで。俺はその黒い獣を見た。

「……懐かしいな（…………）」

「何か言った？」

「？何がだ？」

「いえ、何か言ったような気がしたから」

「いや俺は何も言っていないが」

俺達は二人揃って首を傾げる。はて何か言っただろうか。

「とりあえず任せとけ。何とかするしこいつが目覚めてもこいつとぶっ倒してやるからよ」

俺はそう言ってニヤリと不敵に笑った。華詠も同じように不敵に笑う。

「期待してるわよ」

「おお任せとけ」

俺達はそう言って元の桜の根元へと戻った。

「オラオラオラオラア！！！！覇気が足りねえぞ餓鬼ども！！」

「ぎゃあああああああああ！！！！お頭が暴れだしたーーーー！！！！！！」

「遊んであげるから待ってよー！！！！」

「ひいひいひいひいひいひい！！姫様！！旦那！！助けてー！！」

宴会場は既に死屍累々となっておりその原因（爆鎖とフィーナ）によつて今なおその数を増やしていた。刀断や花湖は酒に酔つてダウンしており他にも止めらそうな奴は皆ダウンしていた。

「「「「「ぎゃあああああああああああああ  
!!!!!!」」」」

「ふははははははははは……！」

「あははははははははは……！」

俺達は何も見なかった。俺と華詠は回れ右をして屋敷の中で二人で静かに飲んだ。アーアーナニモキコエナイ。

ちなみに余談であるが二人はこの後酔っていた彩の攻撃によって朝方まで眠らされていたそう。

## 二十一話 神様と獣と誰かの記憶（後書き）

物語も少しずつ進んできました。伏線もちろほらと……ノリで書いたのなんて無いよね？

## 第二回キャラ紹介ー！ー！（前書き）

ということでキャラ紹介です。続きを楽しみにしていた方は済みません。

もうすぐテストがあるので連続更新も少しきついかな？まあ最低でも週に三、四回は更新すると思います。とりあえず月曜までは連続更新していきたいと思います。

## 第二回キャラ紹介――！！！！

「第二回キャラ紹介――！！！！！」

「「「「わ――！！！！！」」」」

「さあ始まりました第二回キャラ紹介。司会進行はユーヘルト（以下ユ）と……」

「こんにちは。彩です（以下彩）。」

「こんにちは――！！フィーナだよ――！！（以下フィ）」

ユ「以上の三名で行っていききたいと思います。なお今回は会話形式で進んでいきたいと思う。」

彩「……ねえ、前も気になってたけど何処からそのホワイトボード持ってきてるの？」

フィ「彩、そういうのは気にしちゃダメなんだよ。」

ユ「全くだ。それじゃ、説明いくぞー。」

・ユーヘルト・ヴァーミリオン

能力

・蹂躪せし暴君：あらゆるものを喰らう力。それが目に見えないものでも喰らうことは出来る。今では詠唱の必要は無しで行使可能。

・？  
？  
…ユーヘルト本来の力。詳しいことは不明。

身長

・179cm

体重

・73？

瞳の色

・紫、紅（能力使用時）

髪

・金髪。長さは肩にかかる位。

・黒髪（本来の姿）

趣味

・物造り、読書。フィーナと遊ぶこと。街へ遊びに出かけること。  
桜を見ること

嫌いなモノ

・G、雨、根性のない奴。

ユ「まあそこまでの変化はないかな・・・」

彩「いやいやいや、結構重要なところが変わってるからね!？」

フィ「そうかなあ?」

彩「え、いや。身長とか前と違うじゃん!!?」

ユ「大丈夫か?前もこんな感じだったぞ?」

フィ「彩は疲れてるんだよきっと。皆も前の紹介と何も変わってないよねー?」

彩「皆って誰!?あれ私が可笑しいの!？」

ユ&フィ「あははははは、それじゃあ次の紹介いこうか」「」

名前

・彩

能力

・古き者の伝説：過去の英雄や神々の使用した武器を呼びだす能力。  
その力は神話通りの性能を誇る。

身長

・167cm



体「さて次ね」

瞳の色

・茶色

髪

・茶髪。腰ぐらゐまで伸ばしている

趣味

・家事全般、のんびりすること、ユーをいじること、フィーナと遊ぶこと

嫌いなモノ

・ユーの勝ち誇ったこと、一人でいること、裏切り、厄介事

彩「私はそこまで変わってないわね。」

ユ「いやお前も能力とかでてんだろ。」

フィ「彩も結局適当だねー。」

彩「うるさいわよ。次いきましよう、次はフィーナね。」

名前

・フィーナ・ヴァレンシュタイン

## 能力

・壊れた玩具の心臓：任意の空間内にある存在を全て破壊する力。  
また概念なども破壊することは可能。ただし通常よりも遥かに多くの力を使う。

## 身長

・147cm

t「壊れちゃえ　！！」

## 瞳の色

・紅

## 髪

・金髪。肩よりも少し下にかかる程度。サイドポニー(?)

## 趣味

・遊ぶこと、出かけること

## 嫌いなモノ

・友達が傷つくこと、遊び相手がなくなること

フィ「こんな感じだよー。」

ユ「やっぱり想像通りだな。」

彩「ええ、凄いフィーナらしいな。」

ユ「さて次はアマテラス達と言いたところだが……奴らはも

う少し出番が出てきたらだな。」

彩「アマテラス様は悲しむでしょうね。」

フィ「しょうがないよ。出番ないんだから。」

ユ&彩「（結構ひどい事をさらりと言っなあ・・・）」

ユ「そんな次は「私達ねー」・・・でたな京都組み。」

華「それじゃあ私達の紹介よ。刀断。」

刀「はっ、お任せを姫様。」

ユ「おい、俺の仕事とるな。」

爆「気にすることあるまい。」

タ「そうっすよ旦那。」

ユ「・・・お前誰だ。」

タ「酷い!!」

華「そうよーユー。その子の名前はミケでしょー。」

タ「姫様!!?オイラの名前はタマっすよ!?!」

彩「黙りなさいミケ。次の説明始めるわよ。」

タ「理不尽だにやーーーー！！！！」

名前

・夜桜華詠

能力

・?????「内緒よ。」

身長

・168cm

ト「覇！！」「流石刀断ね」

瞳の色

・紫

髪

・桜色、彩と同じように腰ほどの長さがある

趣味

・のほほんとすること、桜を見ること、

嫌いなモノ

・家来を傷つけるもの、曇り、

華「こんな所かしらね」

ユ「まあ、他は追々書いていくか」

刀「次は拙者でござるな」

名前

・水月刀断

能力

・断魂剣：夢桜によって切り裂いたものを断つ。また魔力を断つことも出来る。自らの刀の範囲外であってもその対象に向けて刀を振ることによりその対象を断つこともできる。

身長

・182cm

体重

・78?

瞳の色

・黒

髪

・青。後ろ髪を紐で結っている。見た目侍。

趣味

・刀の手入れ、華詠の世話、庭の手入れ、爆鎖との手合わせ

嫌いなモノ

・主に仇名す者、裏切り

刀「こんなものでござるな」

ユ&彩&フィ「容易に想像できるな（わね）（ね）」

華「家の自慢の家臣よ」

爆「次は農番かのう」

名前

・爆鎖

能力

・爆神：爆炎、爆発など操る「簡単だな、おい。」

身長

・258cm

体重

・120？

瞳の色

・黒

趣味

・酒を飲むこと、喧嘩

嫌いなモノ

・戦いの邪魔をするもの、

爆「こんなもんかのう。後の説明は面倒臭いから却下じゃ」

ユ「ぶつちゃけがった」

華「爆鎖らしいわね」

彩「あんたの説明は化け物で十分よ」

フィ「爆鎖は大きいよねー」

ユ「まあ、色々あったが今回はこんなもんか」

フィ「あれ？花湖は？」

華「あの子は今日はお仕事があるから来れなかったのよ」

フィ「そつかあ」

彩「でも次は来るんですよ」

刀「ああ、もちろんだ」

爆「がははははは！！！！さあユーヘルトお前も酒を飲め！！」

ユ「早えよお前は！！？つかどっからそんなでけえ酒出しやがった！！」

爆「気にする出ない。お前も同じようなことをしていたではないか」

タ「諦めるっすよ旦那。」

爆「ふははははは！！！！さあ飲むぞ皆の者！！！！」

ユ「畜生、飲めばいいんだろうが」

華「そうねえ私たちも飲もうかしら」

フィ「飲む飲むー!!」

彩「あんまり暴れないでねフィーナ？」

刀「ふむなかなか良い酒だな」

ユ「あー、皆して酒を飲み出しやがったので今回はこれにて終了だ。」

全員「……………ではまた本編で!!!!!!」



## 第二回キャラ紹介――！！！！（後書き）

何か最後がグダグダに・・・仕方がなかったんだ。疲れたからじゃこれが限界なんだ！！！！ではまた本編で！！！！

## 二十二話 神様と朱雀（前書き）

済みませんでしたー！ー！ー！ー！この前書いたばかりなのにもう更新してないよー！ー！しょうがないんです。昨日書いたらエラーが出て消去。・・・泣いた。とりあえず思い出しながら頑張って書きました。とりあえずもう一話も投稿しようと思います。

## 二十二話 神様と朱雀

今俺は京都の街にいる。まあ理由は館にある荷物を取るからだ。・  
・後、もうすぐ始まる京都での戦いに備えて他の四方院家に会いに  
行くというのもある。

「・・・で、何でお前と一緒になんだ。」

俺の隣には華詠が並んで歩いていた。

「案内するからに決まってるでしょ。」

「それなら花湖を連れてくれば良かっただろ。」

花湖ならもっと詳しいだろうに・・・。

「あの子はほかの組織と連絡を取ってるわ。」

大変なんだな、上司がこんなのだと・・・。

「何か変なこと考えなかった？」

「イエ、ナニモ」

「コエエエ！！！！顔は笑ってるのに目が笑ってねえ！！！！！！」

「ところで彩とフィーナはどうした？」

俺がそう尋ねると華詠は笑って言った。

「フィーナは狂気を押さえる練習、彩は療養中よ。」

・・・・・・・・・・。

「俺もちよつと用事g」彩は何もないはずだって言ってたわよ?」  
「・・・・・・・・。」

「いやちよつと戦闘時での配置d」大丈夫よ、貴方は獣の前に配置するから。」  
「・・・・・・・・マジ?」

「マジよ。」

・・・・・・・・それって何かあったら俺に責任来るよね?

「・・・・・・・・頑張ろう。」

「ええ、頑張ってね。」

俺は改めてそう決心した。

「まずはじいよ。」

華詠がそう言つて連れて来たのは一軒の甘味処だった。しかし普通の店とはだいぶ異なる点があった。

「凄い客だな・・・。」

そう客の数がとてつもなく多いのだ。店の外にまで並んでるぞ。

「でしょ。この人気ぶりからこの地区じゃ此処しか甘味処は無いのよ。」

そう言つて華詠は店の中に入つて行つた。

「・・・・・・・・・・うわあ。」

店の中に入つた俺は思わずそう言つてしまった。外も凄かったが中はそれ以上だ。満員状態で通路をとるだけでも大変そうだ。

「それで、四方院けの奴は何処にいるんだ？」

「あそこよ。」

華詠はそう言い店内の一角を指指す。

「・・・・・・・・・・。」

指差された方向を見て俺は思わず顔を引き攣らせた。そこは店内でも最も人がいる場所だったからだ。

「心配しなくても大丈夫よ。百合。」

華詠はそう言つて指差した場所に声をあげる。すると少しして少女の声が聞こえた。

「あ、華詠様！！今行きます！！」

するとそこにいた客の間から一人の少女が出てきた。歳は15、6ほどだろうか。明治時代の様な雰囲気を感じさせる店員服を着ている。

「お久しぶりです。華詠様！！」

少女は元気に言う。華詠もそんな少女の様子に微笑む。

「ええ、久しぶりね。今日はこの人の紹介に来たのよ。今回私達に協力してくれる人よ。」

華詠はそう言つて俺を紹介する。

「こんにちは。ユーヘルト・ヴァーミリオンだ。今回はよろしく頼む。」

「あ、はい！えっと、南を守護させてもらっています。朱雀の朱雀院百合です！！この度はありがとうございます！！」

そう言つて百合はお辞儀をする。・・・何この娘、優しすぎるでしょ。いかにあまりのことに目が・・・。

「だ、大丈夫ですか！！？」

「ああ、すまん。こんなまともな人に会つたのは久しぶりだったも

んで……。」

「あら、私は？」

「そ、そうなんですか……。」

百合は何か悟ったのかそれ以上は何も聞いてこなかった。……華詠が何か言っているが無視だ無視。

「百合　！！早く戻ってきてー！！」

「あ、ごめん！！すぐ戻るからー！！！！」

おそらく同僚の声だろう。それを聞いた百合は返事をするとは此方を向いた。

「済みません。そろそろ仕事に戻らないといけないのでこれで失礼します。あ、戦闘時は私も参加するのでよろしくお願いします。」

「ああ、いいいいいよ。もともと俺達が突然来たのがいけないんだし。」

「そうよ、気にしないでちょうだい。」

百合は申し訳なさそうな顔を見ると一礼して仕事へと戻って行った。

「良い子だったな。」

「ええ、四方院家の中じゃ一番良い子よ。それじゃ次行きましょう。」

華詠はそう言々と次の場所へと俺を案内した。



## 二十三話 神様と四方院家

「……………次はここよ。」

俺達はでかい屋敷の門の前にいる。

「ここは？」

「青竜。……まあ四方院家の纏め役のような立ち位置の家よ。」

ここがねえ。

「さあ入るわよ。」

「勝手に入っていいのか？」

「いいのよ、もしだめだったとしたら……………」

華詠はそこで区切って俺を見た。

「ね？」

「マジかよ。」

……………ようは実力行使と。

「さあ行くわよ。」

俺達は門を開け中に入って行った。

「「「「「ようこそおいでませ」「」「」」」」

門を開けて入ると使用人                    たぶんだが                    がずらりと並び俺達を迎えた。

「あら、来るのは分っていたようね。」

「そのようだな。」

俺達がそう話していると使用人の一人が前に出てきた。

「どうぞこちらへ。竜玄様がお待ちでございます。」

使用人はそう言う俺達をここの主の元へと案内した。

「こちらでございます。竜玄様、お客様をお連れしました。」

使用人に案内されたのは館の奥にある一際広い襖のある部屋だった。

「入れてくれ。」

使用人が言うと部屋から男の声がした。

「失礼します。」

使用人はそう言う襖を開け俺達を部屋へと招く。俺達が中に入るとそこには二人の男がいた。一人はおそらく30前半だろう精悍な顔つきの男性。もう一人は百合よりも若い12、3歳程の少年だ。

「あら、虎子もいたのね。」

華詠は中にいる人物が意外だったのか僅かに驚いたような表情をした。

「どうぞそちらにお掛けください。」

少年がそう言うのと俺達は用意されていた座布団の上に座った。

「初めまして、俺は東の青竜、東竜玄だ。」

俺達が座ると男はそう名乗った。

「おなじく初めまして。私は西の白虎、白風虎子と申します。」

少年もまた名乗った。

「俺の名前はユーヘルト・ヴァーミリオンだ。」

「ええ、噂はかねがね何でも刀断に勝ったそうではありませんか。」

「ああ、まあな。」

「この度は誠に協力ありがとうございます。何分こちらも戦力不足でして……。」

「ああ、いや構わない。俺にも益はあるからな。」

「そつでございますか。」

俺と虎子が話していると竜玄は段々その精悍そうな顔を歪め言った。

「なあ、虎子お前は少し堅苦しすぎるんじゃないか？もっとこうラフな感じで良いだろ。」

「なつ、竜玄私たちはそれだけのことを彼に協力してもらうのですよ！！？貴方はこの事について真剣に考えているのですか！？」

「いや真剣には考えてるが、やりづらいだろこれ。」

「それは貴方だけですよ！！貴方には今日と言う今日こそそのだらしなない性格を改めてもらいます！！」

「おいおい勘弁してくれよ。面倒臭い。」

そう言って竜玄はごろりと横になり欠伸をし始めた。それを見てさらにヒートアップしていく虎子の説教。俺は隣にいる華詠を見た。華詠は俺の視線に気づいたのか苦笑し言った。

「いつもの事なのよ。虎子は少し真面目すぎて、竜玄はあの通り少しマイペースと言うか……」

自分より遥かに年下の少年に説教されるいい歳した大人……シュールだ。だがあれで親友だと言うのだから不思議だ。何でも使用人たちは子のやりとりについてはいつもの事だとスル しているそうだ。……いつもこんなことしてるのか。

「しかし、これはいつ終わるんだ？」

「そうね、いい加減話したいこともあるし。」

そう言つて華詠は二人の方を見ると

「静かにしなさい」

そう言つた。その一言だけで二人は先程までのやりとりを止め真剣な表情になった。……何時もこれだつたら尊敬できるんだがな。

「今日来たのは紹介と言うのと、彼の配置場所よ。」

「配置場所……ですか？」

華詠の言葉に虎子と竜玄は首をかしげる。

「彼は獣の前に配置するわ」

「「!？」」

華詠の言葉に二人は驚き目を見開いた。それはそうだろう噂を聞いているとはいえ突然実力も分らない男が最も重要な配置になるのだから。

「華詠様!!それは本気でございますか!!?」

「ええ、本気よ。」

「し、しかし!」分りました。「竜玄!？」

「虎子、少なくともユーヘルトは刀断を倒すだけの實力を持ってい

る。それに華詠様にも何か考えがあるのだろう。」

・・・なるほど四方院家のまとめ役ね。冷静に状況を把握し、自らの上司を信用している。確かに纏め役には持つて来いだ。こりやなかなかの大物だな。

「ええ、大丈夫よね。ユー？」

「ああ、心配するな。」

実際、獣が目覚めても何とかする方法はいくらかあるな・・・。

「・・・分りました。貴方を信じましょう。」

虎子も竜玄の言葉に納得したのか思案顔をするとすぐに了承した。

「しかし、お前さん何者だ？それでも結構修羅場は潜ってるがお前さんほど得体のしれない奴は初めてだ。その体の中に何がいるんだか・・・」

「！！・・・驚いた。まさかそんな事を言われるとは。」

ホント京都は良い人材がいるな。

「まあ、これでも四方院家の纏め役だからな。」

そう言つて竜玄は笑った。

「それじゃ、二人とも大丈夫ね？」

「ええ、問題ありません。」

「ああ、了解。」

二人はそう言つとそれ以上は特に何もなかつたのか。そこからはお互いただの世間話をしていた。ひとまずこれで四方院家全員の紹介と言つ当初の目的は完遂された。あとはこれから起こる戦闘の準備か。その後竜玄が酒を持ってきて、また虎子との喧嘩になつたのは余談である。

## 二十三話 神様と四方院家（後書き）

またもう少し内容が薄いかな。まあもうすぐ本命の戦闘です。さあ気合い入れてくか！。



## 二十四話 神様と京都と妖怪と

「それじゃ、始めましょうか。」

華詠はその場にいる全員を見るとそう言った。今桜花殿の広間には俺達を含め四方院家、刀断や爆鎖達の桜花殿の幹部達が集まっている。

「もうすぐ奴ら（・・・）が来るわ。花湖」

華詠がそう言うのと花湖は頷き俺達の前に立った。

「各地に存在しはる同盟組織さかいの報告によると敵は九尾の狐『崩狐』及び大蛇『忌渴飢』と断定。またその部下の姿も確認されてまんねん。」

「その数はおよそ五千。その全軍が京都中心部に向かっていますわ。敵の目的は間違いなく『獣』の封印を解くことどす。京都全域にはとーに人払いの術式を行っていますわ。」

その言葉に広間が僅かにざわめいたがそれも直ぐに静まった。

「敵到着は時間は今よりおよそ15時間後、全戦闘員すでに配置完了どす。」

「後は儂らか。」

「ええ、各員それぞれわての持ち場へ。・・・ユーヘルトはん。『獣』は任せたんや。」

「ああ。」

花湖の説明が終わると俺達は広間を後にした。

「ユー。」

「ん、彩とフィーナか。・・・どうした。」

「「頑張つてね。」」

「ああ。お前たちも頑張れよ。」

俺は二人に言うと獣の場所へと向かった。

「・・・・・・・・・・来たわね。」

京都最前線部にて華詠はそう呟いた。既に上空には黒い雲の様なものが見えて来ていた。それが近づいて来るにつれやがてそれが雲ではなく妖怪たちの軍勢だと言うことが分ってくる。

「総員戦闘準備!!!!」

華詠は周囲にそう呼び掛けると自らもさらに前へと向かって行く。

「来なさい女狐。私たちの力見せてあげるわ。」

## 二十四話 神様と京都と妖怪と（後書き）

次回からはいよいよ戦闘です。果たして作者の語彙力で表現できるのか！！

## 二十五話 戦争

「京の都か。」

遙か上空より一人の女性が京都を見降ろしていた。その女性には獣の耳があり九つの尻尾が生えていた。

「おい崩狐。」

そんな女性に一人の男が声をかけた。

「何だ忌渦飢。」

その声を聞き不機嫌そうな顔をするものの崩狐は返事をした。

「本当にこの作戦でいいのか？」

「ああ、構わぬ。奴に利用されるのは気に食わんが此方としては十分な利益がある。・・・Eve」

男、忌渦飢の質問に答えると崩狐は一人の少女を呼んだ。

「・・・・・・・・。」

少女は全身に装甲の様なものを装備しており、無言のままその場に待機した。

「獣へと向かえ、あれの封印の解き方を主は良く分っておろう。」

「了解・・・これより獣へと向かいます。」

少女は機械の様な反応をしその場から一瞬にしていなくなった。

「空間転移か・・・。」

「獣の方はあ奴に任せておけばよろう。」

「そうだな。」

崩狐は振り返ると自らの後ろに控える配下達に言った。

「皆の者！！我らが悲願の達成の時だ！！！！その命を賭け我らが行く手を遮る者を滅ぼすのだ！！！！」

「「オオオオオオーーーー！！！！！！！！」」

「行け皆の者！！！！」

その号令とともに配下の妖怪たちは一斉に京の街へと向かっていく。

「・・・・せいぜい楽しませてもらおうぞ。獣が目覚めるまでの。」

「敵動きました。」

「刀断。」

部下からの報告に華詠は刀断を呼んだ。

「承知。」

刀断も華詠の言いたいことが分っているのか頷き一歩前へ出た。

「消え失せる!!」

その言葉とともに刀を一閃する。すると此方へ向かって来ていた妖怪たちは次々と地に落ちていく。

「総員攻撃開始!!!!」

その言葉とともに部下たちは一斉に敵へと向かって行った。

「始まったか。」

俺は外から感じる力から戦闘が始まったことを感じた。

「さて、俺もやることやりますかね。」

俺は獣の周りに魔法陣を展開した。ま、これは誰にも教えてないが問題ないか。

「さて、やるか・・・っ!？」

俺が魔法陣を展開し始めようとした時。すぐ近くに魔力が感じられた。

「何だお前は。」

俺は出現した少女に対し何時でも攻撃できるよう構えた。しかし、何だこいつからは嫌な感じがしやがる。

「特異点、発見。優先順位を変更。これより対象の殲滅を開始します。」

少女はそう言うと言った背後から無数の剣を出現させた。

「くそっ!!戦う気満々かよ!!!!」

俺は魔法陣を少女に向け展開させる。直後無数の剣が俺へと向かって飛んでくる。

「星の護り手よ!!」

俺は障壁を張り剣を防ぐ。

「・・・対象の術式を検索。術式の破壊まで残り5秒。」



俺は障壁が破壊されると同時に距離を取る。

「今能力は使いたくないんだけどよ!!」

俺は蹂躪せし暴君を放つ。

「敵能力把握。有効能力検索、発動。」

少女はそう言つて右腕を前に出した。すると少女に向かつていた影は二つに裂ける。

「なっ!!?」

俺はその光景に驚愕した。・・・くそっ!!何故刀断の能力を使える!!?

「っち、オラオラオラア!!!」

俺は弾丸のようにした影を飛ばしていく。

「・・・無駄。」

少女は全て無力化する。くそ、なら・・・

「本気でやってやるよ!!!」

「?」

俺は能力名を呟く。すると俺の髪は黒く染まり目の輝きが増した。

「ウロボロス!!!」

俺は七匹の黒竜を呼ぶ。

「……対象を特異点、『境界の獣』と断定。危険度SSに上昇。

」

「まだまだいくぞ!!! 第0拘束術式解放!!! 輪廻の蛇」ウロボロス 完全起動!!!」

すると七匹の竜は先程までの落ち着きはどこにいったのか一斉に吠えその目は獲物を喰い殺さんとはかりの獣の目をしその姿はより禍々しくなっていた。

「対象の魔力値増加。これより対象の捕獲もしくは破壊を開始する。

」

「死にさせ――!!!」

俺は輪廻の蛇を少女へと向かわせる。少女はまた背後から無数の剣を出現させ発射する。

「無駄だ!!! 今の俺にそんなちやちなモノが効くと思つなよ!!!」

俺は次々と飛んでくる剣を輪廻の蛇で噛み砕いていく。

「……聖者の剣発動。」

少女が言つとその背後に巨大な十字剣が出現する。

「そんなもんで……!?!」

輪廻の蛇を向かわせようとした俺の頭にノイズ共に痛みがはしる。

ま……か                      や……はり、き……は

今……も                      の……けだよ

……え……ねえ……るさねえ……許さねえ!!!

「……つ、またか!?!?」

俺はその痛みに顔を歪める。……ちくしょう、こんな時に!!!  
見れば少女は既にその十字剣の切っ先を此方に向けていた。

「……発射。」

少女の無機質な声とともに鈍色の輝きを放つ十字剣が放たれた。

## 二十五話 戦争（後書き）

ここはけっこう悩みました。ユーヘルトにするかそれとも京都組みにするかどちらを書くかで・・・。ひとまずここで区切ります。今夜にでも続きは書きたいと思います。

## 二十六話 華詠VS崩狐 彩&フィーナVS忌渦飢

「来たわね女狐。」

「おや、亡霊ではないか。久しいの。」

普通の人間なら喋れないほどの殺気を受けていながら崩狐はその顔に余裕の表情を浮かべていた。

「ええ、随分久しぶりね。とつくにくたばったと思ってたわ。」

「随分と荒れてるのお。」

「ええ、御陰様で。早速で悪いけれど……………」

死んで頂戴。華詠の言葉と同時に崩狐は真上からの雷に身を包まれた。

ゴオオオオオオオン!!!!

遅れて後から轟音が轟く。

「まだこの程度じゃないわよ。」

華詠は次々に雷を落とす。辺り一帯に雷撃の嵐が降り注いだ。

「……………麒麟。」

その声とともに華詠の傍に一匹の全身に雷を纏った麒麟が現れた。

「良くやってくれたわね。」

そう言つて華詠は鱗を撫でる。鱗はブルブルと鳴くと油断せずに崩狐のいる場所を睨む。

「……服が汚れてしまったじゃろ。」

崩狐はあの雷撃を何ともなかったかのようにその場から動かず静止したままだった。

「化け物ね。」

華詠は苦々しげに言う。

「主も十分化け物じゃよ。」

それと対称に崩狐は笑いながら言った。

「ならこれよ。」

華詠がそう言つと辺り一帯を押しつぶすような感覚が崩狐を襲った。

「ぬっ。」

その感覚に辺りを警戒する崩狐。やがて、その感覚が消えると同時に異変は起きた。

「（……力が増した？）」

華詠から感じられる力が明らかに先程より増していた。

「（いや、周りからも……。）」

周囲で戦っている華詠の配下達から感じられる力も先程より遙かに大きくなっていた。

「これが私の力よ。周囲にある龍脈を自在に操る事が出来る。」

「なるほど、龍脈から力を貰い自らの戦闘能力を増幅させたか。」

崩狐は余裕の表情から苦虫を噛みぶしたような表情になった。既に華詠の力は自分と同等かそれ以上になっている。経験では僅かに勝っているがそれも何時まで持つか。

「（ならば……。）」

崩狐が下した判断は一つ、

「（これ以上力が増す前に一気に潰す！！）」

崩狐は真剣な表情になると一つの扇子を取り出し華詠に向かい勢い良くふるう。すると扇子からは鎌鼬の様に鋭い風がその体を切り刻まんと飛んでくる。

「黄竜。」

華詠がそう言うと言の目の前の大地が砕け黄金の竜が現れた。

「麟、黄竜やりなさい。」

その言葉を聞くと二匹は目の前に迫ってきている鎌鼬を紙切れのよ  
うに引き裂き崩狐をへと迫る。

「っち！！龍脈から呼び出しおったか。」

崩狐は向かってくる二匹に自らの妖力で弾幕を張る。

「無駄よ。その程度じゃこの二匹は止められないわ。」

華詠は後方で妖力を集中させる。

「っ！！！！」

自らが放った弾幕をいとも簡単に引き裂いて向かってくる二匹に崩  
狐はもう一つ扇子を出すと二匹の突撃を止める。二人の戦いは激し  
さを増していった。

「これは・・・フィーナ！！」

彩は自らの力が増したことを感じると近くで戦っているフィーナを  
呼んだ。



「うん、華詠が能力を使つたみたい。」

あらかじめもし崩狐や忌渦飢との戦闘の際華詠が能力を使うことは言われていた。

「このままいけば勝てそうね。」

彩は周囲で戦っている仲間を見ると皆華詠の能力で強化されたことにより崩狐と忌渦飢の配下を圧倒していた。

「ふむ、このままいけば、な。」

その声とともに彩とフィーナの周囲にいた仲間たちが吹き飛ばされる。

「なかなか出来るようだな。流石はあの神が連れて来ただけの事はある。」

そう言つて一人の男が降りて来た。地面に着くほどの長さがある髪、露出してある上半身は鍛えられた屈強な筋肉が見える。そして鍛えられた腕には爬虫類を思わせる鱗があつた。その姿を確認した二人は何時でも反応できるよう構える。

「……忌渦飢ね。」

「いかにもだ巫女と吸血鬼よ、俺こそは忌渦飢。太古より生きし大蛇なり。」

忌渦飢はそう言つと構えた。

「せいぜい俺を楽しませてみる。」

忌渦飢は自らの腕に妖力を集中させると地面へとその拳を叩きつける。すると余りの衝撃に地面は陥没し余波によって周囲にあった建物は次々に崩壊していく。

「くっ！！大した力ね。」

「ホント凄い力。」

その衝撃に耐える二人

「まだまだ序の口だ。」

何時移動したのか忌渦飢は二人が反応する前に彩を殴り飛ばしその勢いのままフィーナを吹き飛ばす。

「・・・がつ！！？」

「くっ！！」

吸血鬼であるフィーナはともかく元が人間である彩は今の一撃により左腕は折れ、動かすことは難しくなっていた。

「はあっ、はあっ。」

「彩！！大丈夫！！？」

「ほう、殺す気でやったのだから。」

彩の傍へとフィーナが寄ると向こうからは忌渦飢が歩いてきているのが分る。

「大・・・丈夫よ。フィーナ。」

彩はそう言つと袖から一枚の札を取り出す。彩はそれを動かない左腕に張ると再び前を向く。

「・・・治癒符か。久しぶりに見たな。」

「（たつた一撃でこれだけの威力があるなんて）・・・フィーナ  
少しだけ時間を稼いで。」

「分つた。」

彩の言葉に頷くフィーナ。

「話は終わったか。ならば、いくぞ！！！」

二人へ向かつて走る忌渦飢へ立ち向かうフィーナ。

「面白い。俺に対し接近戦をするか。」

それを見て忌渦飢は笑つと再び真剣な表情になる。

「だが、その程度で！！！」

忌渦飢はガードしていたフィーナの両腕を弾くと顎を蹴りあげる。

「・・・ぐっ！？」

その威力に一瞬意識を飛ばすフィーナ。

「ハアアアアアア！！！！！！」

忌渦飢はその隙を逃さず次々に攻撃を入れる。

「な．．．つめるな！！！！」

フィーナはそう言つと両手を前に出す。

「壊れた玩具の心臓！！」  
フロックン・ユア・マインド

忌渦飢は一瞬驚いた表情をするとすぐさまその場を飛び退く。

「．．．貴様、何故分つた。」

忌渦飢は自らの腕を見て言つた。

「その腕、殴る時だけ、ど．．．少しだけ、風の音がするから．．  
．．．だけどあつてみたいだね。」

フィーナはそう言つてまた構える。

「貴方はその腕の鱗から風を出してその音速を超える一撃を放っている．．．そうでしょ？」

「．．．．．。」

フィーナの問いに無言なる忌渦飢。しかし暫くすると突然忌渦飢は

笑いだした。

「くはははははは！……まさかこうも早くばれるとは。いやいや、  
見くびっていたぞ吸血鬼。」

忌渦飢はそう言つと一度息を吸い妖力を全力で出した。

「「！！？」」

「本気で行くぞ。」

忌渦飢は先程と違い腕をだらりと下げ自然体になった。

「……ふつ。」

瞬間。フィーナの真後ろへと現れた忌渦飢は躊躇なくフィーナの頭  
を吹き飛ばす。

「流石は吸血鬼だ。」

吹き飛ばされたフィーナの体はぐらりと揺れると全身が蝙蝠に変わ  
り、離れた場所でもう一度集まった。

「ホント早いね。」

けど、とフィーナは言つて両腕を前に伸ばす。

「終わりだよ。」

その瞬間、忌渦飢の周囲に紅い魔力の波が噴出し四方を囲む。

「<sup>レッド・クイーン</sup>赤の女王！！！」

その言葉とともに忌渦飢は頭上に出現した紅い破壊の渦に飲まれる。

「ヌウウウウオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

その球体の渦に飲まれながらも忌渦飢はその体を維持し、逆に破壊しようとする。

「オオオオオオオ！！！！！！！！」

破壊の渦はやがてその流れをやめていき、霧散した。

「な！？」

「フウー、フウー。」

霧散したものの力を使いすぎたのか忌渦飢は片膝を着き荒い呼吸を繰り返す。

「でも残念」

しかし自らの最強の技を破られているにも関わらずフィーナは笑った。

「彩！！」

「分ってる！！！！」



「やっと目覚めたか。」

「獣！？あそこにはユーがいたはずよ！！？」

麟と黄竜も獣の姿を確認すると低く唸る。

「（まさかユーが敗れた！！？いやあの人に限ってそれはない！！  
なら何故！！？）」

「ふむ、我らも最強ともいえる者を送ったからのう。」

「なっ！？何時の間に、京都の全域に私たちの部下が配備されてる  
のよ！！！」

「あれは特別せいだからのう。まあとにかくこれで契約の第一段階  
は終了じゃ。」

「契約？」

「主には関係のない事じゃ。」

崩狐はそう言つと扇子を閉じにこりと笑った。

「とにかく、これで形勢逆転だのう。」



二十六話 華詠VS崩狐 彩&フィーナVS忌渦飢（後書き）

獣復活。次回はユーヘルトか四方院家が刀断か爆鎖か……。お楽しみに。

## 二十七話 特異点とEve（前書き）

さあ、今回はユーヘルト視点。時間を少し戻します。残りのメンバー入れるの難しいんだ。

## 二十七話 特異点とEve

十字剣が俺を貫こうとしたその時それは起きた。俺の足元が崩れ俺は体制を崩した。その御蔭で十字剣は俺を貫くことなく壁に深々と刺さった。

「何が起きやがった!!?」

俺は起き上がりすぐさま辺りを見渡す。少女も俺と同じように何が起きたのか周囲を見渡す。

「まさか!?!」

俺は封印されていた獣を見る。獣は封印されていた時よりその脈動を大きくし体を広げようとする度鎖は一本また一本と引き千切られていく。

「輪廻の蛇の発動に引き寄せられたか!?!」

俺は舌打ちをする。くそっ!!!

「獣の活動を確認。優先順位を変更。」

少女はそう言う。獣の方へ手を伸ばした。獣は全ての鎖を引き千切るとやがて天井を破壊し地上を目指して這い出て行く。

「これより獣の回収を行います。」

少女もまたそう言う。獣の後を追って飛翔する。

「獣の回収だど！！？くそつ。まさか！！！」

俺は最悪の事態を考え獣と少女の後を追いついでいく。

「くそつ、どんだけ深いんだよこの穴！！」

俺は焦りのあまりそう悪態付く。

「光！！ようやく出口か！！！」

俺はその光に向かい一気に加速する。地上に出た俺が最初に見たものは見る影もないほどに破壊された京都の街だった。

「つち、奴らは何処に居やがる！！」

あの巨体だ少女はともかく獣は隠れることなど出来ないだろう。・  
いた！！後ろを振り向いた俺が見たものはそれに向かい吠える獣の姿だった。

「あいつは！？」

俺は次いで少女の姿を探す。

「あそこか！！」

見ると少女は獣の額に手を当て静止していた。

「止めやがれ！！！」

「これより獣との同化を開始します。」

少女がそう言うのと掌に青白い光が集まり獣は徐々にだがその力を失い少女へと吸い込まれていた。

ウロボロス  
「輪廻の蛇！！！！！」

俺は少女に向け一匹を少女に向かわせる。

「同化終了。誤差0.25%。」

しかし輪廻の蛇が届くよりも早く少女は獣を吸収し、輪廻の蛇を受け止める。

「くそ！間に合わなかったか！！！」

俺は受け止められた一匹を戻すと少女に向けて跳んだ。

「やれ！輪廻の蛇！！！！！」

俺は少女に向け全ての竜を向かわせる。竜たちは不規則な動きで少女を惑わし喰らいつこうと迫る。

「発動。目標境界の獣。・・・発射。」

その言葉とともに青白い光を帯びた無数の剣が俺目掛けて飛んでくる。

「噛み砕け！！！！！」

俺は向かってくる全ての剣を撃ち落とす。

「終わりになき罰」  
エンドレスパニッシュ「！！！！！！」

俺もまた少女と同じ様に巨大な杭と無数のナイフを出現させ発射する。

「聖者の剣・・・発動。」

少女は先程と同じ十字剣を出現さる。しかし出現した剣は先程放たれた無数の剣と同じように青白い燐光を放っていた。

「獣の力か。」

俺は苦々しげに呟く。

「発射。」

その言葉とともに音速を超えた速さで迫る十字剣。その剣は向かってくる杭とナイフをモノともせず此方に向かってくる。

「輪廻の蛇！！」

俺はそう言つと七匹全ての竜を俺を囲むよう指示し十字剣から身を守る。

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
！！！！！！！！

勢い良くぶつかった剣は七匹の竜を貫けず碎け散った。

「くそっ！！！」

互角の勝負ではあるが獣を吸収した分少女の方が有利だ。

「ならっ！！！！僕どもその血肉を、魂を俺に奉げる！！！！！」

俺がそう言つと黒い影の様なものが俺を覆う。

「ここで喰われる！！！」

俺はそう言つて少女へと全力で走る。

「血染めの鉤爪！！！」  
ブラッディネイル

俺は爪の様に変わった影を振るう。

「・・・境界の力と断定。迎撃します。」

しかし少女は浮遊する剣を出現させ俺の右腕を受け止める。

「まだまだこんなもんじゃねえ！！！」

「インフェルノ！！！」

俺がそう言つと俺の全身の影が全方位へ伸び攻撃する。

「・・・障壁展開。」

少女の言葉とともに少女の周りに半透明の壁が出来る。影は障壁に

ぶつかるが一瞬で障壁を破壊する。しかし少女はその隙を逃さず影が障壁を破壊する前に脱出した。

「っちい！！ホント厄介だな。だが・・・」

俺は右手に黒と銀で染め上げられた剣を持つと影と輪廻の蛇を集中させる。

「これで終いにしてやる！！！」

「敵魔力増大。破壊する。」

少女が魔力を集中させるがもう遅い！！！！

「我が勝利が為に！！！！！」  
ワン・フォー・ワン

「あるべき秩序」  
オーダー・ワン

俺と少女の二つの力が激突し俺達は光に包まれた。



## 二十七話 特異点とEve（後書き）

ユ一とEveの戦闘・・・・・・・・・・まだ続くよ!!!

## 二十八話 衝突 援軍 限界

「よもや、獣を吸収したEveと互角に戦える者がいるとは……。」

崩狐はそのことに驚きを隠せないようで、目見張っていた。

「ええ、心強い味方がいるもの。」

華詠は獣の復活とEveの行ったことには驚いたものの、ユーヘルトが生きておりEveと互角に戦っていることを知ると冷静になり目の前にいる崩狐に集中した。

「随分信頼しておるの。」

「ええ、彼なら勝てると信じているもの。」

「ならその信頼を砕いてやろうぞ。」

崩狐は扇子を構える。

「主を倒しての。」

「あら、倒されるのは貴方でしょ？」

「ほざけ。」

崩狐は華夜へと距離を詰める。接近してくる崩狐に華詠は黄竜では間に合わないと麟を向かわせる。

「ふん、麒麟ごときが!!」

「二匹ならどうかしら。」

麟が崩狐と対峙している間に華詠は素早く距離を取ると黄竜からのプレスを喰らわせる。

「っちい!!! 生意気な!!!」

流石に危険だと感じたのか崩狐は麟を弾くとその場から移動し黄竜の攻撃を避けた。

「逃げるのは上手なのね。狐さん。」

「我を愚弄するか。その罪死して償え!!!」

崩狐は自らの妖力を扇子に込めると華詠に向け勢い良く振るった。すると扇子から放たれた風は崩狐の妖力により大きくなっていき巨大な竜巻となつて華詠に向かった。

「つく!!! 麟! 黄竜!!!」

華詠は二匹に命令すると麟は雷を落とし黄竜は龍脈の力を使い地面から光の柱を発生させ竜巻を止めようとする。

「大きすぎる!!!」

しかし竜巻は規模こそ小さくなったものの止まらずに華詠を飲みこんだ。

「ふんっ！！！」

「がつ！！？」

「ぐう！！！」

忌渦飢は二人の背後に回ると回し蹴りを放つ。

「どうやら、先程の攻撃で力を使い果たしたようだな。」

忌渦飢はそう言つと右腕に妖力を溜める。

「今楽にしてやろう。」

忌渦飢は二人にとどめを刺そうと右腕を持ち上げ、

「さらばだ。」

振り下ろした。

「……………！！！」

二人は来るであろう攻撃から目を閉じる。

「・・・・・・・・・・？」

しかし何時まで経ってもその衝撃はこず二人は目を開ける。

「平気かのう。二人とも。」

そこには忌渦飢の右腕を押さえて立つ爆鎖の姿があった。

「鬼神か。なかなか面白い奴が来たものだ。」

「こんな状況でなけりやあ楽しめたんだがのう。」

爆鎖は真剣な表情で言った。

「悪いが二人がかりでいかせてもらう。」

爆鎖のその言葉とともに忌渦飢の右腕が切断される。

「っ！？」

忌渦飢は腕が切断されるとすぐさまその場から離れる。直後、先程まで忌渦飢の立っていた場所に斬激が飛んできた。

「外したか。さすがは大妖怪。なかなかの反応だ。」

その声ができる方を見るとそこには夢桜を構えた刀断の姿があった。

「……半妖の侍に鬼神。面白い、貴様ら相手ならば先程よりも遙かに面白い戦いが出来るだろう。」

忌渦飢の右腕は既に再生しており、忌渦気は構える。

「悪いが儂らは主の余興に付き合つ気はない。」

「早々に退場してもらおう。」

二人はそう言つて構えた。

「オラァ!!!」

俺は少女の脳天へと剣を振り降ろす。

「……無駄。」

少女は無機質な声でそう言つと振り下ろした俺の剣を避ける。

「糞が！輪廻の蛇!!」

俺は少女を追撃する。

「……障壁展開。」

少女は目の前に障壁を出すと俺の輪廻の蛇が所障壁にぶつかった一瞬で此方に反撃を仕掛ける。

「んなもん効くかよ!!！」

俺は向かってくる剣を叩き落とす。しかし、妙だ……。奴は明らかに先程より攻撃をしてこない。畏か、それとも他のなにかに氣を取られているのか。

「どっちにしろ。ここにくたばれ!!！」

俺は剣を横に一閃し受け止めた少女を吹き飛ばす。

「隙ありだ!!！」

少女が体制を立て直す一瞬の隙に俺は魔法陣を展開する。するとその魔法陣からは数えきれないほどの魔力の矢が発射される。

「……回避不能。」

その矢は次々に少女に当たる。

「……空間転移。開始。」

不味い。逃げられる!!!その声が聞こえた俺は少女に向け全速力で走り剣を振り下ろす。

「逃がすかよおおお!!!!！」

しかし少女はその剣が当たる寸前で転移しその場からいなくなった。

「くっそ！！畜生がああああああ！！！！！！」

俺は空に向け思いのまま吠えた。



二十八話 衝突 援軍 限界（後書き）

何か煮え切らない。そしてネタが出て来たのに忘れてしまった。・  
・なんてこったい。京都編もあと少しで終了かなあ。京都編が終  
わったら番外編を入れるかどうか迷ってます。・・・・・どうしよ  
っかなあ。

## 二十九話 記憶（前書き）

前回は煮え切らな&中途半端だと思い今回は長め。  
見せてやるよ！！俺の本気を！！！！

もしかしたら前回は大幅に編集するかも……。

## 二十九話 記憶

少女が去ったすぐ後、俺は少女の魔力の残り香を探し転移した方向へと向かう。

「逃がすかよ。」

獣を吸収できたということは奴は間違いなく俺と似た存在。

「奴の居場所が分るかもしれない。」

俺は先程よりも速く走る。

『あらあら、そんなに急いじゃって。』

すると俺の頭上から若い男の声が聞こえ、俺はその声に見張る。  
……この声は……！

「てめえ……！！！！！！」

俺が立ち止まって頭上を見上げるとボロボロのマントを着て魔法使いの様な帽子を被った奇怪なモノがいた。

『そんなに急いでどうしたんですか？』

「やっぱりアレはてめえのか……！！」

『アレ……ああ Eve のことですか。いやあ、なかなか強かつ

たでしょう？貴方の為に創ったんですから。』

「姿を現しやがれ！！」

『いやだなあ、そんなの怖くて出来ませんよ。』

男の声はそこで途切れると、暫くの間をおいて

『だから暫く黙ってて下さいよ。』

男がそう言つと俺の周囲から鎖が出現し俺を拘束する。

『ま、少しだけ冬眠してて下さいよ。哀れな蛇。』

その声とともに俺の意識は闇の中におちていった。

「む。」

崩狐は華詠にとどめを刺そうとするが突如転移してきたEveを見るとその場で静止した。

「命令受諾。作戦を終了し直ちに撤退します。」

崩狐はその言葉を聞くと眉を顰めるが諦めたのか華詠を見て言った。

「今宵はなかなかの余興であつたぞ。次相見える時まで腕を磨くことじゃ。」

「ま、待ちなさい!!」

崩狐は華詠に背を向けるとEveと共にその場から消えて行つた。

「霸っ!!!!」

刀断が振り下ろした刀を忌渦飢はその軌道をずらして避けその拳を叩きつけようとする。しかし忌渦飢が接近しようとする目と目の前が爆発し忌渦飢はそれ以上の接近を断られる。

「ふん!!」

忌渦飢が怯んだ隙に爆鎖は背後に回り、殴りつける。

「流石は鬼。とんでもない力だな。」

「傷一つない体で言われてものう。」

忌渦飢はかすり傷一つない様子で言う忌渦飢を爆鎖は苦虫を噛み潰した様な顔をして言う。

「爆鎖！！！」

刀断の呼ぶ声を聞くと爆鎖は忌渦飢の周囲ごと爆発させ目を眩ませる。

「桜花断！！」

刀断はその爆炎に向け刀から五本の紫の斬激を飛ばす。爆炎はその衝撃により吹き飛ばされ其処には右腕を無くし蹲る忌渦飢の姿があった。

「貴様何をした。」

忌渦飢は刀断を睨みつける。

「何、能力を使ったまでよ。避けられないか心配ではあったがな。」

「安心せい。その痛みも感じ無くしてやろう。」

二人の言葉に忌渦飢はその顔を怒りに染める。二人は油断なく構え忌渦飢へ向かう。

『いやいや、思ったよりも苦戦していますねえ。』

「「！？」」

しかし忌渦飢の周囲に突如魔法陣が展開され無数の矢が発射される。

「なっ！これはユーヘルトの！！？」

二人は向かってくる矢を弾くが魔法陣からの攻撃は未だ止む事無く発射され続けていた。

『迎えに来ましたよ。』

その声が聞こえると忌渦飢の傍にボロボロのマントを着て、童話の魔法使いの様な帽子を被った奇怪なモノが現れた。

「ucci、貴様か。邪魔をするな。」

忌渦飢はその不機嫌な顔を隠そうともせず言う。

『嫌だなあ。助けに来てあげたじゃないですか。それにしても随分とやられましたねえ。』

「ふん、高みの見物とは良いご身分だな。」

『代わりに帽子屋マッドハッターを送ったでしょう？まあ兎に角戻って来て下さい。用事は終わりましたし。・・・面白いものが見れましたから。』

「・・・・貴様等、この借りは必ず返す。」

そう言うとき忌渦飢は帽子屋と共に消えて行った。

「クソッ！！」

「刀断！二人を運ぶぞ！！それに姫様達がどうなったかも気になる。」

「悪態をつく刀断だが爆鎖の言ったことを聞くと今は目の前の事に集中した。」

「姫様！爆鎖、拙者は姫様の元に向かう。お前は二人を！！！」

それだけ言つと刀断は猛烈な勢いで華詠の元へと向かう。

「……まったく。これは虎子と花湖を呼んだ方が良いかのう。」

爆鎖はそう言つと二人を担ぎ虎子たちの元へと向かった。

俺は闇の中で何かを見ていた。……これは誰だ。

こ……筈じゃなか……だけ、ね

誰かが血を流しながらも微笑んでいる。

まだ……だね。……じゃ……てない……よ

場面が変わり今度は別の誰かが言っている。



．．．．を．．．頼んだぞ

また場面が変わり誰かが言う。

お前．．．は．．．きに．．進め

はや．．．ってやれ

あな．．．くべきです

．．．ぬ前に．．．来いよ

．．．じてますよ

次々と場面が変わり誰かが言っでは変わっていく。

．．．．けてくれんでしょう

この声はどこかで聞いた、何処だ、どこだ、どこだどこだどこだどこだ。

ヒヤッハッハッハッハ！！！！気分はどうだ？犬っころお

！！！！

こいつは、この声は．．．．

まあ、ゲームオーバーだ。さようなら、犬っころ

「・・・・・・・・!!!!?」

その声とともに俺の意識は覚醒した。

「・・・・・・・・どこだここ。」

俺は何処かの部屋にいた。・・・・・・・・マジ何処?

「俺は・・・・・・・・どうしてたんだっけ。」

何か夢を見た気がするんだが・・・・・・・・思い出せない。

「まあ、いいか。」

思い出せないつつうことは大切なものでもないだろ。俺はそう結論付け布団から起き上がり部屋の襖を開こうと手を掛けた。

「・・・・・・・・から、大丈夫なの!!!?」

「大丈夫だと言って・・・・・・・・るで・・・・・・・・う!!!!」

「じゃ・・・・・・・・で・・・・・・・・きないのよ!!!!」

「分りませんよ!!!!!!」

襖の向こうから怒鳴り合いが聞こえてくる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今行ったら巻き込まれるかなあ・・・・・・・・。などと考えていると突

然向こうから襖が開けられる。

「うおっ!!」

突然開いた事に驚く俺、向こうも驚いたのか後ずさる。

「起きてたのね。」

襖を開いた人物、彩は俺を見てそう言った。騒いでたもう一人は虎子か……。

「随分寝てたのね。」

向こうから華詠が言ってくる。おいおい、全身傷だらけで無事なところが見当たらねえぞ。

「どれくらい寝てたんだ？」

「三日。」

三日か随分寝てたな。

「他の連中は？」

「皆街の復興や治療よ。」

まああれだけの規模だったんだし、当然か……

「敵は全員撤退。今その行方を追わせてるわ。まあ、何にしても」

華詠はそう言つて扇子を取り出す。・・・何処から出した。

「戦争は終わりよ。」

そう言つて笑つた。

## 二十九話 記憶（後書き）

ごめんなさい！！！！本気とか言って書いてる量少ない。恥ずかしい。  
。。。

絶対今日明日中に投稿するから許して下さい！！！！！！

三十話 2人（前書き）

今度こそ俺の本気を見せてやる！！！！（笑）などとは言わせない  
！！！！

三十話 2人

「随分と治るのが早いな。」

俺は今京都の街中に来ている。やはり街は復興中の様だがそれでも随分と進んでいる。

「流石は妖怪。しかし・・・。」

「何で普通にいるんだよ。」

街中には既に人が戻って来ている。それでも妖怪たちは隠れるどころかむしろ堂々とした姿で復興作業をしている。人間たちも全然驚かないし。

「華詠が言うには術で催眠を掛けてるらしいよ。」

俺の疑問に上にいるフィーナが答える。何で上にいるかつて？肩車してんだよ。・・・何か文句でもあるのか？

「成程ね。」

まあそりゃ掛けないと面倒臭い事になるからな。俺達はそのまま京都の街を進んでいく。

「あ、竜玄がいるよ。」

フィーナが指さした方向を見ると確かに竜玄がいた。・・・キャバクラの前に。何だアイツは馬鹿なのか、馬鹿なんだろう。昼間か

ら行くような所でもねえし、他の奴らは働いてんのに何でアイツはキャバクラなんだよ。

「フイーナいいか。あれは腐ったゴミだ。見ると目が腐るぞ。」

「そうなの？そっかあ竜玄は腐ってるのかあ。」

俺達がそう言っていると向こうも俺達に気付いたらしい。此方に手を振ってくる。

「さて、次の処に行くかな。」

だが俺達は竜玄に背を向け小走りでその場から離れようとする。

「おい、待てよー！！」

「さてこのままいくぞ。」

「おいー！！」

「あ、あそこ面白そうだよー！！」

「待てと言ってるだろうがー！！？」

俺達の目の前へと飛び出してくる竜玄。

「何だよ、こっちに来るな。」

「何でそんなに冷たいんだよー！！」



「ねえ腐った竜玄。」

「腐った!?!」

「何でゴミ箱にいないの?」

「酷!?!?!?」

たく何で寄って来るかな。というかお前も少しは街の復興に協力しやがれ。何で初対面の際はあんだだけの威圧感出しといて今はこんなになってんだよ

「初対面は好印象で決めたいだろう。」

「そうか。それと何気に人の心を読むな。」

「いや何となくそう思ってると感じただけだ。」

何気にお前ハイスペックだな。しかしこれ以上いると面倒臭い。

「あ、虎k「じゃあまたな!?!」・・・速いな。」

どんだけ虎子の事苦手なんだよ。

「行くか。」

「うん!」

邪魔が居なくなったので俺達は先に進んでいく。

「・・・どうしてこうなるのかね。」

俺はそう愚痴を溢す。

「きちんと私の話を聞いているのですか!!」

「ああ、うん、聞いてる聞いてる。」

「何ですかその投げやりな返答は!!!!そもそも貴方は怪我が治っていないのに出歩くんじゃないやありません。もしそれで傷が開いてしまったらどうするんですか？貴方はもう少し自分の身をきちんと考えるべきです。貴方が心配しなくとも周囲にいる人々は貴方の事を心配しているのですよ？貴方が傷つけば周囲にだってそれだけ心配も掛ける。彩だって貴方の行動には毎回心配しているのですよ。他にも・・・」

う、うぜえ。何だこの説教は・・・。しかも自分に非があるから言い返すことすら出来ねえ。竜玄、お前が何であそこまで虎子の事を苦手に思ってるのか良く分った。・・・だからよ

「虎子さん虎子さん。あそこに竜玄が。」

「む、ちようどいい。竜玄、貴方も此方に来なさい。貴方にも言い

たい事があります。」

呼ばれた竜玄は一度体をびくりとさせると俺の方を忌々しげに睨みながらも渋々此方に来た。

「（てめえ、やりやがったな。）」

「（貴様も道連れだ。）」

「（ふざけんな。地獄にはお前一人で行きやがれ。）」

「（俺達、友達だろ？）」

「（何爽やかな顔で言ってるの！？）」

「（俺に見つかったのが運のつきだ。）」

「（ちくしょう。覚えてやがれ。）」

「（残念ながらもう何をしたか忘れてしまったよ。）」

「（お前は子どもか！！？）」

俺達はその場で意思疎通し合う。

「二人とも！私の話を聞いているのですか！！」

「「ハイ、キイテオリマス。」」

俺達はその後一時間ほど説教をされ続けた。

「あゝ、足が痛い。」

俺は説教から解放されると近くの店で休んでいたフィーナを呼んで再び街を進んでいた。

「流石にあれはね。」

フィーナも苦笑する。

「それで何処に行くの？」

フィーナは首を傾げて聞いて来る。

「京都中心地。」

「……中心地の何処？」

フィーナは嫌な予感がしたのか間をおいて聞いてきた。

「獣がいた場所。」

俺がそう答えるとフィーナは少し顔を顰めたが諦めて俺に着いてき

た。

「しかし、完全に封鎖されてなくて良かったな。」

俺達は今獣の封印されていた場所にいる。辺りは瓦礫で埋まったり崩壊したりで足場はほとんどない。

「それで何を探すの？」

俺が瓦礫の上を歩いていると横からフィーナが聞いて来る。

「剣だよ。」

「剣？」

「そ、でかい十字剣。」

確かここら辺にあるはずなんだよな。俺が瓦礫をどかして探しているとフィーナが片手を瓦礫の山に向け

「えい。」

握りつぶす動作をする。すると瓦礫の山は一瞬にして粉々になる。・

「……いやいやいや、フィーナさんマジですか？

本来フィーナが能力を使う時無詠唱ではあるものの最後の能力発動の時に鍵<sup>キ</sup>となる言葉が必要だったはずだ。

「えへへへ。頑張つて出来るようにしたんだ。まだ大まかなモノ以外だと鍵が必要だけど。」

フィーナは照れた様子で言う。本当に役に立つな。

「あ、あれじゃない？」

俺がそんな事を考えているとどうやら目的の十字剣が見つかったようだ。俺はその十字剣を持ちじっと見つめる。

「聖者の剣……ね。」

俺はあの少女、確かEveと呼ばれていた少女の事を思い出す。

「やはりアイツは……」

そしてあの時の男の声を思い出す。……やっと見つけた。

「夢現、必ずてめえを……」

とある一室に二つの影があった。

「獣を回収後、京都は破壊するのではなかったか？」

崩狐はそう言つて目の前にいるスーツを着た細めの男に問う。

「まあ予定変更ですよ。」

男はそう言つて肩を竦める。

「まあ良い。しかしEveだけでなく帽子屋まで使うとは思っていなかったぞ？」

「元々使う予定ではなかったんですが・・・忌渦飢があそこまでやられるとは思わなくて。」

「あの右腕、まさか再生することが出来ぬとはのう。」

「再生できなくともどうにかすることは出来ますがね。・・・で右腕の調子はどうです？」

男がそういうと部屋の奥から忌渦飢が現れる。忌渦飢は自分の右腕にある黒く染まった機械の様な義手を見る。

「貴様からの贈り物でなければ最高なのだな。」

「酷いですねえ。ああ、そうそう、それ大切に扱ってくださいね？結構貴重なモノなので・・・。」

「俺にこんなものを渡して・・・貴様何が目的だ。」

忌渦飢はそう言って男を睨みつける。

「嫌ですねえ。私は貴方の為を思ってこれを渡したんですよ。」

男は飄々とした態度で答える。忌渦気も諦めたのか視線を右腕に戻す。

「それで面白いものとは何なのじゃ？」

崩狐は興味深そうに男を見ると男は人差し指を口に当て

「秘密ですよ。まあ後で分りますよ。」

崩狐はその言葉に渋々引き下がる。男はその目を少しだけ開け不敵に笑う。二人は男から放たれる威圧感に気圧されたのかぶるりと振るえ僅かに身を竦ませる。

「（くくく。わざわざEveを使ってやったんだ。精々強くなりやがれ。そしたらこの俺の手で・・・」

「殺してやるよ。」



三十話 2人（後書き）

これでどうだあ！！はい、そこまで長くないです。調子こきました  
済みません。実はこれフリーズして消えたのを思い出しながら書いて  
ます。

最近タイトルをどうするべきか迷ってます。変えた方がいいかなあ、  
でもなあ……。。

三十一話 『殺神鬼』 ～ 獣覚醒 ～ (前書き)

これはここで書いて大丈夫かなあ・・・

### 三十一話 『殺神鬼』く獣覚醒く

俺は冷たくなった                      の死体を寝かせ、外に出る。外は未だ炎に包まれ血の臭いがする。俺はそれを一步また一步と歩いて行く。

どうして彼女は死んだ。何故彼女が死ななくてはいけなかった。どうして、どうして、どうして、

俺はその事ばかりを考え歩いて行く。暫く歩いて行く死体ではなく体中を血で赤く染めた化物達がいた。化物達は互いに殺し合いその行動を止めようとしなかった。

そうだ。あいつらだ。此処だ、此処にいる全てが彼女を殺した。

俺はそう思うと顔を歪ませ化物に近づいて行く。

憎い、憎い、憎い、憎い憎い憎い憎い憎い憎い！！！！！！

俺の周囲に影の様なモノが現れると影は俺を覆っていく。

喰らえ、破壊しろ、奴らは敵だ。死ぬべきモノだ。此処に、境界にいるモノたちを全て喰らい尽くしてやる！！！！

影は俺の手足のように動き目の前にいる化物に襲いかかる。化物は影に気づくがもう遅い。影は化物に一切の抵抗を許さずに飲みこんでいく。俺はその様子を冷めた目で見る。

まだまだ、まだ足りない。奴らは一匹残さずに喰ってやる。

俺はさらに影を広げ境界の全てを覆っていく。

喰われる

影は波となり全てを喰らい尽くしていく。

・・・・・・・・・・・・・・・・。

どれほどの時間が経っただろうか。影は境界の全てを喰らい空を覆いくし、境界は闇に染まった。俺はその中で一人佇む。

ぱちぱちぱち

しかし誰もいないはずの境界で手を叩く音がした。見るとそこにはスーツを着た細めの男が立っていた。

「いやあ、素晴らしい！！流石は境界の獣！能力の副作用だけでこれほどの事が出来るとは！！！」

男はそう言つと俺見て被っていた帽子を取りお辞儀をする。

「ああ、すみません。私、夢現と申します。」

男はそう言つとまた愉快そうに笑いながら言った。

「まさか『聖女』・・・ああ、確かアマヅキと言いましたっけ？あれを殺すだけでこれ程の力を解放出来るようになるとは・・・あの鎖はなかなか頑丈だったようですね。」

俺は男の言葉を聞き考える。

コイツは今何と言った？殺した？彼女を？こいつが彼女を？……  
・・ソウカ、コイツガコロシタノカ。

俺はさらに力を出す。すると徐々に俺の周りに七匹の黒く染まった  
竜が現れ目の前にいる男を睨みつける。

「おお、怖い怖い。しかし完全でないとはいえもうウロボロスが出  
現するとは……。最強の獣の名は伊達ではないと。」

俺は肩を竦める男に向かい走る。二匹の黒竜　ウロボロス　で  
男を牽制し、残りの五匹で逃げ場のないよう包囲する。

「おお、本能だけでここまで操れるとは。」

俺は影を手に纏わせると影は徐々に異形の腕となる。

「  
!!!!!!!!!!!!」

俺の声は既に人が出せる様な声ではなく獣の様な声だった。俺は叫  
びながら腕を振るう。

「おっと危ない。」

男は余裕の笑みを浮かべながら回避する。俺は影を男の周りから槍  
のようにして発射させる。男は障壁を展開させるが影は障壁を食  
ちぎって男へと向かいその腕を食いちぎる。すると今まで喰った奴  
らとは比べ物にもならない程の力が俺に流れ込む。

「ほう、獣が神の力を持つとは・・・まあでもそこは同じですか。」

男は興味深そうに此方を見るがすぐに興味を無くす。俺はウロボロスと影で男を追いつめその首に影を纏わせた異形の腕にある爪を突きたて引き裂く。

「がつ・・・。っち、やっぱり上級神程度の身体じゃ持たねえか。ヒヤハハハハハ！！今回は前回よりも楽しめそうだなあ！！・・・でも俺を殺したかったらその程度じゃ話にもならねえがなあ。」

男はそう言つて笑うと意識を失う。するとそこにいたのは先程の男ではなく髭を蓄えた老人になっていた。俺は男を逃がした事に憤りを感じると目の前にいる老人を影で余すことなく喰らい尽くし髪の毛一本残さなかった。そして俺は本当の化物になった。

## 三十二話 『殺神鬼』〜再〜

・・・・・・この臭い。

獣は座っていた場所から立ち上がり傍らに刺してある剣に手を伸ばす。既にユーヘルトであったモノはその全身を影で黒く染まり周りには七匹の黒竜を従えその姿は悪魔ですら恐怖する程の圧倒的威圧感を出し正しく化物になっていた。

・・・神か。

あの日獣が夢現が依り代としていた神を喰った日から徐々に神達や悪魔達が集まって来ていた。獣を滅ぼすために。

・・・関係ない。全て喰うだけだ。

獣はゆつくりと、しかし圧倒的存在感を出しながら向かった。

・・・・主神達はいない。

神達のいる場所からは名前すら分からない程度の力から上級神程度の力を感じるが主神達の力の一つも感じない。

・・・まあいい。

獣をズルズルと引きずっていた剣を神達のいる方向へと投げる。すると突如神達がいた場所から何かが崩れる音が聞こえる。

・・・・・・死ね。

獣はその音を聞くと周囲から影を呼びだし神達の元へ向かわせる。

影達が向かい一分ほど経った頃には獣以外の力は感じずそこには死体しかなかった。少女の屍に願いを叶えることを約束してから獣はひたすらに力と情報を喰った死体から集めていた。獣は喰った神と悪魔達の影響によりその身は神に等しくなりその力は悪魔を超えるほどの禍々しさを宿していた。

「あと、一步。それで基盤は出来上がりますね。」

誰もいないはずの世界、獣のいる場所から遥かに離れた教会。そこにある少女、アマヅキの死体が安置されている場所に夢幻はいた。

「そのためには貴方が必要なんですよ。」

男はそう言つと少女の死体に触れ、目を開け口を弧にして薄く笑う。

「だからとつと目覚めろや。・・・人形。」

獣は一步また一步と教会へと歩いて行く。やがて獣が教会の扉を開けようと手を触れ、その動きを止めた。教会の中から一つの気配を



感じとったのだ。

……誰だ。

獣はその手に持つ剣に力を込めると扉を開ける。

……どこだ。

獣は教会の中に入り中央にある象に近づく。獣は後ろから感じる気配に気づき即座に後ろを向く。そこにはまだ幼い10歳程度の少女がいた。

……！！！！！！！！

獣は初めてその顔を驚愕に染めた。なぜなら髪や目こそ違うもののその少女は余りにも彼女に似ていたからだ。

「貴方も迷子？」

少女は首をかしげて言う。獣は今だ驚きを隠せず獣の心境を表しているのか影もその動きを乱していた。

「実はね、私も迷子なんだ。気付いたら此処にいて、名前も分らないの。」

少女も困った顔をして言う。獣はその手にある剣を床に落とし震えながらも少女に近づく。

「ア……マツキ。」

獣は初めて声をだし腰を落とし少女の頬に触れる。

「アマツキ？」

少女はその言葉に首を傾げる。獣は一瞬その顔を歪める・・・

「何でもない。」

獣はそう言つと少女を抱きしめる。少女もまた抵抗せず獣を抱きしめる。

・・・

獣はその体を震わせ獣の頬をツーツと何かが伝う。少女は先程よりも力を込めて抱きしめる。徐々に獣を覆っていた影は消えていきそこには一人の男がいた。男はその顔を濡らし震えていた。

「・・・あ、や。」

「？」

「君の・・・っ、名、前は・・・彩、っだ。」

「あや？」

「そう・・・っ。世界・・・に、色をつつ・・・けるんだ。」

「色を・・・。」

少女はそう言つと先程よりも微笑み。確認するように何度も自分の

名を言う。

「彩。うん、私の名前は彩。ありがとう。貴方は何て言うの？」

獣は涙を拭い少女を見ると精一杯笑って言った。

「ああ、俺は」

それが一匹の獣と一人の少女の出会いだった。

三十三話 『殺神鬼』 ～狂鬼～ (前書き)

しばらくはこの番外編(の様なもの)をお楽しみください。なにげにストリを作る上で重要だったり・・・するかもしれないので。

三十三話 『殺神鬼』く狂鬼く

雪の降る寒空のなか二人組の男女が森の中を歩いていった。一人は金髪青年、もう一人はまだ幼い茶髪の少女だった。

「何処に行くの？」

「そうだな。砂漠に行こうか。」

「砂漠？」

「ああ、そこに用があるんだ。」

「また獣を食べるの？」

「……ああ、あそこに行ったら次は極東にある大和とかいう国だ。」

「極東……。」

「桜っていう綺麗な木があるそうだ。」

男がそう言つと少女はわくわくと言つ音が聞こえてきそうなほどにそわそわし始める。

「早く行こう!!!」

少女はそんなにも早く行きたいのか男の手を取り走った。男は呆れながらも少女と共に森の中を走つていった。

広大な砂漠・・・今そこは戦場となっていた。一方はその身を黒く染めその目は紅く染まっている遠目からでもその大きさが覗える一匹の兎。もう一方はその髪を黒く染め影の様なものと七匹の竜を従えている一匹の獣。砂漠全土を巻き込み二匹の獣の戦いは激しさを増していた。

「ユーー！！！」

少女の声と共に男、ユーヘルトに兎の巨体から放たれる光が降り注ぐ。その光は周囲を飲みこんで破壊していく。

「下がってる！！」

しかし男はその身から兎が放った光以上の影を出現させその光を飲みこんでいき霧散する。

「……………！！！！！！！！！！」

獣はその光景に怒りを感じたのか先程とは比べ物にならないほどのスピードでユーヘルトに迫る。ユーヘルトは七匹の黒竜で獣の動きになんとか対応する。

「ラァッ!!!」

ユーヘルトは影から黒と銀で染まった剣を取り出し獣に切りかかる。しかし剣は獣の遙か前、何も無い場所を切りつける。

「!!？」

獣はその隙を逃さずに右腕でユーヘルトを押しつぶさんと振り下ろす。ユーヘルトは素早く後ろへ飛び退くがの攻撃の範囲外へ出ることは出来ずその衝撃に吹き飛ばされる。

「ガアッ！！！！つ距離感を狂わされた！？」

ユーヘルトは目の前にいる兎の能力を見破るが既に獣は額にある今まで閉じて隠していた眼を開くと膨大な量の魔力を集中させる。

! ! ! ! ! ! ! !

獣は吠えると未だ空中で身動きの取れないユーヘルトへと狙いを定め。その瞳から闇の様に黒い閃光がはしった。

ズガアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！

その閃光はユーヘルトを飲みこもうと迫ってくる。

「第0拘束術式解放 輪廻の蛇 完全起動!!!」

迫ってくる閃光をユーヘルトは影で覆われた獣の手で受け止める。

[illegible]

「!!!!!!!!!!!!!!」

「

—————!!!!!!」

「!!!!!!!!!!」

二匹の獣の咆哮は砂漠全土に響き、二匹の咆哮はやがて爆音によって掻き消された。爆発によって辺りには砂と煙が舞い二匹の姿を隠していた。すると兎の頭上の煙が吹き飛びそこからは全身が傷だらけのユーヘルトが現れた。

「ハアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ユーヘルトは両手で振りかぶった剣を獣に向け振り降ろす。その剣は吸い込まれるようにして獣の額にある眼へと振り下ろされる。

「

—————」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

獣は吠えるとやがて力尽きたのか倒れ動かなくなった。

「・・・・・・・・悪いな。」

ユーヘルトはそういうと影で獣を覆いやがて影が消えるとそこにはあの兎の姿はなかった。

「・・・・・・・・」

「ユー!!!!!!!!!!」

ユーヘルトが兎のいた場所を見ていると彩の声が聞こえた。ユーヘ



ルトが後ろを向くと心配そうな表情を浮かべた彩が此方に駆け寄って来ていた。

「だ、大丈夫！？血がたくさん出てるよ！！」

「ああ、大丈夫だ。」

ユーヘルトは額から出血していた血を拭うとそう言った。それでも心配そうな表情をする彩に手当を頼んでその場に座った。

「無茶しちゃ駄目だよ。私だっているんだから危なくなったら頼ってね？」

「ああ、これからはそうする。」

やがて手当が終わったユーヘルトは脱いだ服を取るとそれを着て彩と共に砂漠の中を再び歩き出した。

「次は大和か。」

「どれくらいかかるの？」

「そうだな。・・・走れば一週間。歩いて二ヶ月か。」

「遠いなあ。早く桜みたいなの。」

彩は嬉しそうな顔をしてユーヘルトに大和がどのような所か聞きながら進む。ユーヘルトもその隣で彩の質問に答えながら歩いて行く。やがて二人の足跡が消えていきそこには静寂で包まれた世界が広がっていた。

三十三話 『殺神鬼』 ～狂鬼～（後書き）

ふははははー！！！！テストがヤバいぞー！！！！勉強だ勉強だー！！！！！！

三十四話 『殺神鬼』 闘

「……綺麗だね。」

彩はそう言いながら桜並木を歩いて行く。

「そうだな。」

ユーヘルトもここ最近の獣との戦いによって疲れていたのか。ゆっくりと周りの景色を楽しみながら進んでいた。人の姿も見えなく二人は思う存分に桜を見ながら休んでいた。

地面に座り桜を見ている内に彩は寝てしまった。今までの長旅等の影響で疲れていたのだろう。ユーヘルトは彩を木に寄り掛からせ頭をなでると強力な結界を張ると桜を見ながらおもむろに口を開いた。

「いい加減に出てきたらどうだ。」

「……ばれていたか。」

すると後ろから足音と男の声が聞こえてきた。

「なかなかのもんだった。俺ですらさつき気付いたからな。」

「褒め言葉と受け取っておこう。」

男はそう言つと腰に刺した剣に手を添える。

「獣だな。」

「ああ、そう言つお前は相当上位の神だな。・・・主神クラスか？」

「左様、我が名は三貴子が一人、素戔男尊。」

男はそう言つと剣を抜きユーヘルトへと向けた。

「主の命ここで貰い受ける！！！」

スサノヲはそう言つとユーヘルトへと駆ける。

「草薙剣！！！」

スサノヲが剣を振るうと雷撃が飛んでくる。

「ちつ、狂え！！！」

ユーヘルトの言葉と共に雷撃は先程とは全く違う方向へと飛んでいく。スサノヲはその様子を見ると剣を構えながらユーヘルトを見る。

「貴様、何をした。」

「兎の力だよ。まあ最近手に入れたモノだから効くかどうか分らな

くて心配だったが……。」

「兎だと?」

ユーヘルトはそれだけ言うとスサノヲに向かっていく。

「くっ、何だこれは!?!」

狂兎の能力によって五感を狂わされたスサノヲはユーヘルトをとらえることが出来ずにいた。

「喰らえ。」

ユーヘルトは混乱しているスサノヲへと影を放った。スサノヲは剣を構え眼を瞑る。

「破っ!!!」

スサノヲが剣を振るうとスサノヲに向かっていたはずの影は断ち切られる。

「なっ!!!?」

その光景にユーヘルトは驚愕する。さらにスサノヲは正確にユーヘルトがいる場所へと雷撃を飛ばす。

「くそっ!!!主神どもはどいつもこいつも化物だな!!!」

ユーヘルトはついこの前に戦ったオーディンとの戦闘を思い出す。

「貴様も十分に化物だ。」

スサノヲはそう言って神力を集中する。

「こんなもの！！！！」

そう言ってスサノヲは狂兎の能力を撥ね退ける。

「滅びろ！！」

スサノヲは一瞬でユーヘルトとの距離を詰めると横へと風ぐ。

「がつ・・・！！」

ユーヘルトはその一撃に一瞬意識を飛ばすがすぐに持ち直し続ける斬撃を影で防ぐ。

「第0拘束術式解放 輪廻の蛇 完全起動！！」

このままでは負けると思ったのかユーヘルトは力を全て解放し黒竜で反撃する。

「それが貴様の獣の力か！」

スサノヲは黒竜を弾きながらユーヘルトへ近づく。

「この一撃で終わらせる！！！！」

「なめんじゃねえよ神風情が！！！！」

スサノヲの雷を纏わせた一撃をユーヘルトは剣を取り出し受け止めようとする。

「雷火！！！！」

「我が勝利の為に！！！！」  
ワン・フォー・ワン

二人の周囲は余波で破壊されていきその中心である地点には二人の剣を受け止める一人の女性がいた。

「「なっ！！！！」」

二人はそのことに驚く。スサノヲはその人物が自らの知り合いである事に驚き、ユーヘルトは自分たちの一撃を素手で受け止め無傷にいられること驚愕した。しかしユーヘルトは一瞬でその場から離れ再び剣を構える。

「何故邪魔をするのです！！」

スサノヲは叫ぶ。しかし女性は気にせずユーヘルトの方を向く。

「二人とも周囲を破壊しすぎ。それに熱くなり過ぎ。」

女性はやれやれと言うとユーヘルトに笑いかけた。

「なかなか強いね。流石は噂の獣。うん、決めた。」

女性は頷くと言った。

「君、この国の神の石柱に決定。」

二人はその言葉の意味を理解出来ずその場に呆ける。女性はいくつと、いかにも名案であるかのように頷いている。暫くしてその意味を理解した二人は思わず自分の武器を取りこぼし叫んだ。

「ハア――――！！！！？」

それが当時のスサノヲと女性、アマテラスとの初めての出会いだった。



三十四話 『殺神鬼』 ～ 闘 ～ (後書き)

すみません。眠くて出来はそこまで良くないかもしれませんが頑張りました。後は午前中には投稿したいです。

三十五話 『殺人鬼』と神

ユーヘルトがアマテラスの宣言を聞いてから既に千年以上が経っていた。ユーヘルトは断つたもののアマテラスの説得（暴力）と彩の了承によって屈服、即座に他の神への連絡と神社の設立をされてしまい今では完全に神の一員となっていた。

「ガハハハハ！！ほれ飲めユーヘルト！」

「いや、俺は遠慮する。」

只今毘沙門天との酒盛り中である。

「何じゃ儂の酒が呑めないと言うか！！」

「あんたは呑みすぎだ。」

「この程度まだまだいけるわ！」

毘沙門天はそう言って酒を煽るように呑む。

「ユー！」

「ん？ああ、彩か。」

「彩も随分綺麗になったのう。昔はこんなもんじゃったのに。」

毘沙門天はそう言って自分の腰ほどに手をあてる。

「あれだけ経ってるんですから当たり前ですよ。」

彩はそう言って笑う。

「それよりもアマテラス様とスサノヲ様が来たわよ。」

そう言って彩の指さした方向を見れば二人が歩いてきていた。

「久しぶり〜。」

「お前達と一緒に酒を飲んでいるなど珍しいな。」

二人はそう言って近づいてくる。

「おっさんが突然やってきたんだ。」

「失礼な奴だのう。儂はお前の剣の調子を見に来てやったというのに・・・。」

「直ぐに酒呑みだしてるだろうが・・・」

残りの三人も床に座ると俺達と共に酒を呑みだした。

「それにしても二人とも随分馴染んできたね。」

「そりゃあこんだけ長い間いれば馴染むだろうよ。」

「今やすっかり戦の神として信仰されていますから。」

ユーヘルトは呆れたように、彩は苦笑して言った。

「ふむ、ではそろそろ始めるかの。」

毘沙門天はそう言って立ち上がる。

「酒呑んだ状態でできるのか？」

ユーヘルトがそう聞くと毘沙門天はにっ、と不適に笑い言った。

「むしろ酒の御陰でなかなか良好じゃ。ではいくぞ。立てユーヘルト。」

「はいよ。」

ユーヘルトは立ち上がり剣を構える。

「ふむ、前よりは随分隙もなくなってきた。」

毘沙門天も自らの武器である槍を持つ。

「いくぞ。」

「来い若僧。」

ユーヘルトは毘沙門天へと駆ける。

「ハアッ!!」

ユーヘルトは剣を切り上げ突きの連撃を放つ。

「ムン！」

毘沙門天はそのすべてを的確に槍で弾きユーヘルトの足下に槍を放ち動きを止める。

「終わり無き罰」  
エンドレスパニッシュ

近づいてくる毘沙門天をユーヘルトは無数のナイフと杭で迎撃する。

「ふっ！」

毘沙門天は槍を巧みに扱い向かってくるナイフを次々に弾いていく。

「ハアッ！！」

毘沙門天は槍に神力を込め向かってくる6つの杭を一撃で砕く。

「これも防ぐか。ならよ！！」

ユーヘルトは剣を毘沙門天へと向けると剣からは無数の武器が枝分かれしたように生えてくる。

「む！」

それを見ても毘沙門天は止まらずに駆けていく。ユーヘルトはその行動に眉を顰める。しかし次の瞬間には驚愕へと変わっていた。毘沙門天は向かってくる凶器の群れを全て紙一重でかわし向かってきているのだ。それを見たユーヘルトに一瞬動揺がはしる。

「これで終わりじゃ！！」

毘沙門天がその隙を逃すはずは無く一瞬で距離を詰めると槍の先端を首に突き付ける。

「・・・・・・・・・・参りました。」

ユーヘルトは悔しそうに言い地べたに座った。

「しかし前よりは随分隙が無くなっておった。これなら儂もつかうかしとれんのう。」

毘沙門天はそう言って笑う。

「本気のアンタと互角にやりあえるのなんざアマテラス位だろうが・  
・・。」

「・・・・・・・・さあ、次はスサノヲじゃな。早よ武器を取れ。」

「え・・・・・・・・」

毘沙門天はスサノヲへと目を向けると笑いながら死刑宣告をした。  
ユーヘルトはそれを見てざまあみろ、と考えているとアマテラスが自分を見ているのに気づいた。

「じゃあ、次はユーは私とやろうか。」

どうやら、他人よりも自分のみを案じた方がいらしい。

「「（・・・・・・・・生きてるといいな。）」「」

二人は諦めたのか上を向いた。でないとこれからなる自分の姿がありありと浮かんでしまうからだ。

その後ボロ雑巾のような姿をした神二名が発見されたとか。

三十六話 『殺神鬼』 封（前書き）

次からは新章行くかも・・・。

久しぶりのユーヘルト視点さー!!



三十六話 『殺神鬼』 封

「……………」

俺は体内に意識を集中させる。

!!!!

!

!!!!

!!!!

!!!!

すると何かが俺の中で叫んでいる声が聞こえる。それと同時に俺の体に鋭い痛みと共に血が吹き出る。

「っ!!!!…限界か。」

俺はその傷と血を見てあることを決心する。

「で、急にどうした。」

俺の目の前にはスサノヲが座っている。仕事中らしいが遠慮なく邪

魔をして中断させてもらった。こっちも大切な用件なんだ。

「ああ、ちよいと重要な知らせだ。」

俺の真剣な様子を見てなのかスサノヲはきちんと此方に向いて真剣な表情をした。

「で、何だ？」

「ああ。」

俺はそこで一度言葉を区切るとお茶を一口啜る。・・・うま。俺はお茶をテーブルの上に置き改めてスサノヲを見る。

「少し眠ろうかと思う。」

俺の言葉にスサノヲは目を瞑りテーブルにあるお茶を啜る。俺も同じようにお茶を啜る。暫くの間お互いお茶を飲む音だけが聞こえた。

「・・・・・・一応理由を聞いておこう。」

暫くしてスサノヲは口を開くとそう言った。

「・・・・ガタがきてるんだよ。」

「元々黙つてのは一種の災厄。人々の憎悪や、世界のバランスの為に悪として生み出される存在だ。獣同士なら同化にも問題はないが、それでも今までの喰った獣の数や同化スピードに体が耐えきれなくなってるんだよ。」

実際今も魔力と神力で無理矢理体を動かしてるしな。俺が試しに腕を持ち上げ魔力と神力を消す。すると持ち上げた腕に無数の切り傷が出来た。

「!?!?・・・そうか。しかし、一体どれほど眠るんだ?」

「・・・さあな。とにかく獣共が体に馴染むまでだな。」

「彩と姉上はどうする。」

「説得するしかないだろ。爺は怒るだろうがな。」

「皆悲しむだろうな・・・。」

「何、今生の別れじゃないんだ。再び会えるだろう。」

俺達は無言でお茶を啜った。・・・うまい。

「っ・・・とりあえずこれで完成か。」

俺は自分自身に調整用及び封印用の術式を掛ける。あの後全員に説明したが大変だった。アマテラスは鬱になるし彩は泣いて罵倒するし爺は殴るし・・・。

「・・・一回外でも出るか。」

何時の間にやら外は暗くなり満月が出ていた。

「この光景も暫くは見れなくなるのか。」

俺は神社の上に座り一人月を見る。神社の下にはまだ村の松明の明かりが見える。

「・・・・・・・・。」

こうやって考えると今の生活も悪くないと感じてしまう。けれど・

・

「何時までも微温湯に浸ってるわけにもいかないんだよな。」

アイツだけは殺す。その気持ちが変わることもない。だが・・・

「待ってくれる奴らがいるんだ。相討ちになんてのは御免だな。」

そのまま暫く月を見る。

「ユー。」

後ろから声が聞こえる。俺が後ろを向くと彩が寝間着で立っていた。

「寒くないか？」

「ん、平気。」

彩はそう言って俺の隣に座る。俺達は会話のないまま無言で月を見上げる。

「ねえ。」

「ん？」

「ホントにそれしかないの？」

「ああ。これが一番安全で一番確実な方法だ。」

「……そう。」

それだけ言っていると彩は俺に寄り掛かる。

「ユー。」

「な」

俺が彩の方を見ようとすると……頬に何かが触れた。

「……早く戻って来てね。」

それだけ言っていると彩は神社の中へと戻っていった。

「……」

俺は頬に手をやり、溜息を吐く。……なんだかなあ。

「俺もまだまだ餓鬼何ですかね。」

まさかあれで動揺するとは……。どっちにしても

「もう、死ぬことなんて出来ないがな。」

俺は改めて決意し月を見上げる。

次に自分が目覚める時、世界がどうなっているのか密かにそう思いながら神様は最後の夜を過ごした。

### 三十六話 『殺神鬼』く封く（後書き）

だいたいこんな感じー。

今までの回での（作者が）分りづらと思った所などを少しずつ説明していききたいと思います。

・獣の能力について：ユーヘルトは喰った獣の能力を使用することは出来ます。ただあまり使わないのは自分の持っていた能力でないため慣れていないというのと獣はどれも能力が危険なので（例；兎の全てを狂わせる力など）制御に失敗した時の危険性を考えてです。

・アレイスター・クロウリ について：史実ではそこまで昔ではありませんがこれは創作（ここ重要）なのでクロウリ は大体1300年頃とさせていただきます。

・能力以外で使っている技について：これは自分の妖力や魔力、神力などを原料として自らが発動させる技に構成していくものです。能力より性能や威力は劣る者が多いですがその分応用がきいたりなことが多いです。

まあ、最初なので三つだけでも感想などがきて聞かれた場合はそれにも答えていこうと思います。では次の回で！！

### 三十七話 最凶（前書き）

祝！初週間ユニーク100未満脱出！！この調子でお気に入りも増えてくれるように面白いモノにして行きたいと思います。

しょうもないことかもしれないけど自分はこれを見てさらにやる気が漲って来ました！！



### 三十七話 最凶

「ここね。」

ユーヘルト達の住む神社、水面神社に金髪の一人の女性が立っていた。

「全然変わらない（・・・・・・・・）わね。」

女性は辺りを見回して一言そう言った。

「早く連れて帰らないと。・・・全く連絡も無しに行くんだから。」

女性は溜息を吐くと手を振り払い結界を破壊して神社へと入っていく。

「これはこれは、賽銭ですか？」

すると神社の中からユーヘルトの式が出て来る。表情は穏やかだが式とは思えない殺気を放っている。

「偽物に用はないわ。本物を出しなさい。」

「・・・一体何の事でございませう」言っただけだよ。本物を出しなさい。二度目はないわ。」・・・悪いがそれは出来ん。」

式神はそう言う構え先程とは比べ物にもならない殺気を放つ。

「そう。・・・忠告はしたわよ。」

しかし女性は余裕の表情を崩すことはなく平然とした表情どころか笑みを浮かべている。それだけでこの女性の力量が推し量れる。式神は自らの主人に連絡をすると女性へと駆ける。

「……全然遅いわ。」

瞬間、式神は女性に触れることも出来ずに消滅した。

「……まじかよ。」

俺は連絡を受けてから数秒で式神が消されたことに驚愕した。……俺より数段戦闘能力が劣ると言っても余程の奴が来ない限りは消されないんだが。

「くそっ！」

俺は二人に連絡だけ入れ懷から轉移符を取りだすと神社へと轉移をする。神社に帰った俺が見たものの結界の破壊された神社と破れた式の札だった。

「あら、ようやく来たの。あまり女性を待たせるものじゃ無いわよ。」



「なら後悔させてやるよ！」

「遊んであげるからいらっしやい。」

最初から全力で潰す！！俺は女性へと影を向かわせる。それを女性  
は避けずに手を横に振るうすると影は霧散していった。俺はそれ  
を見て僅かに驚くがその隙を逃しはしない！！

「第0拘束術式解放！！輪廻の蛇 完全起動！！！」

俺は無数の影と七匹の黒竜を放つ。

「くすつ。まだまだ甘いわね。」

女性はそれを最低限の動きで全て躲し、こちらに人差し指を向ける。

「がら空きよ。」

すると女性の人差し指からは紅いレーザーが放たれた。それは黒竜  
を放ちながら空きになっていた俺に全弾命中する。

「ぐっ！！！」

「どうしたの？動きが鈍いわよ。」

続けて放たれるレーザーを俺は急いで戻した黒竜で防ぐ。・・・  
くそつ、反則すぎるだろ。強すぎる。俺は先程の一撃で女性が自分  
よりも遥かに上にいることが分る。

「終わらなき罰！！！！」  
エンドレスパニッシュ

俺は無数のナイフと六本の杭をレーザーにぶつけその際に生じた隙を逃さずに女性との距離を詰める。俺は影から剣を取り出し全魔力を集中させる。

「我が勝利の為に（ワン・フォー・ワン）！！！」

俺は銀色に輝く剣を女性に向けて振るう。流石に躲ないと思ったのだろう。女性はその攻撃を何処からか剣を取り出し防御する。

「オオオオオオオオオオ！！！！！」

一撃、二撃、三撃！！俺は剣を上段に構えると女性へと振り下ろす。すると振り下ろした剣は銀色の光を放ち女性を飲みこんでいく。

「はあっ・・・はあっ・・・」

俺は全魔力を使った疲労によりその場に膝を着いた。俺は女性のいる場所を睨みつける。

「思ったよりはやるわ。けどまだまだね。」

煙が晴れると其処には無傷の女性が現れる。俺はそれを見て驚愕する。女性は俺に近づくとで人差し指を向け紅いレーザーを放つ。

「・・・く・・・そ、が。」

俺はその攻撃を受けても倒れずに何とか堪える。

「思ったよりも粘るのね・・・。」

女性是不敵に笑った。

「面白いものを見せてあげるわ。」

「Red Devil」

女性はその言うど背中に一対の紅い翼を出現させる。それを見た俺の頭に前回と同じ様に鋭い痛みとノイズがはしる。

・・・とにやるの？

ああ、・・・は絶対に・・・らなくちゃ・・・ないことだ。

・・・そう、なら・・・

・・・私の翼を貸してあげる。

「しばらく、眠っていなさい。」

女性はその言うど俺にその翼を振り下ろした。

「・・・・・・・・!!・・・・・・・・!!」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・!!」

「・・・・・・・・」

何だ声が聞こえる。俺はその声に起きると辺りを見る。ここは・・・

「俺の神社か・・・。」

なんかデジャブを感じる。俺は起き上がると居間へと向かう。居間へ向かっていく次第に声も良く聞こえるようになっていた。

「だから、だったらあんなことする必要はなかったでしょ!!」

「彼の本気を見る必要があったのよ。」

「何だよ!!」

「何でもよ。私にも事情と言うものがあるのよ。」

「でも少しやり過ぎだと思っようお姉ちゃん。」

「・・・・・・・・・・。そうね少しだけやり過ぎたわ。」

「何でフィーナにはそんなに甘いのよ!!」

「黙りなさい。」

・・・何か荒れてるなあ。ホントにデジャブを感じて来るぞ。

「貴方もいい加減入ってきたら。」

「・・・お前はエスパーか。」

俺は居間へと入っていく。居間に入ると二人とも心配していたのが俺の無事な姿を見て安堵している。・・・良い奴らだ。

「死んでたらこれからの生活が面倒臭くなってたわ。」

「ここ居心地いいもんね。」

前言撤回。悪魔だこいつら。俺は二人を半眼で睨みながら座布団に座る。するとフィーナが俺の目の前にいる女性を紹介する。

「えっと、この人はアリス・バレンシュタイン。私のお姉ちゃん。」

そう言うとフィーナの姉、アリスは俺に微笑んだ。

「改めて。初めまして、アリス・バレンシュタインよ。さっきは悪かったわね。」

俺はそれを見てアリスに疑問に思っていたことを尋ねる。

「なあ、何処かで会ったことあるか？」

俺がそう聞くと女性はしばし思い出す様な仕草をすると首を横に振



った。

「無いわね。」

「……そうか。」

「暫く泊るそうよ。」

彩はそう言って溜息を吐く。フィーナは姉に会えたと言つのと暫くいると言つことに喜んでいた。

……きなさい

今……は勝つんでしょ？

……リ……ン

「……っ」

俺は頭痛に頭を押さえる。……京都に行つてからやけに起きるようになったな。俺は頭痛が治まると一度部屋のタンスを開け一冊の小さなノートの様なものを見る。

「………食費平気かなあ。」

俺は通帳の残高を確認して一人ぼやいた。

### 三十七話 最凶（後書き）

誰かが言った。「厨二も走り続ければ本物へと変わる」と・・・  
だから何だと言われてもしようがないんですけど。というか自分で  
書いてる時に思ったことですしww

と言うわけで姉登場です。妹は強し姉も妹の可愛さには負ける。物  
語も加速していきます！！解説は次回でします！！

### 三十八話 神様と巫女と吸血鬼

「……まだ持つのか？」

俺はげんなりとした表情をして前を歩く女性陣に聞く。

「まだよ。」

「もうちょっと。」

「女の買い物に付き合えないなんて甲斐性のない男ね。」

えゝ……そこまで言われますか。俺は両手

に持った大量の買い物袋を見て溜息を吐く。女の買い物は疲れるとか聞いたがマジだな。三人は俺のそんな気持ちなどおかまいなしに商品を物色していく。

「……周りも鬱陶しい。」

他の男共の視線が三人に集中している。そしてその視線は一緒にいる俺にまで向けられる。こっち見んじゃねえよ鬱陶しいから。実際三人とも性格はともかく顔は良いからな。彩は髪は日本人とそのまま変わらないが二人に劣らず可愛いし、吸血鬼姉妹はまず髪と瞳で人目を引くし、フィーナは見た目も幼いから子供特有の可愛さがある。アリスは女性としては長身の部類に入るし二人と違い体つきも女性的な為可愛いと言うより美しいと言った方が正しいだろう。

「そりゃ人目も引くか。」

でもうざつたい。それに買い物は長い。畜生、せめて京都の奴らも呼べば退屈じゃなくなるんだが……。

「ユー！これも持ってー！！」

「……冗談だろ。」

フィーナ達が笑顔で持ってきたのは服が詰め込まれた買い物袋。……それも3つ。その量に思わず顔をひきつらせる。

「……シヤレにならねえ。」

誰でもいいから早くこの買い物終わらせてくれ。すると俺の願いが届いたのかアリスが満足したような表情をする。

「こんなものかしらね。必要なものも一通り揃えたし……。」

女神だ！今俺の前に女神がいる！！！！

「あとはユーを鍛えるぐらいかしら。」

「………What?」

「……今なんと？」

「だから鍛えてあげるのよ。」

アリスはそう言う俺にだけ聞こえるように囁く。

「夢現を倒したいんでしょ？」

「なっ!？」

その言葉に俺は目を見開く。・・・何でそのことを知っている。俺は思わずアリスを見る。アリスは俺のそんな様子を見てクスクスと笑う。

「安心なさい。勝てるまではいかなくてもある程度は戦えるようにしてあげる。奴は本当の化物ですもの。今の貴方じゃ足元にも及ばないわ。」

アリスはそう言うつと先を歩いていた二人の元へと向かう。

「足元にも及ばない、か・・・。」

分かってはいたが改めて言われると結構くるな・・・。

「鍛錬ね。」

ま、あいつを殺せるなら何だって利用してやるよ。

神社の境内そこには二人の2つの影があった。

「それじゃ掛かってきなさい。」

アリスはそう言うを目を瞑り自然体のまま立つ。嘗められていると思うが———というか実際嘗められているのだろう———あいつとの差はそれだけあるのだから俺が憤るのはおかしいだろう。

「第0拘束術式解放 輪廻の蛇 完全起動」

俺は輪廻の蛇を起動する。・・・まだだ、さらに先に、さらに未来さきに、既存の法則など棄ててしまえ。俺は中にいる獣達全ての力を集中させる。アリスはその様子を見て僅かに驚いた表情をする。

「いくぞ。」

俺はアリスへと駆けていった。

### 三十八話 神様と巫女と吸血鬼（後書き）

やっぱり携帯からやると変な感じがしますね。慣れないし、やりづらいいしで、では解説いきます。

・ユーヘルトの戦闘能力について：ユーヘルトの戦闘能力は最強クラスではあっても決して誰にでも勝てるわけではありません。表してみるとユーヘルトは最強クラスの中でも中間程度の実力です。アリスな上位程度、Eveは中間より少し上、夢現は・・・化物です。

・水面神社：ユーヘルトが住まう神社の名前です。きちんと意味もあります。

水面といのは夜月を映します。水面に見える月は本物ではなく偽物であって幻の月、つまり夢を表しています。このその月をどれほど美しいと思って触れることは出来ず、触れようと手を伸ばせばその者は水の中に落ち月は消えてしまう。

つまり要約すると夢を追いつめすぎてしまえばそこにあるのは現実だけであり、夢は消えてしまう。人の夢と書いて儚いと言うように決して叶わないからこそ夢なんだと言う考えよりつけました。

これはユーヘルトの心境でもあり彩とアマヅキを同一視しないためというのもあります。

今回はこんなものでなにげにこの設定は物語でも重要になってきます。

## 番外編 ある日の男ども？（前書き）

今週はテストがあるので番外編を投稿します。また金曜日の0時には投稿できると思います。前回を含め待っていた方はどうも済みませんでした。



## 番外編 ある日の男ども？

ある日の午後ユーヘルト達は京都の街を歩いていた。そうユーヘルト『達』だ・・・。

「何処か可愛い娘はいねえの？」

「竜玄、お前気楽過ぎるだろう。」

「いくら街の復興が済んだとはいえ少々軽薄すぎるな。」

「まったくです。もう少し落ち着きなさい。それといい歳した大人のする事ではありません。」

「そんなことより、酒はないのかのう。」

「にゃ〜。」

まあ、今の会話から大体は分るだろう。ちなみに上から竜玄、ユーヘルト、刀断、虎子、爆鎖、ミク「タマだにゃ〜。」だ。ちなみに全員服装は現代の物。爆鎖も擬人化し角や体格、肌色も人間に近くなっている。タマは擬人化は出来るらしいが、猫の方が楽で良いらしい。

「今から酒はなあ。」

「というか今から飲みに行ったら破産確定だな。」

ユーヘルト達は竜玄の言葉に頷く。

「しかし何処行くかねえ。」

「・・・・・・・・一つだけすげえ場所があるが。」

「凄い場所・・・・ですか？」

竜玄の言葉に虎子は首を傾げる。

「・・・・・・・・ああ。」

しかし、竜玄の顔色はあまり良くない。そのことに一同は首を傾げつつ後について行った。

ユーヘルト達は京都の暗い路地裏の近くにあった階段を下り  
全員が何故こんなものがあるのか不思議そうだったが  
い空間に出た。 広

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「な、すげえだろ？」

ユーヘルト達の目の前には妖怪と人間がいた。ただそこにあるのは

闘争ではなくお互いが笑いあっている平和な光景が。それを見て全員が固まる。

「いやあ、俺も最近知ったのよ。害もない奴らばっかだから問題ないと思つてよ。」

竜玄は笑いながら言う。

「しかしよくこれだけの人数がばれずに入れたもんじゃ。」

ばく鎖は感心したように言う。実際目の前の広大な空間には無数の屋台や灯籠それに大きな道がある。そこには数えきれないほどの妖怪と人間達。妖怪が幻想と思われるこの時代ではまず見られない光景だろう。

「まいったくだ。」

「ですげえのはここにあるんだよ。」

竜玄はそう言つて灯籠で照らされた道を歩いて行つた。

**番外編    ある日の男ども？（後書き）**

中途半端になってしまいましたがここで一度区切ります。続きは次回で。解説も今回は無しにさせていただきます。済みません。

番外編 ある日の男ども？（前書き）

テストが終わったぞー！！！！というわけで再び投稿始めます。

## 番外編 ある日の男ども？

「随分賑やかなんだな。」

ユーヘルトは通りに見える妖怪や人間達の顔を見て言う。妖怪も人間も皆楽しそうに笑っていた。

「ふむ。しかもこれは時代でも止まっているのか？」

「まあそんなところだ。」

「でも現代の奴らはどうやって来たんですか？」

先程から見かける人妖は全員江戸時代か明治時代の服装をしている。まるでそこから時が進まないかのように・・・。

「こいつらは色々だ。此処に迷い込んで来た奴もいれば此処しか来る場所の無かった奴もいる。ただそいつらは全員外ではもう生きてはいけないんだよ。」

竜玄はどこか悲しそうな表情をして言う。

「・・・そうか。」

「まあ、本人が楽しそうなんだから問題ないがな。・・・おっ着いた着いた。此処が目的の場所だ。」

竜玄がそう言って紹介した場所は小さな居酒屋だった。

「邪魔するぜー!!」

竜玄はそう言いながらガラガラと居酒屋の戸を開ける。

「おう!!何だ坊主か!」

ユーヘルト達が店に入ると店の中には狸の姿をした男(?)がいた。

「旦那!今日は知り合い連れて来たんだぜ!!」

竜玄はそういうと旦那と呼ばれた狸に笑顔で言う。旦那はニツと笑うと席に座るよう促した。全員が席に座ると旦那は注文を聞き酒と抓みをつくる。

「しかし、久しぶりだな。噂で聞いたぞ?何でも上でかい抗争があったとか何とか・・・。」

「ああ。おかげで傷だらけだ。」

「しかし、随分連れて来たな。鬼までいるじゃねえか。」

「全員相当な強さだぜ。」

竜玄は誇らしげに言う。

「狸のおっさんは何でこいつと知り合ったんだ?」

「それは僕も気になったのう。こんな良い酒を出せる店があるなら何故教えてくれんのじゃ。」

「確かに・・・お酒はともかく何で知り合ったのかには気になりますね。」

「虎子は酒がのめんからな。」

「なっ！わ、私はまだ子どもなんですから仕方ないでしょう！？」

「おっさんの酒が飲めないとかねえわ。」

「なんなんですか！私は悪くないでしょう！？」

「何だ俺の酒が飲めえのか！！？」

「旦那さんまでですか！！？」

酒を飲んでいくうちにユーヘルト達は酔っていき次第に虎子をいじり始める。

「ほれ、飲め飲め。」

「止めなさい竜玄！」

「嫌われてんなおい。虎子・・・とりあえず飲め。」

「あなたも同じでしょう！！！」

「樽ごとがいいんかのう。」

「爆鎖！！貴方は私を殺す気ですか！！？」



「樽一本では足りないそうだぞ。」

「悪化させるんじゃないありません!!!」

「なるほど」

「ちよ、止めなさい。こら刀断放しなさい！！近寄るんじゃありません！！旦那さんまで！！？」

じりじりと虎子へと近づく四人。その手には酒樽を持っていた。それを見た虎子は次第に顔を青ざめる。

「ひっ、うわあああああああああああああ……！！！！！！！！」

その日地下にあるとある一軒の居酒屋からは一日中大人の笑い声と悲鳴だけが聞こえたそうだ。

番外編 ある日の男ども？（後書き）

凄く短いかもしれないけど許して下さい。後、今度試しに短編で小説の予告（？）、ダイジェスト（？）・・・の様なものをしようかとも考えていますがやるかどうかは分かりません。やる場合はとりあえず後書きで報告しときたいと思います。

### 三十九話 力の片鱗（前書き）

体調を崩してしまい更新が遅れてしまいました。すみませんでした。皆さんも風邪を引かないよう気を付けてください。

## 三十九話 力の片鱗

side アリス

「輪廻の蛇 完全起動!!」

彼の力を見た時私は目を見開いてしまった。しかし仕方のないことだろう。なぜなら、それは今までの起動時に感じる力とは全く違う力を感じたのだから。・・・これは

「・・・今までとは全く違う。」

なにせよ今回は随分楽しめそうね。

side out

side 三人称

ユーヘルトは自らが起こした現象に困惑していた。本来出て来るべき黒竜たちは出現せずいくら体の中に意識を集中させても獣たちの咆哮は聞こえてこない。しかし溢れ出る力は本来の起動時よりも遙かに上回っている。

「・・・・・・・・」

ユーヘルトは自らの力を確認するかのように拳を握る。やがてその視線は目の前にいるアリスへと向けられた。ユーヘルトが不敵に笑うとアリスもまた不敵に笑う。互いに言葉は不要、ただ目の前にいる強者を打ち倒すのみ。

「はあっ！」

先に動いたのはユーヘルトだった。自身の体を魔力によって強化しアリスへと駆ける。アリスは何処からともなく小剣を取り出す。ユーヘルトの繰り出す拳をアリスは小剣を巧みに使い受け流していく。

「喰らい尽くせ!!」

ユーヘルトはアリスの死角から影を飛ばす。しかしアリスはその影をまるで見えているかの様に避ける。するとユーヘルトはアリスが避けるタイミングが分っていたかの様にアリスに向け蹴りを放つ。

「っ!？」

その行動にアリスの表情から先程までの余裕が消える。

「(・・・おかしい)」

アリスはそう考えた。

「(さっきの攻撃はまるで此方のする行動が分っていたかのようなだった・・・)」

強者同士での戦闘で相手の一歩先の行動を予測して戦うことはあるけれどそれはあくまで予測であって当然敵がその通りの行動をするとは限らない。けれど今の攻撃はまるでその予測通りに動くと確信していたかのような一撃だった。

「掠めただけか。」

ユーヘルトは確認するかのように言う。異常、それがアリスの今のユーヘルトへ抱いた思いだった。

「喰らい尽くしてやるよ吸血鬼。」

ユーヘルトは再び不敵に笑った。・・・どこかに慢心があったのかもしれない。アリスはそう思い一切の容赦を捨てた。そしてアリスは一言、自らの最強の翼の名を口にする。目の前の男を全力で打ち倒す為に・・・

「Red Devil」

するとアリスの背中に左右一对の紅い翼が現れる。

「いいわ。本気でやってあげる。・・・死んでも知らないわよ。」

アリスがそう言うつと翼はまるで意思を持っているかのようにユーヘルトへと向かう。

「はっ！なめんじゃねえ！！」

ユーヘルトは自らの手に影を纏わせ翼を受け止めた。互いに一步も引かず両者の力は拮抗しているかのように思われた。しかし・・・

「っ・・・おお。」

やはり自力では吸血鬼であるアリスに分があるのかユーヘルトは徐々に押されていく・・・

「（まだだ。限界なんて破壊しろ！！現実を超えていけ！！）」

「…………おおっ！」

するとそれに応えるかのようにユーヘルトから溢れ出る力は増していき一歩ずつユーヘルトは翼を押し返していく。

「おおおおおおおおおおお！！！！！！」

「……………」

ユーヘルトは翼を弾いた。しかしその瞬間左からもう一つの翼がユーヘルトを襲う。

「！？」

先程の攻撃に集中していたユーヘルトはその攻撃に驚愕する。翼がユーヘルトを殺さんと迫るなかユーヘルトの思考は冷静だった。

「（これ、は？）」

ユーヘルトの脳裏に一瞬鋭痛みと共に自分がその攻撃を避けている映像が映る。ユーヘルトはそれへと手を伸ばし…………掴んだ。

ドガアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！

そして翼は轟音を響かせユーヘルトを叩き潰した。

side out

side アリス

やり過ぎたかしら。私はそう思いながら翼を振り落とした場所を見る。そこは未だ土煙に覆われていてどうなっているのかは分らない。

「中々だったわよ。」

これは本音だ。実際今の彼に翼が弾かれるとは思ってもいなかったましてや私に掠り傷とはいえ攻撃を当てたのだ。……このまま行けばきつと、

「あの頃の貴方を超えるかもしれないわね。」

私はそう言つて神社へと戻ろうとした。その声を聞かなければ……

「まだ終わつてねえぞ。」

瞬間私は今度こそ驚愕を露わにし声の下方向を見る。

「なっ!?!」

そこには無傷とはいかないものの確かに両足を地に着け立っている彼がいた。

「今のは本気で死ぬかと思つたぜ。」

彼は荒い息を吐いて私を見る。今のを避け切れるとはとても思わない。



「・・・どうやって避けたのかしら？」

私は彼に問いかける。

「僅かな隙間を影を纏わせて強行突破だよ。御蔭で全身が痛くてたまったもんじゃねえ。」

「・・・今日の修行はこれで終了よ。」

それを聞いた私はそれだけ言つと早足で神社へと帰った。・・・ありえない。ありえるはずがない。

「こんなにも変わつてきてるなんて。」

私の呟きは誰に聞こえることもなく風の音に掻き消された。

side out

side ユーヘルト

「・・・？」

俺は早足で帰つていったアリスに首を傾げながら・・・もまあいいかと思ひそれ以上考えることを止めた。

「本当のことを言う必要はないよな。」

あの翼が当たる瞬間、どうやったのかは俺自身よく覚えていない。ただあの映像を掴んだ瞬間変な感覚がしが付いたら翼を避けていた。黒竜のことと言ひ溢れ出ていた力と言ひ、加えてあの映像・・・

「一体何が起きてやがる。」

こうして一抹の不安を残し今日の修行は終わった。

### 三十九話 力の片鱗（後書き）

はい。主人公が着々とチート化して来ています。正直これを出すことは決めていましたが自分自身反則じゃね？とも思って来ています。どんなものなのかはまだ秘密と言ってことで・・・

## 四十話 神様の異変と暗黒物質

アリスとのあの修行の日から三日が経った。あの日からアリスとの修行は今までより減った。本人に聞いてみても

「良いのよ。まだこれ以上の修行をするべきじゃないわ。」

とのこと。どういふことかはよく分からないが俺よりも何か知っていそうなので素直に言うことを聞いておく。あの時から聞こえる獣たちの声にも波が出て来た。黒竜達はどうか現界出来るようだがあの時から俺の中で他の獣たちと一種のブーストの様な感じで力の底上げをしているようだ。・・・最も協力しているのは狂兎だけだが。こいつだけ随分俺に懐いてるな。

「御飯よ。」

俺が座禅をしていると彩の声が聞こえる。時計を見るともう時間は七時を回っていた。俺は座禅を止めると彩達のいる居間へと向かった。・・・座禅をしていた理由？そんなもの気分だ。正直、俺自身座禅をする気分がどういふものか分からないが気分と言ったら気分だ。

「・・・・・・・・。」

今俺達は居間にいる。しかし誰一人としてその口を開こうとはしない。

「・・・・・・・・ちなみにこれ何？」

「シ、シチューよ。ね？フィーナ。」

「う、うん。シチューだよ。」

俺は目の前にある何かを見る。・・・・・・・・こ、これをシチューと申すか。目の前にあるのは毒々しい色をし何やらシューシューと不気味な音をたてているものだ。決してシチューと言える代物ではない。兵器の類と言われても納得するだろう。

「さあ食べなさい。」

そう言つて目の前にある毒物を笑顔で差し出すのは目の前にいるアリスだ。何でも今日はアリスが作つてみたらしいが・・・・・・・・お前シチューに一体何を入れた？見れば二人も思わず顔を引き攣らせている。

「・・・・・・・・。」

俺は手渡された食器の中のシチューを見る。・・・・・・・・無理無理無理無理無理！！これはきついだろ！！？思わず二人を見ると二人は俺に敬礼をしていた。死ねと！？おれに死ねと申すか！！

「・・・・・・・・。」

相変わらず笑っているアリスを一瞥し俺はしばらくその毒物を見て、やがて覚悟を決める。俺が食器に口を付けようとすると二人が息を呑むのが分る。だが男にはやらねばならぬことがある！！そして俺はシチューを一口飲み・・・そこで俺は意識を失った。

「・・・・・・・・はっ！」

俺は目覚めるとともに布団を撥ね退け起き上がる。周りを見渡すと居間だという事が分る。テーブルを見ると食器は全て片され綺麗になっっていた。

「・・・・・・・・。」

一体誰がああ兵器を食ったんだ？俺はそう考えると寒気がしてきたのでそれ以上考えるのを止めた。

「あら、目覚めたのね。」

俺がその声がした方向を見るとアリスが立っていた。俺が起きたのを確認したアリスはテーブルに着くと俺を見た。

「今から軽く質問するからそれに答えて頂戴。」

その言葉を聞いて俺もアリスの向かい側に座る。何か分るかもしれないしな。

「貴方は今まで喰ってきた獣を制御できずに体を調整するために眠った。合ってるかしら。」

「ああ。」

「それじゃ次ね。貴方は何体の獣を喰ったかしら？」

「五体だ。」

「今の貴方に協力的な獣は？」

「・・・狂兎だけだ。」

「そう。それじゃあ・・・」

その後もいくつか質問をしていったが俺にはそれが何を調べるのに役立つのかよく分らなかった。最後の質問を聞くまでは・・・

「貴方、最近幻覚が見えたり、頭に鋭い痛みと共に幻聴が聞こえたりしないかしら？」

「なっ!!」

何でそのことを！俺は思わず立ちそうになるがアリスが俺を睨むと俺はその場に座った。

「それで？」

「・・・ああ聞こえる。聞いたことのある様な声が。」

「・・・そう。質問はこれで終了よ。」

「お、おい！」

そう言って立ち上がるアリスに俺は今の質問について尋ねる。

「何なんだ今の質問は。」

「・・・これだけ言っておくわ。」

問い詰める俺にアリスは人差し指を向ける。

「心を強く持っておくことね。」

それだけ言っつとアリスは居間を出ていった。

「・・・・・・・・。」

アリスの言葉に俺の不安は大きくなっていった。



四十話 神様の異変と暗黒物質（後書き）

今日の夜も投稿できるようにしたいと思います。

## 四十一話 神様と老人

side ユーヘルト

ある日の御前、俺とフィーナが境内の中にある木の上に登り周りの山を見ていると一人の老人が入ってきた。老人は此方に気付いていないのかそのまま寶銭箱に近づき寶銭をする。……

「「寶銭!?!」」

その光景に思わず俺達は木から落ちそうになってしまった。幸い老人は此方に気付かなかったようで寶銭をし二拍一礼をすると帰って行った。

「……まさか寶銭をしてくれる人がいるとは。」

俺はその事実には驚愕しながらも階段を降りていく老人を見送った。

「ああ、ガンドールさんね。」

「知ってるのか?」

あの後、彩に聞いてみた所どうやら知っている人物らしい。

「ええ、あの人はアンタが眠った後に来た人なんだけど。アンタが眠ってから今日まで毎日参拝し参拝しに来てたのよ？」

「あの人聖人なんじゃねえの？」

毎日とか凄過ぎるだろう。こんな近隣住民しか知らない様な所に来るってのは大変だろうに。

「確かあの人・・・不老だったかしら。」

「ぶっ！」

俺は思わず飲んでいたお茶を吹き出す。

「汚いじゃない。」

「いや、ふ、不老って・・・。」

実際凄い人だったらしい。

「ちなみに何歳ぐらい？」

「えーと・・・500歳ぐらいはいつて言ってたかしら。」

500歳・・・相当歳くってんだな。そんな爺さんが何しに神社に来てんだか・・・。

あの老人は翌日も来た。彩の言った通り毎日来ているのだろうか？  
老人は此方に気付いているのか分らないがまた寶錢をすると二拍一  
礼をして帰ろうとする。

「少し待つてくれないかい？」

俺は帰ろうとする老人に声を掛ける。老人はゆっくりと此方を向く。

「どうもこんにちは。長命なご老人。」

俺はそう言って一礼する。すると老人は優しくそくに微笑み挨拶をする。

「おお、これはこれは。私、ガンドール・D・アルシエドと申します。獣の神よ。」

老人は相変わらず微笑んだ表情をしている。

「ユーヘルト・ヴァーミリオンだ。よろしく。」

俺も老人に名乗る。

「さてアンタを引きとめた理由だが・・・」

「500年も生きてきた貴殿程の方が何故このような神社に参拝しに来るのかな？」

俺は老人に問う。下手な小細工など必要ない直球勝負だ。

「・・・・・・・・・・。」

老人は頭に被っているシルクハットを深く被り直すと沈黙する。

「・・・・・・・・一つ昔話をよろしいですか？」

やがて老人は口を開くとそう言った。俺の無言を肯定と受け取ったのか老人は話し出す。

「昔、ある一人の男がいました。男はある一つの場所を求めていました。老人は友であるその男に協力し男の願いを叶える為にあらゆる秘術を教えました。」

俺は老人の言葉を聞いていく。

「そして男と老人はその場所へ行くためのある一つの術を創りあげました。」

どうしてだろうか。ただ老人の話を聞いているだけなのに・・・。

「しかし男はそれによって世界から忌み嫌われ世の理を外れ、やがて・・・・・・・・。」

どうしてこんなにも心が揺れるのだろうか・・・。

「人ではなくなった。それでも支えてくれていた一人の女性によつて心は人でいられた。けれど・・・」

「世界は男の愛した者を奪い、男は愛した者を奪われた世界を憎み、そして男は永劫繰り返される運命に囚われた。」

男はそこで一度空を見上げる。

「今でも思つのですよ。老人がそんなものを教えなければ男はそんな結末を迎えずに済んだのではないかと・・・。」

「・・・。」

俺はその言葉に俯く。・・・確かに始まりは老人と男の願いなのかもしれない。だが・・・

「その男はきつと老人のことを恨んでなんてねえよ。」

「・・・。」

「だってよ。老人が手伝ってくれなかったら男はその女性と会うことなんて無かったかもしれないんだ。感謝こそすれ恨むことなんてねえよ。」

「・・・ふふ。」

俺がそう言つと老人は笑う。

「貴方の巫女も同じようなことを言いましたよ。」

男は再び帽子を深く被る。

「そうなんでしょうかね。正直私には未だ分りませんよ。」

「こんなつまらない老人の話に付き合つて下さつて済みません。ではこれで……。」

老人はそう言つて一礼をすると歸つて行つた。

「……………」

俺はその老人の後ろ姿を見送る。気のせいか老人の足取りが軽く見えた。だが……

「どうして懐かしいと思うんだろうな。」

俺は誰に聞かれることもなくそう呟くと神社の中へと戻つていった。

side 三人称

「……………変わっていないようで何よりです。」

老人はそう言いながらゆつくりと階段を降りる。

「久しぶりね。ガンドール。」

その言葉と共に目の前にアリスが現れる。

「お久しぶりですね。吸血鬼の御令嬢。」

老人は一礼する。

「どう？彼は……。」

「相変わらずでしたよ。元気そうで何よりです。」

「……そうでしょう？昔を思い出したわ。」

「『相棒』殿は忘れられたことがそんなにもショックでしたか？」

「もう慣れてしまったわ。」

お互いそう言って笑い合う。

「……今度は力になりましたよ。」

老人はその年を感じさせないほどの気迫を持って言う。

「……心強いわ。」

その気迫に若干の驚きを含んだ声でアリスはそう言った。



「では今宵はこれにて。」

「ええ。さようなら。」

そう言って二人は別れる。ただその顔には微笑みを浮かべて・・・

## 四十一話 神様と老人（後書き）

ここで新キャラ登場。果たしてこのご老人はどう関係していくのか・  
・。

## 四十二話 神様達の尾行

ども、ユーヘルトだ。最近布団から出るのが辛くなっております。

・・・とまあこんな事は置いて今俺は彩やフィーナと一緒に電柱の後ろに隠れている。・・・あ、嬢ちゃんこつちを指差さないで。お母さんもそんな不審者を見る様な眼でこつちを見ないで。まあ事の経緯は今から30分程前へ遡る。

「ハア？尾行？」

「そう尾行よ。」

俺の目の前で彩が力強く言う。

「でも何でまた。というか誰を？」

尾行する様な事が必要な奴なんていたか？

「アリスよ。」

「そんなことで布団から出たくねえ。」

今の俺の眠気に勝てる奴などいやしない。俺はその場で横になる。

「……実は今日買い物頼「さあて、着替えて早く行くか。」・  
・・フィーナと私はもう準備出来てるわ。」

どうやら俺の眠気もアリスの料理の前じゃ紙に等しかったらしい。

「じゃあ行くか。」

これ以上あんなことを起こしてはいけないからな。

尾行なう。……一回言ってみたかっただけだ。

「なあフィーナ。アリスって普段料理なんてしないのか？」

普段からしててあれだったら救いようがないぞ。

「ううん。私がいた時は見た事無いよ。」

なら初めて料理をしたからなのか？初めてだとしてもあれはないと思うが……。

「曲がつたわね。」

「このまま進むとスーパーかな？」

アリスが曲がると俺達も他の障害物に隠れながら尾行していく。

「……今のところ怪しいことなんてないな。」

「むしろ行く途中で何かあったほうが怖いわよ。」

「そうだね。」

苦笑する二人。俺達がしばらくそうして話しているとアリスはスーパーへと入って行った。

「……………」

俺たちはアリスが買い物をしているのを遠くから見る。

「…………あれ何？」

「……納豆？」

「あれは？」

「……タコだな。」

「言っとくけどにあんな物は頼んでないわよ。」

「……………」

アリスは次々に買物がこの中に食材を入れていく。・・・。

「さ、さあ帰ろうか。」

「そ、そうだね。」

「大丈夫・・・よね。」

俺達は何も見なかった。決して黒いタコのようなものなど見ていない。誰が何と言おうとも見ていない。その後家に帰った俺達は布団の中で震えていた。・・・理由？そんなもの語る必要なんてないだろう？

## 四十二話 神様達の尾行（後書き）

今回結構短かったな。・・・まあ、どんまい。

短編載せました。何か表示が変ですがちゃんと載せてある・・・はず？

## 四十三話 始動

side 三人称

「・・・・・・・・・・。」

暗い一室の部屋そこに夢現はいた。その目は帽子によって隠れ何を考えているのか分からなかった。やがて男は何が面白いのかその口を弧を描くようにして笑った。

「Eve。来なさい。」

「・・・・・・・・・・。」

夢現がそう言うのと魔法陣の出現と共にEveはその姿を現す。

「調子はどうですか？」

「・・・・システム異常なし。・・・・戦闘可能・・・・全回路正常起動。」

Eveは感情のない無機質な声で答える。

「・・・・そうですか。そろそろ我々も表舞台に立ちます。何時でも出れるようにしておきなさい。」

「了解。」

それだけ言うとEveはその場から転移する。夢現はそれを確認するとソファから立ち上がった。



「さて、行きますよ。マリア。」

「はい。我が神よ。」

夢現の声に何時の間にいたのか修道服を着たシスターが答える。マリアと呼ばれた女性はその長い銀髪を揺らし夢現の後に従って行く。

「さあ、楽しいゲームの幕開けだ!!」

夢現は愉快そうに笑い歩いていった。これから始まる舞台の幕を開ける為に。

side out

side ユーヘルト

「・・・・・・・・。」

突如誰が発したのか強力な力を市街地から感じ取った俺は神社の鳥居の上から街を見ていた。

「ユーー!!」

彩が息を切らしながら走ってくる。まあ要件は大体見当がつくが・・。

「今の!？」

「彩、今から準備して直ぐにアマテラスかスサノヲを呼んで来い。」

「でも!」

「いいから早くするんだ。俺もそこまで時間は稼げない。」

今の反応からすると二人。しかも俺より遙か格上。俺は彩が二人のもとへ行くのを見届ける。

「やれるだけやってみるか。」

俺は反応のした場所へと向かう。空はまるでこれから起こることを予期しているかのようにどんよりと曇っていた。

s i d e o u t

私は一刻も早くアマテラス様達のもとへ向かう為に最高速で飛んでいた。

「速く・・・もつと速く・・・っ。」

私が飛んでいるとき空から無数の十字剣が飛んできた。

「なっ!?!」

私はそれを掠りながらも何とか躲す。私は止まって上を見ると修道服を着た一人の女性が空にいた。

「・・・その能力。間違いありませんね。」

それだけ言うと修道女は突如手に十字剣を出現させ飛ばしてくる。

「くっ!?!こんな時に!!」

私は手に盾を出現させ飛んでくる十字剣を防ぐ。すると修道女は先程とは比べ物にならないほどの十字剣を出現させ視認できない速度で飛ばしてくる。剣の嵐の中私は盾を更に出現させ身を守る。しかし盾はその攻撃に耐えきれなかったのか徐々に輝が入り次々に壊れていく。

「く・・・っ・・・。」

やがて最後の盾も破壊され私は剣の嵐に呑み込まれる。

「キヤアアアアアア！！！」

やがて剣の嵐が止んだとき既に私の意識は朦朧としていた。

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・これで目的は達成ですね。」

朦朧とする意識の中修道女が何か言っていた気がしたがそれを聞き取れずに私は意識を失った。

side ユーヘルト

「ここか。」

俺は反応のした場所についた。そこは港にある廃倉庫の一角だった。辺りを見てもやはり人影は見つからない。

「・・・・・・・・・・。」

俺は注意深く当たりを見回す。すると通路の奥から拍手をする音が聞こえる。

「いやあ、ありがとうございます。やはりあなた一人で来てくれた。」

「！？夢現！！！」

俺は奥から現れた人物を見て叫ぶ。

「ええ、私ですよ。お久しぶりですね……と言ってもこの前会いました。」

夢現は変わらずその口は弧を描いている。

「第0拘束術式開放！  
ウロボロス 輪廻の蛇 完全起動！！！」

俺は剣を出現させ夢現へと駆ける。夢現はそんな俺の様子を見て呆れたように溜息を吐く。

「まったく出会って直ぐに攻撃ですか……。人の話は最後まで聞けって教えてもらいませんでしたか？」

夢現はそう言っただけの俺の攻撃を平然とした様子で躲す。

「終わりになき罰！  
エンドレスパニッシュ！」

俺は無数のナイフと六本の杭を出現させ飛ばしていく。

「まだまだあ……！」

俺は追撃するように影を全て無限へと向かわせる。

「夜空照らし光の刃！！！！」  
グランシャリオン

俺は剣に魔力を集中させ、白い焰を纏わせた巨大な剣を創り夢現へと放つ。

「オオオオオオオオオ！！！！！！」

妙なことはさせない！！全力でコイツを殺す！！！！  
俺はそのまま夢現へと近づき剣を振り上げる。

「我が勝利の為に！！！！」  
ワン・フォー・ワン

俺は全魔力を込めた一撃を振るう。その刃は確実に夢現へと振りおろされ両断した。・・・・・・かのように思えた。

「・・・・・・全く服が汚れてしまったじゃないですか。」

しかし夢現はその一撃をもっともせずその剣を片手で受け止めていた。

「なっ！！！！？」

それを見て俺は驚愕をあらわにする。

「ハア・・・まだこんなものでしたか。話になりませんね。」

夢現は受け止めていた剣を弾き飛ばす。

「まあ今回は取り敢えず目的のモノは手に入れました・・・お前はもう用済みだ。」

夢現は俺に手を向ける。すると背後から土槍が俺に突き刺さる。

「がつ!!?」

「ほら次だ。」

そう言っていると突然空から光が放たれる。

「がつ・・・ああああああああ!!!!」

俺はその光に呑み込まれる。

「ぐ・・・がつ・・・」

俺はその場に倒れ動くことができなかった。

「そんじゃ、終わりにするか。」

夢現はそう言って俺に近づいてきた。

s i d e   o u t

side 三人称

「終わりにするか。」

夢現がそう言つてユーヘルトに近付こうとしたその時

「Red Devil!!」

紅い翼が二人の間に振り落とされた。

「つち。」

夢現は下がるとその主を睨む。

「このクソ吸血鬼が!!」

「悪いけど彼を殺させはしないわ。」

紅い翼の主、アリスは夢現を睨みながらユーヘルトの傍へ降り立つ。

「たかがデメエー人が来てなんになるってんだ、ああ?」

「あ・・リス・・。」

「喋らないで。ガンドル!!」

「ええ。」

アリスの呼ぶ声と共に老人、ガンドルが現れる。



「・・・任せたわよ。」

「承りました。」

「ま・・・って、おい・・・爺さ」

それだけ言うとアリスはユーヘルトを連れて転移する。

「・・・・・・・・・・。」

「おいおい、何だよ爺！今まで散々あのガキ見殺しにしてきて今更何の用だ！？」

「・・・・・・・・たしかに。」

「あ？」

「確かに、私は今まで彼が殺されるのを黙って見てきました。ですが・・・・・・・・」

「だからこそ！私はもう逃げない！彼を、自らの友を殺してまで得た生命など何の価値も持たない！！」

「で？それで俺を殺すって！？ヒヤッフハッフハッフハッフハ！爺さんあんたやつぱ年だわ！テメエみてえな老耄が俺を殺せると思ってたんのかよ！！？」

「ええ、私では貴方を殺すことなど出来ないでしょう。・・・ですが、」

「彼らの逃げるための時間を稼ぐくらいことは出来る!!」

老人はそう言うのと自らの全魔力を集中させる。

「私の最後の技です。・・・自らの命を代償にする!!」

「・・・テメエ、自爆する気か!!?」

「幾ら貴方といえどこれを食らったら暫くは行動することができないでしょう。」

「待ちやがれ!!!!」

「終わりです!!」

そう言うってガンドルは全魔力を放出する。その瞬間倉庫街は光に包まれ続いて爆音が生じた。

ドガアアアアアアアア!!!!

その爆発は辺り一帯を破壊し倉庫街を消失させた。煙の立ち込める中そこには確かに動く人影があつた。

「クソツたれが!!」

夢現はそう言うって瓦礫を蹴飛ばす。

「畜生!余計なことしやがって老耄!!!!」

夢現はボロボロになつた服を気にもせず忌々しそくに顔を歪める。

「夢現様。」

その言葉と共に修道女、マリアが現れる。

「ああ！？何だクソが！！殺すぞ！！？」

「・・・連れてまいりました。」

夢現の言葉を気に求めずマリアは脇に抱えた彩を見せる。それを見た夢現は先程までの表情を消し再び目を細めその口元を弧にする。

「おやおや、有難うございます。で、神社は？」

「はい。跡形もなく消しておきました。ただ吸血鬼姉妹の気配は感じられませんでした。」

「・・・そうですか。お疲れ様です。」

そう言いながら夢現は服装を整える。

「さて、欲しいものは手に入りましたし。今回はこんなものでいいでしょう。」

夢現はその目を僅かに開き呟いた。

「・・・もうすぐで全てが終わる。」

その呟きは港の風の音によって誰に聞こえることもなくかき消された。

#### 四十三話 始動（後書き）

はい！急展開です。そして今までで一番長くないですかね？正直書くのにすごい時間かかりました。

ガンドルさん有難うございました！！そしてすみません。私の文才では貴方を上手く表現することが出来なかった。ここは少しずつ書き直していきたいと思います。番外編でも彼は出そうかと思います！！

## 四十四話 全ての始まり

side 三人称

荒れ果て周囲は数え切れないほどの死体とそこから流れ出る血によって赤く染まっていた。荒野の中一人の男が立っていた。年は40に差し掛かるだろうか、男は長髪に髭を生やし、甲冑を着たその姿は一国の王であるかの様に堂々としたものだ。しかし男はここが酷く疲れた様な顔をしていた。

「オオオオオオオオ!!!」

死体の中に隠れていたのか一人の兵士が男へと飛びかかる。男は向かってくる兵士を右手に持つフランベルジェによって振り下ろされる剣もろとも串刺しにする。

「がつ・あつ・あゝあゝあゝ !!!」

フランベルジェによって串刺しにされた兵士は楽に死ぬこともできず苦しそうに呻く。男はそれを見て右手に持っていたフランベルジェを捨て腰に下げたあるクレイモアを抜く。そして呻いている兵士に近づきクレイモアを振り下ろした。兵士は一度小さく悲鳴を上げるとやがて動かなくなった。それを確認すると男は再び周囲を見渡す。

「・・・・・・・・・・。」

誰も生きていないことを確認すると男は剣を納める。

「伯爵。」

男が立ち去ろうとすると不意に背後から一人の老人の声がした。

「ガンドールか。」

「ええ。」

男はその声の主を見て微笑した。老人もまた伯爵と呼んだ男を見て微笑む。

「相変わらず変わっておりませんね。」

「そう言う貴公も変わらないな。」

男たちは笑う。それはこの死体の中では異常とも取れるものだった。二人の笑みは周囲にある死体がないかのように自然だった。

「とうとうなつてしまいましたか……。」

ガンドールは悲しそうな表情をする。

「ああ。我はもう人間ではなくなつてきておる。」

男はそう言って自らの腕を剣で切り落とす。しかし切り落としたはずの腕からは血が一滴も出ず。影が男の腕を覆うと腕は元通りになっていた。

「……『獣』ですか。」

「ああ。これは副産物のようなものだがな。事実これを使えば喰らったものは自らの僕にできる。」

「ですがそれは……。」

「いずれは全てを喰らうだろう。そうなる前に『境界』へ向かう。」

「その肉体では耐え切れないはずですが。」

「なに、そのための魔術であろう。」

伯爵がそう言うとき、ガンドールは溜息を吐いた。

「まったく人使いの荒い人ですね。」

「貴公も人のことは言えないであろう。」

「ハア……。承りました。ではこれで。」

「ああ、良い知らせを期待するぞ。」

伯爵はそう言ってガンドールを見送った。ガンドールが転移するのを見送ると伯爵は周囲にある死体を見る。

「？  
？」

伯爵がそう言うとき周囲にあった死体は全て影の中へと沈んでいく。

「……これほどの数を喰らえば満足であろう。」

やがてあれほどあつた死体と血は全て消えそこにあるのはただの荒れ果てた大地だけだつた。伯爵はその大地の中を進んでいくやがて届くだろう知らせを楽しみにしながら。



#### 四十四話 全ての始まり（後書き）

今回は分かりづらい回かもしれませんが。まあ少しずつ分かっているようにするのでこんな感じで終わりにさせていただきます。

#### 四十五話 『獣』の名の意味（前書き）

はい二日ほど開けてしまいました。いやあ、まさかのテストですよ。そして来週もテスト、そして帰りに見かけるカップルの多いこと多いこと……。爆ぜろ。

## 四十五話 『獣』の名の意味

side 三人称

暗転、伯爵は森の中で膝をついていた。伯爵の息は荒く苦しんでいるのが一目で分かる。

「・・・・・・・・っ・・・・・・・・」

やがて治まったのか伯爵は大きく息を吸うと立ち上がる。しかしその姿は以前の伯爵の姿ではなくなっていた。

「・・・・・・・・む？」

自分の手を見てその以上に気づいた伯爵は何か鏡の様な物がないかを探し歩く。その間も伯爵は辺りを見回していた。

「ここが境界・・・・・・・・あちらとそこまで変わらないな。」

辺りを見ても木が生え、空があり生き物 既存の生命体ではないが がいる。やがて伯爵は大きな湖の前に出た。伯爵は水面に映る自分の姿を見て怪訝そうな顔をする。

「何故若返っている？」

そこに映っていたのは以前の伯爵ではなく肩ほどの長さの黒髪をした青年の姿だった。顔は整っているが成人サイズの甲冑を着ているせいでその姿は酷く不格好だった。

「……境界の影響なのか？それとも獣が何かしたか？」

伯爵はそう考えると自らの能力を発動する。

「？」

「？」

「」

すると今まではハッキリとした姿を持っていなかった影が七匹の黒竜の姿を持って出現した。

「…………それが俺の姿か。」

伯爵はそう言つて黒竜たちを撫でる。

「……………輪廻の蛇。」  
ウロウオロス

「御前は『永』と『継』の名を持つ獣だ。」

まるで我が子を見るかのように。

「狂兎 絶狼 闇猫 暴蝶 未猿 死鴉 視蟲」  
くると ぜつろう やみねこ ぼつちよう みえん しからす しちゅう

「人は狂うことを恐 人は絶望することを恐 人は闇に飲まれるを恐 人は暴力振るわれるを恐 人は未知があることを恐 人は死ぬことを恐れ 人は視られることを恐れた。」

「御前は七疋の獣を繋ぐ存在だ。全ての獣を束ね、全てを継ぐ八疋目の獣。」

「それが御前（俺）だ。」

男はそういつと一度空を見上げる。

「……伯爵はもう死んだ。ここにいるのは一匹の獣だ。」

男はそう言つと歩き出す。

「……新しい名を考えなくては。」

名を捨てた男は歩きだした。自らの運命を知らずに……。

## 四十五話 『獣』の名の意味（後書き）

今回は短くしました。もう一つ小説をやるかやらないか考えています。・・・分かっていきます。皆さんの言いたいことは・・・。なのでちよこつと皆さんの意見を聞きたいのです。この中のどれか・・選んでくれると嬉しいです。

1 この小説を完結させてからにする。

2 オリジナルで何か小説を始める。

3 二次創作もので一つ書く。

おそらく2は一話完結でのものになることが多いかも。ただし文章は長くするつもりです。3は原作としては東方が今のところ一番有り得ます。

という訳で出来れば番号を書いて送ってくれと嬉しいです。  
無かった場合は・・・安全策で1かつ時々短編をやるかもしれません。

## 四十六話 最初の出会い

side 三人称

再び暗転。

「貴方は誰？」

ある教会の聖堂の中そこには銀髪碧眼の美しい少女と金髪紅眼の男がいた。

「俺の名前か・・・忘れてしまったよ。君は？」

嘗て伯爵と呼ばれた男はそう言った。名前を聞かれた少女は元気そうに言う。

「私の名前は天月！神様に似てるけど微妙に違うのさ！！」

「・・・・・・・・。」

背後にドーンと聞こえてきそうなポーズで少女は言う。男はその言葉を聞くと目の前の少女が急に心配になってきた。・・・主に頭が。

「じよ、「冗談だよ。」

滑ったことが恥ずかしかったのか少女、天月はこほんと咳払いをして誤魔化そうとする。

「さて・・・何て言うのかなあ。まあ最も世界に近い神様だよ。」

天月はそう言うのと近くにある長椅子に座る。

「えっと・・・名前無いんだよね？」

「ああ。」

天月の問いに男は頷く。

「む〜〜〜・・・あっ！じゃあ君の名前はユーヘルトで決まりだ  
！！」

少女は自信ありげに男を指さす。

「・・・何故？」

その名前を思いついたのか男は気になった。原因は初対面での自己紹介があれだったからである。

「そうだねえ・・・何となく。考えてたらこれが不意に出てきたんだよね。」

「・・・。。。」

「だめ・・・かな？」

少女は上目遣いで男を見る。その瞳は不安の色が出ていた。

「・・・いや、それで構わない。」



男の返答を聞くと少女は先程とは打って変わり子供のようにはしゃぐ男はそれを見て苦笑した。

「じゃあ、じゃあさ！！性はヴァーミリオンね！貴方の名前はユーヘルト・ヴァーミリオン！！」

「あ、ああ。まあいいが。ヴァーミリオンは？」

「私の名前！私、天月・D・ヴァーミリオンって名前なの！！」

「ああ、今度はまともなのか。」

「酷い！？」

思わず本音が出てしまった男、ユーヘルトの言葉に天月は泣きそうになる。

「済まない。つい。」

「酷いよ……。……。そうだ！！」

天月は項垂れていたが何か思いついたのか立ち上がる。

「私へのお詫びとして一緒に住んで！お客さんは初めてなんだ！！」

「初めて？」

天月の言葉にユーヘルトは首を傾げる。

「うん。私皆からは『聖女』って呼ばれて時々懺悔とかで人は来るんだけど会っちゃいけないんだ。」

「何故だ？」

「……ちょっとね。」

ユーヘルトの問いに天月は顔を曇らせる。

「……済まない。」

それを見たユーヘルトは済まなさそうに頭を下げる。

「うっん、いいよ。気にしないで。」

天月は明るく言ってユーヘルトの手を取る。

「では、貴方の愛称はユーね！貴方はこれからは私の家族です。」

「……言ってること変わってん」「ほら行くよユー！」……ハア。」

先程から天月にペースを握られているユーヘルトは溜息を吐く。

「……分かった。」

もうどうとでもなれ。

ユーヘルトはそう思い天月の後について行った。

## 四十六話 最初の出会い（後書き）

当初の予定じゃそこまで長くするつもりもなかったのにどんどん長くなっていく……。。

感想等ありましたらどうぞ送ってください。

## 四十七話 崩壊

side 三人称

辺り一体が燃えている。ビルが燃え寺が燃え妖怪達が燃えている。

「ふふふ。素晴らしいのう。」

その中心で狐の尾を生やした女が笑っている。天に浮かぶのは太陽でも無い月でもな無いただ黒い何か。その巨大さゆえに分からないだろう・・・それが一羽の巨大な鴉であることを。

「——————！！！！」

鴉が叫ぶ。その声は京都全域を死で包み込んでいく。

「おい！しっかりしろ！！華詠！！」

その遥か下で金髪紅眼の男、ユーヘルトが一人の女の体を揺すっている。

「・・・っ・・・ごめんなさい。・・・私、はこ・・・こまでね。」

華詠と呼ばれた女は息も絶え絶えだった。やがて華詠の体から力が抜けていく。

「・・・ユー・・・変えて・・・ね。私、の分ま・・・で。」

華詠はそれだけ言っと目を瞑った。彼女から先程までは感じられた

力ももう感じなくなっていた。

「・・・・・・・・・・。」

ユーヘルトは華詠の体を地面に横たわらせると影で覆う。ユーヘルトは剣を取り出すと頭上にいる鴉を見上げる。

「ユー！」

ユーヘルトが鴉を睨んでいると紅い翼を生やした女が降り立つ。

「アリスか。・・・他の奴等は？」

アリスと呼ばれた女は男の問いに僅かに顔を曇らせる。

「縛鎖は忌渦飢を打ち倒して力尽きたわ。刀断は虎子と花湖の二人と一緒にアマテラスとスサノヲを抑えてるわ。」

「・・・・・・・・オーデインは？」

「・・・到着まであと1時間よ。ゼウス達オリンポスの神々も到着まで1時間半。もう時間は残ってないわ。」

「残り1時間。それまでに夢現を倒す・・・か。」

「絶望的ね。」

アリスの言葉とは反対にユーヘルトは不敵に笑う。言った本人であるアリスもまた不敵に笑った。

「とんだ負け戦だな『相棒』。」

「まったくね『相棒』。」

二人は上を見る。

「・・・あの女狐は頼んだ。」

「任されたわ。」

ユーヘルトはそれだけ言うともまるで空を走るかのように鴉へと駆ける。

「それじゃあ。サクッと殺させてもらおうわ。」

アリスもまた紅い翼をもって飛翔する。

「死鴉!!」

ユーヘルトは自らの名を紡ぐ。

「? ?」

黒竜を全て自身の能力増幅にあてる。黒竜たちはユーヘルトへと巻き付きやがて覆っていく。

「――!!」

そこには全身を黒く染めた一匹の獣がいた。ユーヘルトは本能で死鴉へと向かう。

「――！！！！」

対する死鴉も自身に向かってくる驚異を消さんと攻撃を開始する。しかし力の差は歴然、死鴉という獣一足に対しユーヘルトが取り込んでいる獣は六足、自身も含めれば七足である。必然的に押されるのは死鴉であつた。

「――！！！！」

ユーヘルトは咆哮と共に剣を投擲する。その剣は死鴉の暴風をいとも簡単に切裂き死鴉の首へと突き刺さる。

「！！？」

その強烈な一撃に死鴉はよろめき体制を崩す。当然ユーヘルトがその隙を逃すはずも無く死鴉に近づき影で飲み込んだ。

「！！！！！！！！！！」

聞こえてくるのは死鴉の悲鳴じみた鳴き声と喰われていく音だった。

「む、主が相手かの？」

尾を生やした女、崩狐はアリスを見る。

「ええ・・・悪いけど貴方に構ってる時間はないのよ。」

アリスは翼を広げる。

「ふむ、マリアの相手を奪ってしまうのは忍びないが・・・。」

崩狐もまた何処からか扇子を取り出す。

「死んでもらうわ（おうぞ）。」

二人はその言葉と共に激突した。

「いやあ、お久しぶりですね。ユーヘルト君。」

「・・・・・・・・。」

自らの目の前に現れた男、夢現を前にしてユーヘルトの心は落ち着いていた。

「まったく京都も随分壊れちゃってまあ。」

「貴様は何が目的だ。」

ユーヘルトはその言葉と共に剣を向ける。



「……おや、獣の状態でも喋れるとは予想以上ですね。」

「答える!」

夢現は肩を竦めて言う。

「簡単なことですよ。世界をあるべき姿に戻す。この戦争も天月の死も『獣』の覚醒も全てそれによって起こしたものです。」

「貴様!」

「苦労しましたよ。貴方が獣にならなくては決して始まらない。貴方は全ての起点なんですよ。」

夢現はそこで肩を落とす。その肩はわずかに震えていた。

「だつつうのによお。テメエが運命に囚われた御陰で計画も大幅修正だつつーの!」

夢現はその言葉と同時にユーヘルトを蹴り飛ばす。

「……ぐっ!」

「ふざけんじゃねえぞコラ!」

ユーヘルトは見えない何かに体を押しつぶされていく。

「ったくよお。何でこんなの何回も繰り返さなきゃなんねんだよ!」

ユーヘルトの体に剣が突き刺さりそれに続くように次々に槍や斧が突き刺さる。

「がつ・・ハア!!」

ユーヘルトは獣の力を全開にし武器が突き刺さりながらも夢現へと突き進み拳を振るう。

「はい、それ知ってますー。」

「なっ!?!」

夢現はその攻撃をまるで知っていたかのように回避した。

「あゝあ。なっていないねえ、自分の敵のことは知っておかないと。」

夢現はそう言って嗤う。

「良いこと教えてやるよ!!俺は全ての可能性を知ってるんだよ!お前がした行動それによって生まれる無限の可能性。俺はその全てを瞬時に把握できんの!!」

「どうよ。これがお前の攻撃が効かねえわけ!そもそもテメエ、いや管理された世界の奴らじゃ俺に勝つことなんてできやしねえんだよ!?!ヒャーッハッハッハッハッハ!!」

ユーヘルトはその言葉に驚愕を隠せずにいた。

「・・・貴様は一体何なんだ。」

「どうせこの会話も覚えてやしねえんだ。聞く意味なんかないだろうよ……まあとにかく、これで終了だ。」

その言葉と共に降りおろされた剣によってユーヘルトは意識を失った。

## 四十七話 崩壊（後書き）

急展開。正直ここはもう少し長くしようか迷いました。あと場面の切り替わり方を から にしてみました。どっちがいいですかね？

感想、番号の意見などがありましたどうぞ送ってください。お願いします。

PSタイトルとあらずじ変えようと思います。もし違っていても中身は同じなので気にせずお願いします。

## 四十八話 最後の記憶

side 三人称

暗転、協会にいる金髪紅眼の青年はまるで生まれたての子供のように立っていた。青年がやがて銀髪の少女と出会い。死に別れ。京都が燃え仲間を失う。その出来事が何度も何度も繰り返されていく。青年は何度も死に何度も挑む。だが徐々にほんの僅かではあるがその運命は変わってきていた。

「オーデイン!!」

「久しぶりだのう!! 災厄よ!」

「今はテメエと戦ってる場合じゃねんだよ!!」

「悪いが夢現の元へは行かさん。」

「何でテメエまであいつに従う!!」

「それを、世界が望んでいるからだ!!」

「・・・運命。」

「そう、運命だ。」

ユーヘルトは俯き拳を震わせる。

「ふざけんな。認めねえ。何回負けても何回死のうとも俺はそんな

ものは認めねえ！！！！」

「第0拘束術式開放　輪廻の蛇　ウロウロス完全起動！！！」

「そうだ。俺はそのお前と戦いたかった。さあ見せてみる！お前の全力を！！」

「僕共その全てを持って障害を排除しろ！！」

ユーヘルトは影を出現させ無数の悪魔と死者を呼び寄せる。

「我誇る軍」ザ・アーミー

対するオーデインも自らの軍団を呼び寄せる。光と闇、白と黒、両者の軍は互いに睨み合う。

「幾千、幾万どれほどの歳を重ねようとも我の主への気持ちは消え去らなかった。」

オーデインは一步前に出る。

「たとえどれほどのモノを失おうとも己の信ずるモノの為に戦い続けた。」

「我は神ではなく……一つの生命として主を打ち倒す！！」

「オーデイン……。」

ユーヘルトもまた一步前へ出る。

「行くぞ。」

オーディンは自らの誇る最強の武器である無骨な槍を持つ。それと共に感じられるオーディンの神力。

「我が軍よ！！全てを薙ぎ払い敵を滅ぼせ！我らにあるは勝利の二文字なり！！」

「僕共！教えてやれ！俺達がどれほどの存在たるかを！奴らの心に植え付けろ！恐怖がどういふものなのかを！！」

「全軍攻撃！！」

その言葉と共にぶつかり合う二つの軍。互いに聞こえるのは武器を打ち合う音と敵を粉碎する音のみ。その戦闘の中ユーヘルトの剣とオーディンの槍がぶつかる。ただただで周囲にいた者たち余波によつては吹き飛ばされる。

「オオオオオオオオ！！！」

「ヌウウウウウウ！！！」

二人は一進一退の攻防を繰り返していた。オーディンの槍をユーヘルトが弾き、ユーヘルトが振り下ろす剣をオーディンは受け流し反撃する。

「ふん！！」

オーディンが槍を地面に刺すと地を埋めつくさんと無数の槍が地面から飛び出す。

「っ！！夜空照らす光の刃！！！！」  
グランシャリオン

ユーヘルトはその場から勢いよく離れると白い焰の剣で槍を薙ぎ払う。

「終わりになき罰！！」  
エンドレスパニッシュ

さらにユーヘルトは無数のナイフと六本の杭で応戦する。

「その首貰うぞ！！」

ユーヘルトはオーディンへと近づき

「血染めの鉤爪！！」  
ブラッディネイル

赤く染まった影をオーディンに振るう。

「ハアッ！！」

オーディンは向かってくるナイフとユーヘルトの爪を受け流す。やがてオーディンはそれを全て弾くと大きく距離をとり投擲の構えを取る。

「大神宣言」  
グングニル

その言葉と共に膨大な神力を纏った槍が放たれる。

「我が勝利が為に！！！！」  
ワン・フォー・ワン



ユーヘルトは剣に魔力を集中させ振り下ろす。槍と剣がぶつかった瞬間辺りは光に飲まれていった。

辺りは地形が変わり両者の軍も残っている者たちはいなかった。その大地に二つの影がたっていた。二人ともボロボロになりそれでも戦っていた。

「オオオオオオオオオオオオ！！！！」

お互い力もほとんど残っていないにも関わらず二人は戦い続ける。

「・・・ハア・・・ハア・・・」

「・・・つく・・・ヌウ・・・」

二人が互いの武器を手にとろうとした瞬間声が聞こえた。

「おいおい。何時までチンタラやってんだあ。」

その声のした方向に二人は振り向く。

「全く。やってらんないですね。」

「・・・夢現。」

「・・・・・・・・・・。」

夢現はボロボロになったオーディンを一瞥した。

「随分ボロボロですねえ。」

「・・・・・・・・。」

夢現はオーディンへと近づく

「お仕事ご苦労様でした。」

「・・・・・・・・なっ!!?」

夢現がオーディンに手を向けた瞬間オーディンは鎖に縛られた。

「そんじゃ、さようなら。」

その言葉と共にオーディンは無数の剣に刺された。

「夢現!!」

ユーヘルトは迷わず夢現へと剣を振り下ろす。

「おつと危ない。」

「第0拘束術式開放 全獣との連動を開始 輪廻の蛇 完全起動！  
！」

ユーヘルトは影を纏う。

「我が勝利が為に!!」

ユーヘルトは剣に魔力を集中させ振るう。

「これは・・・思った以上ですね。」

夢現はそう言って距離をとる。

アカシックレコード  
「世界樹 起動」

その言葉と共に世界が変わる。辺りは何処を見ても白く染められ、中央には白い石柱モノリスが建っていた。

「くくく・・・どうですか。禁断の果実エデンを創りあげる世界の基盤。」

「どの運命においても今の貴方に見せるのが初めてですよ。」

「・・・っ・・・オオ!!」

ユーヘルトは剣を振り上げる。

「オオオオオオオオオ!!」

やがて剣は黒く染まり辺りを黒に染め上げていく。

「・・・これが今回のお前が造り上げたものか。」

夢現はそう言ってユーヘルトを見る。ユーヘルトの体は黒く覆われていた。

「全ての獣との同化か。・・・俺には遠く及ばないな。」

夢現はそう言うところへルトに近づく、

「ウロウオロス  
黒獣の環！！」

ユーヘルトは黒く染まった剣を振り落とした。

「そんなもので俺の夢は侵せない。」

夢現は右手に魔力を込め、剣を受け止める。

ズガガガガガガガガガガガガガガガ！！！！！！

黒の奔流を夢現は完全に抑える。

「オオオオオオオオオオオオ！！！！」

「これで357回目。終わりだ。哀れな蛇。」

その言葉と共に夢現は剣を砕きユーヘルトの心臓に右手を突き立てた。

「が・・・あつ・・・。」

「ではでは今宵はこれで、次に会うときはもっと楽しめるよう期待していますよ。」

夢現はそう言ってユーヘルトの心臓を抉り取る。

「くくく、ヒヒヒヒ！！ヒヤーツハツハツハツハ！！！さよならだ！犬っころ！！？」

その言葉はユーヘルトに聞こえることなくユーヘルトはその命を失った。

## 四十八話 最後の記憶（後書き）

感想、誤字脱字又はアンケートの番号がありましたらどつぞ送ってください。

## 四十九話 ユーヘルト・ヴァーミリオン

side 三人称

レンガで出来た街並み。その一つにある建物の一室にあるベッド、そこに金髪紅眼の青年が寝ていた。青年は何かに魘されていた。やがて青年は魘されなくなるとしばらくしてパチリと目を覚ました。

「……………」

青年は黙ってむくりと体を起こす。青年は暫くブーツとしながら窓から見える街並みに目を向ける。青年の目には街を歩く人々の姿が映っていた。

「……………もうモノクロじゃないんだっとな。」

青年は呟くとベッドから起き上がる。青年が立ち上がろうとするとドアをノックする音が聞こえた。

「ユー、起きてるかしら？」

「ああ。」

ドアの向こうから聞こえるアリスの声に青年は返事をする。するとアリスはドアを開ける。

「いい夢……ではなかったわね。」

「……………ああ。」

「着替えは此処に置いておくわ。洗濯物はこの籠にでも入れておいて。」

「・・・・・・・・・・。」

「一度この街を観光でもして来るといいわ。良い気分転換になるかもしれないわよ。」

「・・・・・・・・ああ。ありがとう。」

「ええ。」

アリスは微笑むと出ていく。青年は取り敢えず着替えだけでもと着替えに手を伸ばす。

「・・・・・・・・出掛けるか。」

アリスの言うとおりいい気分転換になるかもしれないしな。

青年はそう考えながら着替える。今の服装は赤いジャケットに黒のシャツとズボンだ。青年は籠に着ていた服を入れ部屋を出ていく。

部屋を出るとその先はリビングになっていたらしくテーブルや椅子などがある。

「・・・・・・・・・・。」

青年は部屋を見回しやがて靴を履いて家を出た。

「昼頃か。」



青年は一度太陽の位置を確認し街を歩いていく。

「……伯爵、か。」

運命が終わることに巻き戻されまた運命が始まる。

「……<sup>オレ</sup>伯爵は一体何を望んでいたんだろうな。」

青年は自らに獣が宿った時のことを思い出す。今まで忘れていた記憶を……。

「ウロヴオロス……何で御前は俺を選んだんだ？」

青年は自らの獣に問いかける。しかし獣からの返事はなく聞こえるのは街の喧騒だけだった。

街の外れにある広場、青年は柵に寄りかかり落ちる夕日と夕日に照らされる街を見ていた。

「……俺は誰なんだろうな。」

伯爵なのか、獣なのか、神なのか、それとも……

「……。」

青年はまるで自分が自分でないかのように感じていた。そこにいるはずなのにそこにはいない。そんな矛盾を感じていた。

「・・・・・・・・彩。」

自らの記憶に一回も彼女は出ていなかった。

「運命は変わってきている。」

本当に僅かではあった。だがこの運命においてその違いはハッキリと出ている。

「華詠は京都で死んでいた。フィーナも自分に怯える子だった。」

自分は彼女たちに何か出来ていたのだろうか。いやそもそも俺は・

「くそっ！！俺は彼女たちがどうなるのか知っていたのに！！」

青年は力任せに柵を殴る。普段ならこの程度では痛みは感じないのに今は酷く痛みを感じた。

「俺は何なんだ！！誰なんだよ！！」

青年は叫ぶ。もしかしたら今此処にいるのは自分ではないユーヘルトなのでは……。その恐怖は徐々に青年を苦しめていく。

「何を苦しんでるの？」

不意に聞き覚えのある少女の声がした。青年は思わず振り向く。

「天・・・月？」

しかし、振り向いた場所に彼女の姿は見えない。

『君の名前はユーヘルトで決まりだ！！』

再び彼女の声が聞こえる。先程よりもハッキリとした声で。

『じゃあさ！！性はヴァーミリオンね！貴方の名前はユーヘルト・ヴァーミリオン！！』

『ほら行くよユー！』

青年はその声を聞く。

・・・ああ、そうだ。これは彼女が付けてくれた名前。他の誰でもない今此処にいる俺の為に付けてくれた名前・・・。

青年は自分の右拳を見る。そこは柵を殴ったことによって僅かに赤くなっていた。

この痛みも俺が今此処にいる証拠・・・。

「俺は誰か・・・。俺はいつだって俺か。」

青年はそう言って苦笑する。天月だったらきつとこう言うのだろうと。今は亡き彼女のことを思い出す。

「そうだ。俺はユーヘルト。ユーヘルト・ヴァーミリオンだ。他の誰でもない。」

青年、ユーヘルトは天月の願いを思い出す。

「『世界を変える』……か。」

現実を知らない子供の様な願いだ。だが……

「変えてみせる。……奴がつくる世界を俺達は壊す。」

……世界を変える。自分勝手な願いだ。自分が気に入らないから世界を変える。それがどれだけ多くの人の運命を変えてしまうのか知っているのに。

「もう俺達の様な被害者をだしはしない。」

その為には奴を倒さなくては、そして……

「獣もこの世界にはいてはいけない。」

ユーヘルトはどこか遠くを見ていた。

「……伯爵、俺は随分遠くに来ちまったんだな。」

「俺はもう人間ではない。だけど……心までは変わりはない。」

「俺は、人間としてアンタの願いも継ぐよ。」

ユーヘルトは街に背を向ける。

「さようなら、伯爵<sup>オレ</sup>。」

「アリス。」

「何かしら？」

ユーヘルトがアリスの名を呼ぶと彼女はどこからともなく現れる。

「フィーナと彩は？」

「フィーナは獣のいる街に、彩は奴らに捕まったわ。」

「そうか。・・・『相棒』」

「あら、何かしら『相棒』」

「俺は奴を倒す。俺の為に、そして俺が思いを継いだ奴らの為に。」

「・・・・・・・・。。。」

「勝つぞ。」

「ええ。」

アリスはユーヘルトの言葉に不敵に笑う。その顔を見てユーヘルトも不敵に笑う。二人は進んでいく。奇しくもその姿は二人の始まりと同じだった。



## 四十九話 ユーヘルト・ヴァーミリオン（後書き）

次からは新章が始まります。暫く彩の出番はありません。感想、アンケート等がありましたらどうぞ送ってください。

## 五十話 かつての仲間

雪が降り積もる広大な森林地帯を二人組の男女が歩いていた。一人の男、ユーヘルトは赤いジャケットの下に黒いシャツを着て上と同じ黒いズボンを履いてとても肌寒そうに見える格好だった。もう一人の女、アリスは黒い毛皮のコートを着ているが首を埋めていた。

「……………なあ。」

不意にユーヘルトが口を開いた。

「何かしら？」

ユーヘルトの言葉にアリスは返事をする。

「……………此处何処よ？」

「ロシア郊外よ。」

「……………後どれくらいで着くんだ？」

「さあ。」

女の言葉に男は項垂れる。

「しっかりしなさい。……………ユー。」

「……………ああ。」



アリスは突然身構えユーヘルトを呼ぶ。呼ばれたユーヘルトは木の影に隠れアリスもそれに続く。やがて遠くから多くの足音と何か金属の擦れる音がする。その音は徐々に大きくなりその音の正体がわかった。その正体は甲冑と兜そして手には槍や剣を持った騎士の姿をした者たちだった。

「・・・・・・・・・・。」

騎士達は止まると辺りを見回した。

「・・・・・・・・魔導兵器。」

ユーヘルトはその姿をみて呟く。

「ええ。これだけの数を向かわせるなんて余程私達のことを探しているのかしら。」

「一体何回目だよ。」

二人は街を出てからここ数日ずっと魔導兵器達と戦っていた。そのためユーヘルトは呆れた様に溜息を吐く。

「暴蝶。」

ユーヘルトが呟くと周囲に全身が黒く染まった蝶が現れる。

「・・・・・・・・やれ。」

ユーヘルトがそう言うのと蝶の群れは騎士へと飛んでいく。騎士達はその蝶を見るとすぐさま散開する。

「無駄だ。」

ユーヘルトの言葉と共に蝶たちの周りが歪む。見ると蝶たちが通った周辺にあるものは全て抉られたかのような痕が出来ていた。騎士達は周囲に障壁を展開させるが蝶は数の利を生かし騎士を囲み逃げ場を無くすと共に障壁を破壊していく。囲まれた騎士はろくな抵抗をすることも出来ず次々に破壊されていく。

「残りも僅か。行くぞ。」

「ええ。」

その合図と同時に二人は騎士達へと駆ける。

「オラァー!!」

ユーヘルトは目の前にいる騎士に剣を振り下ろし振り向きざまに向かってきていた騎士を両断する。

「甘いんだよ!」

すると背後で構えていた二体の騎士を影を放ち喰らう。

「クスッ、その程度なのかしら?」

アリスもまた目の前にいた騎士達を翼で薙ぎ払う。そして着地した瞬間に辺り一帯にいた騎士は全て消し飛ばされる。アリスはそれを確認することもなくその場に佇む。

「・・・・・・・・!!」

それを好機と見たのか一体の騎士が上空から剣を振り下ろそうしていた。だがその剣がアリスに振り下ろされようとした瞬間騎士は黒い光に呑み込まれた。

「随分扱えるようになってきたじゃない。」

アリスは後ろにいるユーヘルトに話しかける。

「・・・いや、まだだ。そこまで俺のイメージ通りに動かせねえ。」

だがユーヘルトは首を振ってその言葉を否定した。ユーヘルトは歩きながら辺りにいる騎士達を喰らっていく。

「やっぱこんなもんじゃ足しにならねえか。」

ユーヘルトは肩を落とす。

「神じゃなくなったのはいいが・・・。」

そうユーヘルトは神社を破壊されたとともにマリアの魔術によって神社の記憶を知っている人物の記憶が消され神ではなくなっていた。

「神力が無くなったから獣の調子はいいな。」

本来神は人々を助ける存在である。その一角であったユーヘルトは対極にある獣の力を昔より使いこなせなくなっていた。だが今はその枷が外れ同時に今までの記憶が戻ったことによって他の獣たちも扱えるようになっていた

「・・・・・・・・・・で、どこ行くよ。」

「そうね。このまま追われるのは厄介ね。」

「・・・・・・・・こいつらから逃げれる場所ねえ。」

そんな所があったか。

ユーヘルトは自らの記憶を掘り起こしていく。

「・・・・・・・・・・あ。」

やがて何か思い当たることがあったのかユーヘルトは声を上げる。

「どうしたの?」

「いや、一つだけあったぞ。」

「何処かしら。」

「・・・・・・・・教授の所。」

ユーヘルトがそう言った瞬間アリスは今まで見たことがない程嫌悪感を露わにした表情になった。

「いや、そんな嫌そうな顔するなよ。」

「そもそも化け猫は私達のことを覚えているのかも分からないわよ。」

「まあ、伯爵の時に五人で集まった時以来だからな。」

「ガンドールに私に伯爵に黒曜に化け猫……。黒曜はともかく何であいつなのよ。」

「仕方ねえだろ。黒曜ももしかしたら教授の所にいるかもしれねえだろ。」

「。。。。。。。」

「お前らは昔から仲悪いよな。」

ユーヘルトは苦笑する。

「仕方ないでしょ。」

アリスは相変わらず不貞腐れた様な顔をしている。普段なら決して見せない表情をしているのは昔からの友人だからなのか、それとも。。。

「何にしても行くぞ。アイツらを撒かねえとフィーナの所にも行けねえ。」

ユーヘルトは未だに不貞腐れているアリスの手を無理やり引いて連れていく。彼女がほんの僅かに微笑んでいるのに気づかずに。。。

「馬鹿だ、アイツは絶対に馬鹿だ……。」

ユーヘルトは全身を汗だくにしながら言う。

「最悪。あの化け猫のせいで……。殺してやろうかしら。」

アリスもまた暑そうにユーヘルトの後をついて行く。二人の周囲にはいくつもの機械の残骸や蒸気が噴き出している機械がある。二人が暑そうにしている原因はこれだった。

「……。やっと…見えてきた。」

二人の前には一軒の家が見えていた。二人はそれを確認すると急いで家へと向かう。

「……。ゼエ……。ゼエ……。」

「……。ハア……。ハア……。」

二人はドアの前で息を整える。

「大丈夫か。」

「え、ええ。」

二人は深呼吸をして一度顔を見合わせて頷くとドアに手を掛ける。

「……………」

しかしユーヘルトは一向にドアを開けようとしな。それを疑問に思ったアリスは首を傾げる。

「どうしたの？」

ユーヘルトはアリスに顔を向ける。

「……なんて言えばいいんだろう。」

「え……。」

ユーヘルトはドアの前でうんうんと言えはいいのかを考え始める。するとそれに嫌気が差してきたのかアリスは短剣を出現させユーヘルトの背後に移動し振りかぶる。

「……何やってんだアリス？」

「いえ、ちょっと殺らなくちゃいけないことが出来たのよ。」

ユーヘルトの問いにアリスは満面の笑みで答える。ユーヘルトは冷や汗を掻きながら後退する。しかしアリスは迷わずに振りかぶった短剣でユーヘルトを吹っ飛ばす。

「ぐほっ!!」

ユーヘルトは短く悲鳴を上げるとドアを突き破り家の中に勢い良く転がり込んだ。

「全く。随分バカになったのね。」

アリスも突き破られたドアから歩いて入っていく。

「い、痛いだろうが。手加減ぐらいしろ。」

「知らないわよ。」

アリスは鼻を鳴らすとユーヘルトを無視して部屋を見回す。

「何だお前たちは……。」

やがて声のした方を見るとそこには一人の女性が立っていた。女性の髪は淡いピンク色でその髪をポニーテールのようにしている。そこまでは人間と何一つ変わらない姿である。ただその女性には髪と同じ色をした猫のような尻尾が生えていた。

「教授。……えっと。」

「私たちは……。」

「伯爵だよね？」

二人が口籠っていると目の前の女性とは違う方向から声が聞こえる。

「もう一人は……アリスかな？」

「……黒曜。」

二人は声のした階段の方向を見ると一人の金髪の少年が立っていた。少年は目を瞑りながら此方が分かっているかの様に一歩ずつ近づいてくる。



「久しぶりだね……。もう会えないと思ってたよ。」

少年、黒曜はユーヘルトの頬を撫でる。

「待て！伯爵だ！？どう見ても別人だろう！！それに奴は死んだ！！！」

「目が見えないから姿は分からないけど。この音色は伯爵のものだよ。」

そう言うと黒曜はアリスの方に向く。

「アリスも久しぶり。昔よりも随分成長したね。」

黒曜は微笑んで言った。

「ええ。貴方は変わらないわね。」

アリスもまた微笑んでいった言う。

「あゝ。本当に伯爵なのか？」

女性も黒曜を余程信頼しているのか多少の警戒心はあるもののユーヘルトに話しかける。

「ああ。久しぶりだ。教授。」

その言葉を聞くと教授は先程まで持っていた警戒心がまるで無かったかのように気を抜く。

「・・・久しぶりだな。伯爵。」

「正確には元なんだけどな。」

教授がそう言うとユーヘルトは頬を掻きながら言う。

「どういうことだ？」

「そのことはこのあと説明するよ。」

「・・・そうか。」

教授はそう言うときアリスへと目を向ける。するとアリスはビクリと肩を強ばらせる。

「それにしても久しぶりだなアリス。随分とまあデカくなりやがって。」

教授はニヤニヤしながらアリスに話しかける。

「あ、当たり前でしょ。どれだけの月日が流れてると思ってるのかしら。」

アリスは若干顔を背けていう。

「ん？どうした小娘。話すときは人の目を見て話せと習わなかったのか？」

教授は変わらずニヤニヤとした顔でアリスに近寄る。

「あなたと目を合わせたら目が腐るわ。」

「ほう言うようになったじゃないか小娘が。」

教授はそう言うの一つの分厚いアルバムのような物を取る。

「昔は随分可愛らしきやめなさい!!」・・・おっと。」

アリスは一瞬で詰め寄りアルバムを取ろうとするが教授はそれを予測していたかのように一瞬で隠す。

「クスクス・・・変わらないね二人は。」

ユーヘルトの隣にいる黒曜は笑いながら言う。

「ああ。全くだな。」

ユーヘルトも目の前で行われている二人の姿を見て笑う。

「じゃあ今の君は伯爵ではなくユーヘルト・ヴァーミリオンなんだね?」

「ああ。」

二人に今までのことを包み隠さずに言っていると二人は少し驚きながらも話を聞いてくれた。

「ガンドールも……。」

「……ああ。」

二人は少しだけ悲しそうな顔をする。

「で、追われてるんだよね？」

「ああ。」

「ふむ、そういうことなら私たちも手を貸そう。」

「済まない。」

「ユーが言うことじゃないさ。」

「そうだ。確かにお前は伯爵じゃないかもしれない。だがお前が私たちにあって大切な奴であることに変わりないんだ。」

「ありがとう。」

「でもどうやって奴らを撒くのかしら？」

「僕がやるよ。」

アリスが言っていると黒曜が返事をした。

「僕が座標をずらせば問題ないよ。ただそう何回も効くわけじゃないけど。」

「でもそれだとお前も。」

「何を言ってるんだ。私もついて行くぞ。」

「だからそしたら貴方たちも……。」

「友達が困ってるんだこれぐらい御安いご用さ。」

「それに夢現を倒せるのはユーヘルトぐらいしかないんだ。」

「………迷惑をかける。」

「だから気にしないでいいよ。」

黒曜はそう言ってまた笑う。

「そうだね。出発は少し時間がかかるから二日後でいいかな？」

「ええ、問題ないわ。」

「それじゃあ私は出発するのに片付けてくる。」

「ああ。」

教授はそう言つとソファから立ち上がり作業場へと向かう。

「それじゃ僕も。」

黒曜もそう言つと席を立つ。

「……………」

「心配かしら？」

「ああ。」

「……彼らは自分の意思に従つて私たちに協力してくれるのよ。それに私たちが心配するほど二人は弱いわけじゃない。」

「……………そうだな。」

そう言つとユーヘルトは立ち上がる。

「一回風にあたつてくるわ。」

それだけ言つてユーヘルトは家をでた。

ユーヘルトは機械の残骸を見ながら立っていた。

「……………掴むのは自らの望む運命。」

そう呟くとユーヘルトは手にもっている欠けた歯車を弾く。ユーヘ

ルトは手に取った歯車を一瞥し地面に捨てると家へと帰る。ユーヘルトが弾いた歯車は元通りに修復され新品のような輝きを放っていた。

## 五十話 かつての仲間（後書き）

・・・・ついに五十話ですか。紹介やら含めると変わりますが・・・・。  
何か長く感じてしまいます。次回あたりで解説はやりたいと思います。  
す。

11 / 3 新しく短編。そして『変人達の極々普通の日常』久しぶ  
りに更新しました。



## 五十一話 盲目のピアニスト

月に照らされた部屋の一室。そこには取り残されたかのように一つのピアノがあった。そしてそのピアノを金髪の少年が弾いていた。少年の奏でる音色はとても美しく誰もが素晴らしきと言うものだろう。月夜に照らされた部屋でピアノを弾いている少年の姿はとても幻想的でこの世のものとは思えない光景だった。

「　　？　　」

少年は歌う。月に照らされた部屋でたった一人で……。

「なかなかものだな。」

誰もいないはずの部屋に一人の男の声が響いた。その声を聞いた少年はピアノを弾いていた手を止めると男のいる方向を見る。

「……盲目のピアニスト。」

男は少年へと近づいていく。

「……貴公は満足か？」

男は少年に問いかける。

「こんな何もない部屋でた音色を奏でるだけの世界で……貴公は満足なのか？」

「……僕は。」

「もし満足でないなら我と共に来い。我が貴公に最高の曲を弾かせてやろう。」

男は少年に手を差し出す。少年は俯くとやがて男の手を掴んだ。

「そうか。なら名乗らなくてはな。」

「……我は伯爵。貴公に最高の曲を弾かせる男だ。」

「……僕の名前は黒曜。伯爵、僕は君について行くよ。」

それは運命に囚われる男と盲目のピアニストの出会いだった。

side ユーヘルト

「随分楽になったな。」

「ええ、まったくね。」

俺達は雪原の中を車に乗って走っていた。いや、便利だなこれ。

「しかし本当に出会わないな。」

俺達が歩いていた時は随分出会ったあの魔導兵器とも出会っていないな

い。

「言っただろう。黒曜に任せれば大丈夫だと。」

俺が言つと運転席から教授が此方を向いて話す。

「本当すげーよ。」

黒曜が言つには探知する座標と出現座標をずらしてるとか・・・正直詳しくは分かんねえ。

俺達がそんなことを言っていると黒曜が照れたように笑う。

「それ程でもないよ。僕の力は皆みたいに攻撃特化じゃないからこ  
ういう方が向いてるんだよ。」

「そついうもんかねえ。」

「そついうもんだよ。」

黒曜はそう言つと集中し始める。恐らくまた座標をずらすのだろう。

「それにしてもこれだけ速度出して大丈夫なの？」

アリスが運転をしている教授に問いかける。・・・うん、まあそう  
だろうな。実際余裕で喋ってるから分らないがこの車恐らく時速  
150kmを余裕で超えてるだろう。そんな速度で喋っていられる  
のは俺達が人外だからだろうな。などと考えていると突然車の速度  
が上がる。

「うおっ！」

その突然のことに俺は体制を崩す。

「・・・どうしたんだ一体。」

「後ろを見るといいわ。」

アリスの言葉に俺は後ろを見る。そこには数こそそれほどではないが魔導兵器が出現していた。

「・・・強いね。僕の実力の隙間を上手く掻い潜ってくる。」

黒曜はその顔を僅かに歪めて言う。

「くそっ！化け物め！！」

教授はそう毒づく。奴らは速度では勝てないと知り矢を番える。

「！！」

それは雨だ。数え切れないほどの無数の矢が俺たちを射殺さんと殺到する。

「っち！」

俺は殺到する矢に影を振るい喰らっていく。だが向かってくる矢は俺の影では喰らい尽くせないほどの数だ。

「音域」

しかし向かってくる矢はその言葉と共に停止する。よく見れば矢には目を凝らさなければ見えないほど細いピアノ線が張り巡らされていた。

「砕」

そしてその言葉によって矢は全て砕け散る。

「助かった黒曜！」

「どういたしまして。」

俺はそれを行なった者に礼を言う。黒曜は笑いながらピアノ線を回収する。

「いつ見ても凄いわね。前よりも腕が上がったんじゃないかしら？」

「まあね。何時何が起きるかわからないから訓練は欠かさなかったんだ。」

黒曜は俺たちを見て笑う。後ろにいた魔導兵器も既に姿は見えなくなっていた。

「それにしても夢現はとんでもないね。結構時間は稼げると思ってたんだけど・・・。」

「ああ。奴の能力はとんでもないからな。」

「知ってるのか？」

「あくまで俺の予想だな。」

俺の予想が正しければ奴は化け物なんて言葉でも生ぬるい。それは最早生物が持つ力ではない。

「見えてきたわね。」

「うん。」

「あそこに……。」

「そう、獣……視蟲がいるのよ。」

俺達は目の前に見える大都市へと車を走らせた。

## 五十一話 盲目のピアニスト（後書き）

今回短め。そして解説コーナー・・・済みません。最初に行つてから結構経つてるけどテストがあるのでまた少し延期です。ようやく獣。ああまた長くなってきましたね。

## 五十二話 獣達の夜

ああ、ようやく出逢えた。この繰り返す運命でようやく貴方に出逢えた。神は徒に私達を弄ぶ。貴方の枷を私が外そう。貴方の全てを私は受け入れよう。ああ、愛しき貴方。私は貴方だけを求め続けた。私だけが貴方を愛そう。私は願う。ああ、どうか永遠に貴方と一つでありたいと。ああ、貴方を永遠に愛していたいと。貴方の全てを私は掬いとる。

ロンドン中心部そこに俺達はいた。

「・・・随分繁盛してるな。」

俺はその通りのある一角を見て言った。そこには何処まで続くのか数えるのが億劫に成程の人が列んでいた。

「よく当たるらしいわよ。」

隣にいるアリスもその行列をみてうんざりしている。

「誰も不思議に思わないのか？」

「思っても何でも当てちゃうからね。イカサマの証拠なんて見つからないよ。」



教授と黒曜もその光景に思わず苦笑いする。

「……………まずは様子見だな。」

「どうやら双子らしいよ。」

「双子？」

「ええ、双子の兄妹らしいわ。」

それを聞いた教授が首を傾げる。

「どういうことだ？二つに分かれて宿ったのか？」

「いや、感じられるのは一人だけだ。……………ただ。」

「ただ？」

「もう一人からは嫌な感じがしやがる。」

そうどちらかは見ないと分からないが一人からは確かに獣の気配が感じられる。気配を隠せていないということは完全に扱い切れていないのだろう。……………まあ他の奴等の様に暴走させないだけマシか。ただもう一人、此奴は何だ？さつきから嫌な感じがしやがる。その気配を感じて俺の中の獣が叫んでやがる。まるで天敵に出会ったかのように。

「……………まずはフィーナのところに行くか。」

「そうね・・・待たせてしまったものね。」

「ふむお前の妹か・・・どんな奴か楽しみだ。」

「変なこと言ったら殺すわよ。」

「妹の前ではしっかりものでいたいのか？」

「・・・・・・・・死ね（ボソッ）」

「まあまあ、とにかく行こうよ。」

黒曜の言葉に俺達は歩き出す。

場所はそこまで遠くなく、歩いて10分程の場所だった。アリスを先頭に俺達はその家に入っていく。

「おかえりー！！」

入った瞬間腹に弾丸の様に飛び出してきたフィーナを食らう。

「むう、おおおおおお・・・・・・・・。」

その弾丸を腹に食らった俺は床に蹲る。それを無視して入る三人。というかアリスお前こうなるの分かってただろ。まるで分かっていたみてえに自然に避けやがって・・・・・・・・。

「久しぶりー！」

フィーナ嬉しいのは分かったから退いてくれ吸血鬼の怪力で締め付けられてとんでもなく痛いから・・・・。待つて！お願い！そんな力

を込めないで！！

「フィーナそれぐらいにしておきなさい。」

ようやくアリスから助けが来たか……。マジで死ぬかと思った。

「うん！お姉さま！！」

「……随分似てないな。」

「黙りなさい。」

フィーナを見ていた教授がポツリと呟く。それに耳聴く反応するアリス。

「初めまして。僕の名前は黒曜だよ。君のお姉さんのお友達。」

黒曜はお前は本当に出来た奴だよ。このメンバーだとお前が天使に見える。……実際の天使は嫌いだが。

「私の名前は……。まあ教授と呼べ。」

教授は少し間を置いて自己紹介する。……。教授の名前ってなんだっけ？伯爵も伯爵だが何でも俺たちのメンバーは謎が多いんだ？

思わずそう思ってしまった俺は決して悪くないはずだ。

「しかし、フィーナは退屈じゃなかったか？」

「退屈だったけど能力で日の中を歩けるから図書館に行って本を借

りたりしてたんだ。」

そう言つて本を見せるフィーナ。俺はそれを手にとって中を見る。  
・・・・ふんふん、なるほど・・・分らん。

俺はボタンと本を閉じる。微妙に読めないこともないが如何せん興味が無いから何が書いてあるのか意味不明だ。ただの文字の羅列にしか見えん。

「ん、随分と難解なものを読んでるな。」

俺が本の表紙を見ていると教授が覗き込んでくる。

「知ってるのか？」

「ああ、読んだことはあるがこの作者は捻くれ者でな。言いたいことを様々な表現を使って巧妙に隠してるんだ。」

「は。」

読めないからどんな感じなのかは全く分からないがとにかく面倒臭い本だということは分かった。しかし俺より年下なのにこんな本を・・・・将来が怖い。

俺はそう思いながらフィーナに本を返した。しかし図書館か。

19時40分。現在俺は図書館にいた。正直フィーナから聞いてか

ら行きたくて堪んなかったんだよね。

流石は国立図書館広いし大量の本がある。だがこの時間だと人は少ないようだ。殆ど人の姿は見えない。

「何が出るかな 何が出るかな」

俺は本棚にある本を見ていく。ほんとに沢山あるな今日一日で見るのは無理か……。

「…………そろそろか。」

俺は時計を見ると持っていた本を元あった場所に戻す。俺は本を戻すと歩き出し…………止まった。

「…………？」

さつきから妙な視線を感じるんだよね。別に悪意のあるものじゃないが気になって性がない。俺は当たりを見回す。

「……………む。」

俺が見回していると二階に此方を向いている人影があった。

…………少年、いや少女か？

そこには軍服を着た一人の少女が立っていた。一目見たただけとその容姿から少年に見えるが恐らく少女で合ってるだろう。髪は雪のように白く腰よりも長い、瞳は青くその双眸は真っ直ぐに俺を捉えている。少女は俺が気づいたのが分かるとほんの僅かに笑って歩いて行った。

……………面倒事の予感が凄いするなあ。頼むから勘弁して欲しいんだがな。

俺は少女のいた方向を見るのを止め歩きだした。

「よかった。流石に人はもういないか。」

俺は建物の屋根からあの占いをやっていた双子を見る。・・・ふむ

「女の子の方が。」

あちらから獣の気配は感じる。・・・それにしても

「朝よりも強いな。」

もう一方嫌な気配がしてた男の子の方から感じる力が朝よりも強くなっていたのだ。

「・・・ありやあ、一体何だ。」

この気配は感じたことがない。だが危険だというのは分かる。・・・まあいい

「闇猫。」

俺は一匹の猫を呼び出す。距離が随分あるから声などが分からないからな。

「夜はお前の世界だ。余すことなく闇を支配しろ。」

俺の言葉に従って闇猫は姿を消す。闇猫には闇と同化してもらった。これである二人の声や様子がわかる。

「大丈夫？」

「うん。平気だよ。」

闇猫を通して双子の声が聞こえる。プライバシー？違う、あれだ、これは偶然聞こえてしまっただけだ。

「今日もお客さん多かったね。」

「そうだね。でもこれの御陰で今日も沢山お金が貰えたよ。」

「体調は大丈夫？」

「うん、最近は調子もいいんだ。」

女の子はそう言って笑う。

「……………」

調子が良い（……………）、か。微妙なところだな本当に体力が回復したのか、それとも獣に馴染んできているのか……………。

「何とか切り離せないか……………」

上手くやれば出来るだろうが失敗する可能性もある。何より本人たちが拒否する可能性がある。……………。そしたら成功確率は一気に下がる。

「……………どうにか何ねえかな〜。」

ヒュッ

俺が考え込んでいると不意に風切り音がする。

「？」

俺は後ろを向こうとし背中に激痛が走った。

「！！・・・がつ！・・・グアア！！」

何だ何が起きやがった。俺は周囲を警戒する。よく見れば俺の周囲を光が走っている。俺は闇猫を使い見ようとするが速すぎて追いつかない。

ヒュッ

再び風切り音。だが闇猫で周囲一体を見ていた俺は剣を呼びそれを弾く。

「・・・ッ！」

まるで鉄パイプでコンクリートの壁を殴ったかのような衝撃が俺の手に走る。俺はその衝撃に顔を顰める。くそっ！手が痺れて反応が鈍りやがる。

俺は向かってくる光を弾いていく。だがその光のスピードは徐々に速くなっていき追いつけなくなる。

「・・・ちいっ！」

あんましやりたくないが・・・！俺は一枚の札を取り出し投げる。



すると札は発光しやがて光と共に消えた。

「暴蝶！」

俺は漆黒の蝶を周囲に展開する。光は蝶達によってそれ以上の接近を許されず弾かれる。この程度で終わりだと思ふなよ！

「絶狼！」

俺は同じく漆黒の狼を呼び出し命令する。

「敵の範囲を絶ち尽くせ！！」

絶狼は一声吠えたと黒い閃光を飛ばす。その閃光は無数に枝分かれし俺と蝶を囲むようにして展開される。光はそれに触れると右半分を両断される。光はぶれるが瞬時に元通りになる。

「・・・・・・これでもダメか。」

絶狼の能力でも消えないだとか？どんな能力だっつーの。俺がそう考えていると光は突然此方に向かってくる。

「なっ！？」

自ら突撃するだ！？両断されるだけなのに何を考えていやがる！  
！光は絶狼の閃光に触れ、閃光を砕いた。

「！？」

今日何度目になるかの驚愕が俺を襲った。獣の力を砕くだ！？主

神でさえ弾くことが限界だったのに！

光は目にも止まらぬ速さで俺を貫く。

「ぐっ！」

光は次々に俺を貫いていく。・・・！舐める、な！！

「第0拘、束術式開・・・放・・・輪廻の蛇・完・・・全・起動」

その言葉と共に俺は体を影で覆う。

ガキイ！！

鋭い音を立ててぶつかり合う光と影。俺は剣を持つと光に振り落とす。しかし光はその剣を受け止める。そこで漸くその光の正体が分かった。人だ。軍服を着た一人の少女。図書館で会った少女だ。

「ちい！テメエも夢現の差し金か！？」

俺は少女を弾く。吹き飛ばされた少女はバランスを取り屋根の上に着地する。

「逢えた。」

「あ？」

「漸く、貴方に逢えた。」

「何言ってやがる。俺はテメエなんて知らねえぞ。」

「僕は知ってる。貴方の事を誰よりも良く……。」

「気味が悪いな……。」

俺は少女へと剣を振るう。

「……。グローリア。」

少女はその剣を躲し言う。

「僕の名前。そして貴方を愛する者!!」

少女はその言葉と共に魔力を集中させる。

「Wird behaiten und machtes; Sie. Ich werde Ihnen adnehmen. 囚われし貴方。貴方の枷を私が外そう」

「Ich werde alles von Ihnen erhalten. 貴方の全てを私は受け入れよう。」

「Ach, Geliebte Sie. Ich setze fort, nur Sie zu fordern. ああ、愛しき貴方。私は貴方だけを求め続けた。」

「Nur ich werde Sie lieben. 私だけが貴方を愛そう。」

「Ich bete. Wenn es wiebittet



「お前は・・・獣・・・なの、か・・・？」

グローリアは叫ぶ。

「そう！僕は獣！！円環の蛇を解き放ち災厄を創りし者！！僕は貴<sup>オリ</sup>方から生まれ落ちた者！！」  
<sup>ジナル</sup>

「さあ、僕と共に飛び立とう！！」

その言葉と同時にグローリアは一瞬で俺の懷に潜り込む。速い！？俺は彼女の拳に反応することが出来ず吹き飛ばされる。

「ぐっ・・・が、あ・・・。」

その衝撃に俺の意識が一瞬飛ぶ。そして意識が戻った俺を激痛が襲う。

「・・・ぐう・・・う・・・が・・・。」

俺はその痛みに耐えきれず蹲り、おびただしい程の量の赤黒い液体を吐く。それは屋根を赤く染めていく。

「キキキキ・・・この世界は酷く脆く、酷く遅い。・・・この世界では僕に追い付くことなんて出来ないんだ。」

「く・・・っ・・・。」

動け、動きやがれ！！しかし自分の意思に反し俺の体は全く動こうとしない。

「さあ、一緒になろう。．．．一緒に溶け合っんだ。」

グローリアが一步步近づいてくる。そして一度大きく笑うと俺に向かい飛び掛った。

## 五十二話 獣達の夜（後書き）

ああ、疲れた。実際に書いてみたら三話分くらいの量になりました。そしてコピーしていると突然消えました。・・・なんてこったい。まあとにかくにも

### 解説コーナー！！

・なぜ記憶が甦ったのか：これ自体の兆候は京都の時からありました。ただそこから様々な出会いとともに徐々に思い出してきたからです。

・世界樹：世界を管理するためにある物。その所有権を持っているものは全パラレルワールドを観測することが出来る。その他にもあるようだが・・・

・禁断の果実：世界が創られるための核。世界樹同様その他にも用途はあるようだが・・・

・なぜ黒曜と教授は伯爵を覚えているか：これは少し難しいですが、繰り返されているのは伯爵が天月のいる協会に来た時からなのでその前の世界は繰り返されていません。なので他のメンバーは伯爵を覚えている。しかし伯爵自身は運命が戻ると共に一度記憶が消されるので覚えていません。

・じゃあアリスも夢現のこと知らないんじゃない？：それは運命が変わると共に僅かに世界樹に綻びが出来ていたため。

その他にもいろいろ分からないことがありましたどうぞ送ってください。なるべく全部お答えできるようにしたいと思います。



## 五十三話 歪む感情（前書き）

前回のグローリアの詠唱はドイツ語です。一応翻訳をつかって書きましたがもし間違いがあれば出来れば教えてください。もしかしたら英語で統一するかもしれません。あとグローリアは「栄光」と言う意味です。

## 五十三話 歪む感情

「縛」

グローリアが俺に飛び掛ろうとした瞬間俺の背後から声が聞こえた。

「・・・間に合って良かった。」

俺が顔だけを向けるとそこにはピアノ線を出現させている一人の少年が立っていた。

「・・・くよ、う・・・。」

見ればグローリアは無数のピアノ線によって動きを封じられていた。

「よくもよくもよくもヨクモヨクモヨクモヨクモヨクモヨクモオオオオオオオオオオオオ！！！！」

グローリアは視線で殺せるほどの迫力で黒曜を睨みつける。

「・・・プツン・・・プツン・・・」

グローリアは黒曜のピアノ線をちぎり脱出しようとしていた。

「束」

しかし黒曜はそれを許さずに四肢を拘束する。

「封」

その言葉と共にピアノ線がグローリアに巻きついていく。やがてグローリアはピアノ線によって繭の様な姿にされた。

「…………もうすぐ二人も来るから。それまでは時間を稼ぐよ。」

見ると黒曜の額には大粒の汗が浮かんでいた。恐らく黒曜も分かっているのだろう。今の俺たちでは時間稼ぎすら難しいということを…………

「…………ぐ…………つ…………つ…………。」

俺は動かない体に鞭を打ち立ち上がる。

「…………ハア…………ハア…………。」

俺は剣を支えにして黒曜の隣に立つ。

「…………づ…………黒曜。」

「……………何だい？」

「…………俺を…………使え。」

「……………。」

「波…………長が…………合えば…………問題ない、だろ？」

「…………分かった。」

黒曜はそう言っていると俺にピアノ線を付ける。すると立っているのがやつとだった俺の体は何かにつ張られるように立ち上がる。

「・・・波長・・・問題なし。ある程度の自由はあるから判断はユーに任せるよ。」

「・・・あ、あ。」

俺は目の前にいるピアノ線の繭を見る。それはもう殆どが引きちぎられ、グローリアが出てこようとしていた。

「音」

「奏者の音色」

黒曜はそう呟くすると俺の体に魔力が供給される。

「行くよ!!」

その声と共に俺は黒曜に動かされグローリアへと駆ける。

「・・・っ!!」

俺は抜け出そうとしているグローリアに剣を振り下ろす。

「無・・・駄。」

そのひと振りをグローリアは片手で受け止める。

「っ・・・おお、狂・・・兎。」

俺は狂兎の力によってグローリアの感覚を狂わす。その瞬間、ほんの僅か数秒ではあるが確かにグローリアの力が弱まった。

「才サ才サ才サ才サ才サ才サ才サ！」

俺はその隙を逃さずに一撃を叩き込む。グローリアはその一撃により僅かに体制を崩す。斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る斬る。俺は只管にグローリアを斬り続ける。

⌈  
•  
•  
!  
!  
⌋

それに耐えられず俺の体から血が流れ出る。・・・もう痛みも感じないんだ。気にする必要などない！！

俺は剣に魔力を集中させていく……。まだまだ、まだ掻き集めろ俺の全魔力を集中させろ!!!

「がっ、アアアアアアアアアア！！！！！」

俺は剣を振りかぶりグローリア目掛けて今出せる渾身の一撃を叩き込む。

「  
・  
・  
ガア  
・  
・  
!!!  
」

グローリアが小さく呻く。だが俺は全ての魔力を使い切ったことによつて満身創痍になっていた。足に力を込めても立ち上がれず、黒曜を見ると黒曜もまた全魔力を俺に捧げたからか息が荒くなっている。

「……ナンデ、ドウシテ？ドウシテコバムノ？ナンデ？ナンデ

ナンデナンデナンデナンデナンデナンデ！！！！」

「……………な……！！？」

確かにグローリアは傷ついていた。だがその傷は瞬く間に再生し立ち上がる。

「ナンデ？ナンデ？」

グローリアが少しずつ近付いてくる。

くそっ！！もう俺たちは動けねえってのに！！！！

グローリアの指が俺の眼球を挟ろうと迫る。

「Red Devil！！！！」

しかしその指は俺に触れることなく紅い何かによって両断される。それは翼だった。紅い翼、それは彼女を示す最強にして不屈の翼。

「大丈夫！！？」

上空を見るとアリスと教授、そしてフィーナがいた。

「フィーナ！！」

再生するグローリアを見てアリスは妹の名を呼ぶ。フィーナはすでに両手をグローリアに向けていた。

「壊れた玩具の心臓！！！！！！」  
ブローケン・コア・マインド

フィーナは何かを握りつぶす。するとグローリアの体は一瞬で肉塊

に変わる。

「お前たち!!」

その間に傍に移動してきていた教授が俺達を運ぶ。

「しっかりしろ二人とも!!?」

「教・・・授。」

「喋るな!!黒曜はまだどうにかなるが、お前は血を流しすぎだ!!」

「い、いから。魔・・・力を、回・・・復させ・・・て、くれ。」

「馬鹿なことを言うな!!」

教授は叫ぶが俺の意思が変わらないことを知ると、溜息を吐いて懷から一つの液体を取り出し栓を抜き取る。

「回復薬だ。こいつは使用者の魔力を回復させ、傷も癒す・・・だが」

「代償にお前は暫く魔術が使えなくなる。」

「・・・か、まわねえ。そ・・・れをく・・・れ。」

俺がそう言つと教授は無言で俺に液体を飲ませる。

「・・・!?!」

その液体を飲むとドクン、ドクンと心臓が大きく脈動するのが伝わってくる。それと同時に体を焼き尽くすような痛みが俺を襲う。

「・・・ぐ！オオオオオオオオ！！！」

だが確かに俺の傷は治り、魔力は回復していた。やがて痛みが消え俺は傷が癒えたのを確認すると立ち上がる。血が足りないがそれは魔術で無理やり補えばいい！。俺は立ち上がると二人のいる場所を見る。そこではあの二人を前にしても圧倒しているグローリアの姿が見えた。

「・・・根源化。」

幾ら二人といへども獣、それも根源化が相手じゃ厳しいか・・・。  
俺は体内を流れる魔力を集中させる。俺の根源化は本来七疋全てが揃わなければ発動できない。・・・だが

「・・・ぐっ・・・！！！」

俺は五疋の獣を無理やり円環に繋ぐ。

「オオオオオオオオオオオオ！！！！！！！」

確かに以前はこんなことは出来なかっただがそれは今の俺ではない。限界なんて破壊しろ！！既存の常識なんて知るものか！！常に俺は今を超えていくだけだ！！！！

俺の全身を影が覆っていく。それはやがて俺の全身を黒く染め影の化け物へと変わる。



「Overture end

終末序曲

」

五正という不完全な状態だが根源化は成功した。確かに七正より遙かに劣り本来の力を出すことなんて出来ないが十分だ。・・・ならば！！

俺は力を確認すると目の前で繰り広げられている戦闘へと飛び込んでいった。

## 五十三話 歪む感情（後書き）

前回と比べるとだいぶ短いですね。でもまあ次回は長くなると思うのでこれぐらいがちょうどいい・・・ですかね？

## 五十四話 白薔薇と魔獣

side 三人称

「・・・邪魔をするな！！！」

グローリアは目の前にいる吸血鬼の姉妹に叫ぶ。

「吹き飛びなさい！！」

アリスはグローリアへと翼を振るう。しかしその一撃をグローリアは片手で受け止めた。

「壊れた玩具の心臓！！！」  
ブローケン・コア・マインド

フィーナは両手を向けると翼を受け止めている右手を壊す。それによつて受け止められていた翼はグローリアを吹き飛ばす。・・・だが

「虫が・・・僕の邪魔をするなあ！！！」

無防備で受ければ夢現ですら只では済まない一撃を食らったというのにグローリアは何事もなかったかのように立ち上がる。壊された右手も一瞬で再生する。

「化け物ね・・・。」

圧倒的再生能力、圧倒的魔力量、そして圧倒的な力。

「・・・夢現と同じね。」

夢現もまた再生能力は劣るものの目の前にいるグローリアと通じるものがある。

「どうするのお姉さま？」

フィーナもこのままでは埒があかないと考えアリスの元に来る。

「・・・・・・・・。」

正直このままではジリ貧だ。アリスは何か手はないかと考える。

「邪魔なんだよ。」

しかしグローリアが待つてくれるはずも無くアリスの背後へ回り殴りつける。

「ぐっ!!！」

その一撃でアリスは吹き飛ばされる。グローリアは倒れているアリスに止めを刺さんと迫る。

「っ!!！」

アリスはやがてくるであろう衝撃に目を瞑る。

「・・・・・・・・?」

だがその衝撃はいつまで経ってもこないアリスは疑問に思い目を開

けた。

「・・・待たせたな。」

そこには全身を黒い影で覆われたユーヘルトが立っていた。ユーヘルトは受け止めているグローリアの腕をへし折りその体に拳を叩きつけた。その一撃にグローリアは体をくの字に曲げて吹き飛ぶ。

「ああ、来てくれた。・・・さあ、僕と一つになろう。」

吹き飛ばされたグローリアは立ち上がると笑いながらユーヘルトへと駆ける。先程までなら対応することも出来ずに嬲られていただろう。だが不完全とはいえ根源化したユーヘルトはその一撃を受け止める。

「・・・っ。」

だがその一撃を受け止めたユーヘルトは苦悶の表情を浮かべる。やはり不完全な根源化ではグローリアの一撃を完全に受け止めることは出来ないと判断したユーヘルトはグローリアを弾き飛ばすと影を放ち追撃する。放たれた影はグローリアを貫き地に縫いつける。

「オ`オ`オ`オ`オ`オ`オ`!!!」

ユーヘルトは獣の様な声を上げながらグローリアに馬乗りになると拳を振るい続ける。長引けば地力で押されるのは必然、ならば・・・！！

「ココデ喰イツクス!!!!」

ユーヘルトは何度も、何度も拳を振り落とす。たとえ直ぐ様再生しようとも何度でも喰らう。ユーヘルトは只只管に拳を振り落とした。

「……っ……ぐ、**ガア**！！！」

グロリアはその拳の嵐の中で癡猛に笑う。それは正しく獣の笑だった。グロリアは拳の中、俺に攻撃を繰り返してくる。

「くくく、力力力、キヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！」

「オオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

二足の獣が叫ぶ自らの為には一方は一つになろうと一方は喰らい殺そうと……。

拘束から無理やり抜け出したグローリアは一度距離を取る。

「...!!」

その瞬間グローリアの姿が消えると共にユーヘルトに走る激痛。

「ガ、ア、ア、ア、ア、！」

ユーヘルトはその激痛を無視して拳を振るう。姿は見えない、気配もわからない、それは歴戦の勘と予測によつて放った一撃。今まで、全ての運命で戦い続けたユーヘルトの記憶による一撃。その拳は確かにグローリアを捉えた。

「才  
才  
才  
才  
才  
才  
才  
才  
!!!」

ユーヘルトの声と共に唸りを上げる拳。それはグローリアの胸部を

貫き喰らっていく。

まだだ、この程度で殺せる相手じゃない!!

ユーヘルトは紡ぐ奴を殺さんとする一撃を

ヘル・ブレイズ・

蹂躪せし……」

徐々に高まっていく魔力。それに呼応するように影が溢れ出ていく

タイラント

「暴君!!!!!!」

その言葉と共に溢れ出た影は黒い閃光を伴いグローリアを呑み込んでいく。

「キ……ヒヒヒヒ……ヒ。」

閃光に吞まれて尚手を伸ばすグローリアだが彼女の手はユーヘルトに届くことなく消え失せる。

「……………」

ユーヘルトはその光景を見届ける。……

「……………何度でも来やがれ。」

「何度来ても俺はテメエを殺す。……………どれだけテメエが追い掛けてこようと俺はテメエから逃げ切つてやる。」

ユーヘルトの言葉と共に彼を覆っていた影が消え失せる。

「……………」

そしてユーヘルトは意識を失った。

誰もいなくなった夜の世界。そこに白い髪をもった少女が現れる。

[illegible]

少女は白い髪を揺らしながら血溜まりに目を向ける。

「  
・  
・  
・  
・  
ああ。  
」

少女はそれを見て大きく口を開け笑う。

[illegible]

「……白騎士。」

背後から男の声が聞こえる。少女は笑いながら後ろを向く。

「  
・  
・  
・  
夢現。  
」

「呼ばれない役者が……俺の舞台に上がるんじゃないやねえ!!!」

その言葉と共に夢現から溢れ出る力の奔流。それは大気を震わし世



界を揺らしているように感じられた。

「ヒヒヒ、道化師が……。お前に……。あの人は渡さない。」

少女、グローリアが立ち上がる。

「魔獣……。白騎士……。道化師……。」

「……………」

「ヒヒ、絶望したんだろう……。」

「……だからお前は世界をあるべき姿に戻す。」

「……。グローリア。テメエ舞台袖で指くわえてみてろやあ……！」

その言葉と共に二人はぶつかり合った。世界を揺るがす二つの力が……。

## 五十四話 白薔薇と魔獣（後書き）

グローリアはここで殺す気ありません。結構重要な人なんで・・。  
そして夢現とグローリアの激突です。ただ戦闘描写はありません・  
…たぶん。

## 五十五話 二人が視るもの

side ユーヘルト

「・・・・・・・・・・。」

俺はベッドの上で目を覚ます。何故此处にいるのか。そう思ったと同時に昨夜の記憶が蘇る。

「そうか・・・グローリアと戦って・・・。」

気を失ったのか。ユーヘルトはそれを思い出すとベッドから起き上がりドアを開ける。

「あら、お目覚めね。」

「おはよう。」

「いい夢を見れたか。」

「大丈夫？」

そこには椅子に座りテーブルの上で談笑している四人の姿があった。とても昨日の雰囲気とはかけ離れている光景にユーヘルトは少しだけたじろいだ。

「・・・・・・・・おはよう。」

ユーヘルトは普段通りの調子で言い空いてる椅子に座る。

「……あの後どうなった？」

その言葉に四人は真剣な表情になる。

「大変だったわよ。」

「全くだ。お前と黒曜は全身ボロボロ、魔力は枯渇してるしお前は獣との無理矢理の同化で相当負担が掛かってる。」

「要するに無茶しすぎってことだね。」

その言葉に俺は思わず苦笑する。だがそれだけの代償を払ってようやく戦える相手だったということだろう。

「……なあ教授。」

魔術は使えない。……そのはずだ。だが……

「何か獣の力使えるんだけど……。」

「は？」

その言葉に口をぽかんと開け間抜けな顔をする教授。

「いや、だか」「ちよつと来い!!」

俺が再び言おうとすると教授によって連れてかれる。

「どういうことだ!! 確かにあれは使用者の魔力を封じるものだぞ

「！！？」

俺に詰め寄る教授。俺はそれを何とか宥めようとする。

「いや、ちょ、落ち着けつて。俺にも良く分かんねえんだから！」

「そうだ、落ち着け。取り敢えずまずは体をメスで切つて……。」

「全然落ち着いてねえよ！？俺に何する気だお前！！？」

やばい、主に此奴の頭がやばいことになってる！！

俺はメスを持つて近づいてくる教授から逃げ出す。あんなのと戦いたくなんてない！！！！

俺は一心不乱に走り出し教授の魔の手から逃げていった。

「……あゝ戻りたくねえ。」

俺はロンドンの街中を歩いてる。途中、昨夜戦闘があつた場所により戦闘の痕跡も消しておいた。

ほんとなんで魔術が使えるかなあ……。

俺はそれを疑問に思いながらもあの双子のいる場所に向かう。

「……………マジ半端ねえ。」

そこは相変わらずの人、人、人、良くあそこまで列んでられるな。

俺はもう驚きを超え呆れていた。

「・・・・・・・・。」

俺は念の為に周囲を警戒する。自分でも用心しすぎだと思わなくもないが念には念をだ。実際グローリアがああの程度で死ぬはずがない。奴は絶対に生きている。

「・・・・・・・・ハア。」

一応視認できないが薄く魔力で障壁を張っておく。少し心許無いが今はひと目もあるしこれが限界だろう。

「しかしむず痒いな。」

なるべく犠牲にしたいくないが、本人が否定したら成功なんてしないだろうし・・・・・・・・。

「本当に面倒臭い。」

どうするかなあ・・・・・・・・。とりあえず・・・

「俺も列ぶか。」

会ったこともない奴から力を寄越せと言われるより客として会ったことのある奴の方が幾分かましだろう。・・・本人が覚えているかどうかだ。

「視蟲は心も読めるんだよな。」

読まねければいいがもし読まれたら色々不味い。とりあえず狂鬼を使って心を微妙に狂わしとくかな・・・。  
俺はそう考え行列の最後尾へと歩きだした。

「多過ぎだろう・・・。」

そう愚痴った俺は決して悪くはないはずだ。回ってくるまで三時間以上ってどういうことだよ。おかしいだろ。ここは遊園地じゃねえんだぞ。

ようやく順番が回ってきたと俺は内心で溜息を吐く。

「次の人どうぞ。」

その言葉に俺は少女の目の前に座る。

「何を占いましょうか？」

「・・・そうだなあ。」

「とりあえずこれからの事を占ってくれ。」

俺はそう少女に言う。少女は一度目を瞑ると俺を見た。その目には確かに獣の力が宿っている。

「っ!?!?」

俺を見た少女は目を見開き顔を強ばらせた。……一体何が見えた？

俺はそう思いながらも冷静な表情で座っている。隣にいる少年もこんなことは初めてなのだろう。首を傾げている。少女は暫く呆然といった表情だったがやがてハツとすると普段通りの表情に戻る。

「……貴方はやがて災厄に見舞われるでしょう。」

……災厄ね。既に見舞われてます。

「……終わったらまた来てください（ボソッ）」

「……。。。」

俺は少女の声を聞き僅かに頷きながら立ち上がる。どうやら他にも色々あるみたいだな。

俺は列んでいる人数を確認してその場から立ち去った。

夜、あれだけ列んでいた行列もなくなったのを確認した俺は双子のもとへ向かっていた。二人は道具などを片付けていた。

「昼間ぶり……か。」

「はい。お越しいただいて有難うございます。」



俺に気づいた二人は頭を下げる。

「いや、別にいいよ。俺も君達に用事あるし。」

「そうですか。ではそれも含めてお話を・・・。」

「では、こちらです。」

少女の言葉と共に少年が俺を案内する。

「何時ぐらいから占いをやってるんだ？」

俺は前を歩く少年に尋ねる。少年は人懐こい笑顔を浮かべて言った。

「一年ぐらい前からです。それまではそんなに力は持っていませんでしたから。」

「一年前か・・・。」

「ええ、最初はそこまでお客さんもいませんでした。それからよく当たるって評判になって・・・。」

「それであれか・・・。」

「ええ。」

あの行列を思い出したのだろう少年は苦笑する。

「ここです。」

やがて少年に案内されて着いたのは喫茶店だった。

「この店長さんが昔から僕たちに良くしてくれて、今では僕達の家です。」

少年はそう言つて扉を開ける。来店を知らせる鈴の音を聞こえたのだろう一人の男性が奥から出てきた。

「店長です。」

そう言つて少年はお辞儀をする。俺もそれに倣いお辞儀をした。すると男性は優しそうな笑みを浮かべながらお辞儀をする。……うん、良い人だ。

「もう少ししたら、姉も来ると思いますので……。」

「ああ、問題ない。」

「……あの。」

俺が店内を見回していると少年が俺に上目遣いで尋ねる。

「……その、姉があんな表情をすることは余りなくて……ましてや人を呼ぶなんて見たことがないので……えっと……。」

ああ、少年が何が言いたいのか分かった。要するに心配なのだろう普段そんな顔を見せないから俺なら何か知っているのではないかと。

「……少し君達に関わることだと思つよ。」

「……………」

少年はその言葉に首を傾げる。それを見た俺は苦笑した。

「まあ、お姉さんが来てからで……………」

その後も幾つか尋ねたり尋ねられたりを繰り返しているうちに少年の姉がやって来た。

「御待たせして済みません。」

少女は謝罪をする。

「いや、いいよ。こっちも彼と話すのはなかなか楽しかったからね。」

「そう言ってもらえると幸いです。」

少女はそう言って笑う。だがその笑も束の間彼女は直ぐに真剣味を帯びた表情になる。

「では……………占いのことについてです。」

「……………ああ。」

「率直にいます。余り分からないのです。」

「……………分からない?」

視蟲の能力を持っているのか？

「・・・最初はわかるのです。ですが途中からノイズ音と共に運命がぶれて見えないのです。」

「・・・・・・・・・・。」

「貴方は私たちに用があるとおっしゃいましたよね？」

「ああ。」

「大体予想は付きますが。一つお聞きしても宜しいでしょうか。」

「・・・・・・・・・・どうぞ。」

俺がそう言つと少女は少し間を置き言った。

「・・・貴方は私達の力が何なのか知っているのではありませんか？」

「・・・・・・・・まず最初に、君達に尋ねたいことがある。」

それを言う前には二人の気持ちを知らなくてはならない。

「・・・・・・・・もし」

「・・・・・・・・もうすぐその力によって君が死ぬとしたら・・・」

君達はどうする？

俺は問うこの運命で二人が視るものが何であるのかと思いながら。

## 五十六話 正体

夜、俺は帰宅する人々の中をアリス達四人を連れて歩いていた。向かう先はあの双子の元である。恐らくまだあの場所にいるだろう。何故こうなっているのかは昨夜、二人に決断を求めた時まで時間を遡らなくてはいけない。

「・・・し・・・ぬ・・・？」

隣にいる少年は信じられないように目は見開き唇は震えていた。そしてその言葉が向けられた本人は僅かに俯き表情は窺えない。

「・・・ああ。」

「君たちの質問の答えにもなるが・・・。その能力の源は獣と言つてな・・・。人々の恐怖、世界の悪として生み出される存在だ。」

まあ、俺は例外だが。恐らくグローリアも・・・。

「その力は圧倒的負の力なんだよ。使用者はいずれ意識を奪われ世界を破壊する・・・現に君の様に獣が宿っている者を見たことがあるが皆獣の力に飲まれていたよ。」

「・・・・・・・・・・。」

少年の顔は青ざめている。俺が無言になるとやがて少女は顔を上げる。

「・・・・・・・・なら、何故貴方は平気なのですか？」

「・・・・・・・・。」

「貴方も獣の筈です。なのに何故貴方は自我を失わずにいられるのですか？」

「・・・そうだな。これは俺の獣の能力にも関係はあるが。俺は動き続けてるから変わらないんだよ。」

「「？」」

二人はその意味が分からず首を傾げる。

「俺は円環を絶えず走っている。どれだけ俺が走ろうともその円環に終はない。故に・・・俺は飲まれない。」

少年は未だに首を傾げているが少女は何となく俺の言っている意味が分かったのか頷く。

「・・・・・・・・なるほど。」

「後は・・・俺自身が器でもあるから・・・だろうな。」

この繰り返す運命での俺が思い至った一つの結論。

「・・・獣は完全となることを望んでいる。俺を満たし一つの存在になることを・・・。」

簡単にいえば俺は生贄だ。獣が全て揃うためにに器である俺を生かし、やがてその時が来れば俺の自我を奪い完全なものとなる為の。

「・・・・・・・・・・。」

「さあ、俺は言った。聞こうか・・・君たちの決断を。」

俺は二人に問う。この回答次第で俺は二人を殺すことになるかもしれないのだから。

「・・・・・・・・姉さん。」

少年は自らの姉を見る。姉は弟である少年の顔を見て頷いた。

「私は・・・・・・・・」

「それにしても少しは私達に相談しても良かったんじゃないかしら？」

「全くだな。お前はもう少し後のことを考えるべきだ。」



「ホントだよね。だから皆に心配かけちゃうんだよ。」

三人の言葉に俺は言い返すことができなかった。  
このままだと只管責められそうだ。  
そう思った俺は黒曜を見る。

「・・・ごめん。これは庇いきれないや。」

黒曜は首を横に振り苦笑する。神は俺を見捨てた。・・・俺元神だ  
けどさ。

「・・・ま、まあ今回はどうにかなったから問題ない。」

俺の言葉に三人は呆れたように溜息を吐き黒曜は困ったような顔をする。

・・・そこまで酷いのか俺は。  
少しだけ俺の心が傷ついた。

やがて歩いていると俺達は二人がいる通りに出た。周囲を見回して  
いると目的の人物である二人は直ぐに見つかった。恐らく常連の客  
達から貰ったのだろう二人は手に花束を持っていた。俺に気付いた  
二人は此方に向かってくる。

「「こんばんわ。」」

「ああ、こんばんわ。」

俺は二人に挨拶をする。

「・・・お連れの方は。」

「ああ、右から順に、アリス、フィーナ、教授、黒曜だ。」

俺は後ろにいる四人を紹介する。

「初めまして、こんばんわ。」

「同じく初めましてとこんばんわ。よろしくね。」

「初めましてだ。」

「初めまして、二人とも礼儀正しいね。」

四人はそれぞれ挨拶をする。

「四人とも俺の仲間だ。」

「どうも初めまして、アンナ・ファルシュレイです。此の度は済みません。」

「初めましてジル・ファルシュレイです。姉をよろしく願いします。」

そう二人は選んだのだ。

「私は、この力を貴方に渡しましょう。」

少女は家族と共に生きる道を選んだ。俺はそれを聞き肩の力を抜く。

・・・良かった殺さずにすんだ。

もし彼女がこれを断つたら俺は無理矢理にでも獣を奪わなくてはならなかった。しかし・・・

「よく俺が獣の力が欲しいと分かったな。」

「少し心に出てました。」

あゝなるほど。視蟲で見えたのか。流石といったところか、しかし獣を其処まで扱えるとはな・・・

「それじゃあ名乗っておくか。初めまして、ユーヘルト・ヴァーミリオンだ。」

俺が笑いながら手を出すと二人も笑って手を差し出し言う。

「初めまして、アンナ・ファルシュレイです。」

「初めまして、ジル・ファルシュレイです。」

俺達は握手をし再び笑った。

あの後暫くお茶をしている内に俺達はだいぶ仲良くなっていた。

「それじゃ、始めますか。」

立ち話も程々にし俺はそう言ってアンナを見る。アンナも俺を見て

頷く。

「はい、お願いします。」

「・・・・・・・・・・。」

俺は目を瞑り影をアンナに纏わせる。アンナも最初力んでいたが大丈夫だと分かると影に身を任せる。俺達ただは無言で目を瞑る。

「・・・・・・・・・・。」

アンナに纏わせている影を操り徐々に彼女の体内なかにいる獣を引きずり出していく。

・・・・・・・・見つけた。・・・・・・・・少しずつ、少しずつ

獣を捉えた俺はアンナに負担が無いよう慎重に影を操る。

・・・・・・・・きた!!

やがてあと少しで獣が引きずり出せるところまでもってきた。

あと少し・・・・・・・・。

俺はそう思い最後の作業に移った。それはその時起こった。

・・・・・・・・ザシュ。

何かが肉に刺さる音それと共に俺に飛び散る血。俺はその光景に思考が追いつかなかった。

・・・・・・・・は？何故、何時の間に・・・・

様々な憶測が俺の中を飛び交う。そして俺の目に写ったのは一つの十字剣。

これは・・・・・・・・。

「ね・・・・・・・・え、さん？」

ジルもそう呟くことしか出来なかった。それはそうだろう先程まで元気な姿でいた彼女が今は一本の十字剣に刺され赤い液体を流しているのだから。

「・・・か・・・っは・・・。」

アンナが声を上げる。その声は俺の意識をハッキリとさせた。

「アンナ!!」

俺は彼女に迫っていた十字剣を弾くきその持ち主を睨む。

「マリア・ローズ。」

アリスが呟く。立ち並ぶレンガ式の家の屋根。そこには長い銀髪を揺らし修道服を着た一人のシスターがいた。彼女が地上に降りると共に世界から先程までいた人々は消える。  
これは・・・。

「・・・結界。」

「姉さん!しっかりして姉さん!!?」

ジルが姉を呼ぶ。俺は後ろを振り向くと共に彼に放たれていた剣を弾きその人物に剣を構える。

「・・・Eve。」

「・・・。」

彼女、Eveは変わらず無言のまま立っていた。

「しっかり、しっかりして!! ねえ・目を開けてよあ・・・。」

少年が涙を流すと共に膨れがっていく気配。

・・・これは?

俺はジルを見る。ジルは姉を地面にそつと寝かせ立ち上がった。

「何で・・・何で姉さんが・・・。」

彼から感じられていた力が今までのものより遥かに強大なものになっている。

・・・まさか、今まで感じていたものは。

俺がその力に思い当たると同時に彼に変化が起こった。

「壊れちゃえ・・・姉さんを殺した世界なんて全部壊れてしまえー  
—————!!!!!!」

突如ジルの背後に出現する上半身だけの光の巨人。それはジルを守るかのように出現すると周囲を薙ぎ払う。

「・・・っ!?!」

俺は急いでジルから離れる。ジルは俺を見たまま動きを止める。

「・・・・・・・・・・獣。」

俺はその姿を見て確信する。

「・・・・・・・・秩序の力。」

世界のバランスをとるために生まれる存在。それは善悪を関係なく滅ぼす力。だが・・・

「・・・壊す。」

世界の敵である獣が目の前にいて見逃すはずがない。

「・・・・・・・・。」

前方には秩序の力を持ったジル。後ろには無数の剣を展開するEve。

「・・・・・・・・やべえな。」

見れば四人も召喚された魔導兵器とマリアの相手で身動きが取れない状態にある。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・壊れる。」

その言葉と共に巨人の拳と無数の剣が俺へと放たれた。

## 五十六話 正体（後書き）

五十六話でした。さあ次回は彼女の出番だ頑張ろう。面白く読んでもらいお気に入りも増えるよう頑張って書いていきますがどうでしょう。11月か・・・あと一ヶ月弱でリア充爆発しろの日・・・。  
今年も一人パソコンの前ですかね。



## 五十七話目 視蟲

side ユーヘルト

俺に迫る拳と無数の剣。俺は周囲に影を張る。

「っ!!……………ああ!」

だが巨人の拳と青白い燐光を放つ剣は一瞬だけ止まり突破する。俺は前後からくる二つの衝撃に襲われながらも走り出した。俺は巨人へと駆け、大きく跳躍し巨人をの背後に着地する。そして俺に放たれていた剣は全て巨人へと直撃した。その衝撃に巨人は僅かに動きを止める。俺はその隙を逃さずに駆けていく。

「アンナ!」

俺は彼女を抱き抱えると再び大きく跳び周囲の家の屋根に着地する。

「しっかりしろ!」

獣が外に出てこないということはアンナはまだ生きている筈だ!

俺は腕の中にいるアンナを軽く揺らす。するとアンナは口から血を流しながら目を開ける。

「待ってる!今傷を治してやる!!」

俺はそう言つとアンナに触れ影を発動させる。

「……………待つ……………て……………だ、さい。」

だが、アンナは俺の手を掴み止めた。

「・・・お願い・・・しま、す。・・・私、ごと・・・視・・・蟲を喰らって・・・くだ、さい。」

「何言つてやがる!!」

「・・・救いたい・・・です。・・・あの子・・・を救いたい・・・んです。」

「だつたら!!」

「・・・あの子は・・・もう戻れない。あの子に・・・は私、しか・・・いないん・・・です。」

「・・・。」

「・・・お願い・・・いです。」

「・・・分かった。」

俺は彼女に影を発動させる。

「ありがとう。」

アンナは微笑むと共に影へと消えた。

「・・・。」

立ち上がった俺が見たのはたった一人の家族を奪われた一人の少年とまるで機械の様に生きる少女。

「壊れるお！！！」

少年が叫ぶと共に向かってくる巨人。

「やるぞ視蟲！いや、アンナ！！あいつを救うぞ！！！」

俺の言葉と同時に俺の瞳には巨人が迫ってくる軌道が映る。視蟲、その能力は全てを視ること。それは未来のことであっても変わりない。俺は迫り来る巨人を躲す。だが躲した瞬間に俺は周囲を剣で包囲される。

「インフェルノ！」

俺は影を飛ばし向かってくる剣を弾く。剣を弾いた俺に巨人は間髪を入れず迫り来る拳。

「ちっ！！！」

俺は放たれた拳を腕に纏わせた影で防ぐ。

「嘗めんじゃねえ！！！」

俺は拳を上へ弾きながら空きになった胴へと影を纏わせた拳で殴りつける。巨人はその衝撃に耐えられず僅かに浮き上がる。

「あああああああ！！！！！」

だがジルは空中で巨人を動かし俺を薙ぎ払う。俺はそれを背後に跳び躲す。

「・・・聖者の剣。」

俺が背後に着地すると共に空から青白い燐光を放ちながら一本の巨大な剣が落とされる。

「第0拘束術式開放 輪廻の蛇 完全起動」

「オオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

その言葉と共に俺の髪は黒く染まり瞳の紅もより深くなる。俺は迫り来る剣を影を伸ばし迎撃する。影と剣は両者ともに拮抗しぶつかり合う音が響く。

「滅せよ。」

俺が剣に集中させているとジルの巨人が力を集中しているのを感じる。見れば巨人は量の掌の間に光球が出来ていた。

「まずっ！」

俺は視<sup>アンナ</sup>蟲でジルの行うことを視ると剣に向かわせている影に力を込め剣を破壊する。

「災厄よ。」

その瞬間巨人から光球が放たれる。俺はそれから逃れる為全力でその場から離れる。

「覇」

ジルの言葉と共に光球は膨れ上がり爆発する。

「絶狼！」

逃れることは無理だと判断した俺は絶狼で周囲を黒い閃光と影によって爆発から身を守る。そして感じる爆発の衝撃。絶狼はその衝撃を食らい僅かだが崩れる。

「あるべき秩序」  
オーダー・ワン

そして追撃するようにEveから光が放たれる。それは崩れていた絶狼を完全に破壊し影を突き破った。

「……っ！」

それを見ていた俺は前へと出て光を躲す。背後で光がぶつかる音が聞こえるが俺はそれを無視して巨人へと飛び掛る。巨人は俺を殴ろうとするが俺はそれを空中に方陣を展開させ躲し巨人に出現させた剣を振り下ろす。

「……!?」

巨人は痛みを訴えるように何かを叫ぶが俺はそれを無視して更に切り込む。

「神雷」

だが剣を振りかぶった俺に雷撃が飛ぶ。それは俺の足元に直撃し土煙で俺の視界が奪われる。

「こんなもので！」

俺は視蟲で視る。そして俺に再び放たれた聖者の剣を俺は剣で防ぐ。剣と剣、ぶつかり合う二本の剣の間には火花が散り激しくぶつかり合う音が聞こえる。

「壊れる。」

だが向かってくる剣に集中し巨人を視ていなかった俺は背後から迫り来ることに気付かず巨人の接近を許してしまう。それに気付いた俺は片手を巨人に向け影を纏わせた腕で防ぐ。

「・・・おおっ！！！！」

左右からの挟撃によって俺は徐々に押されていく。二人から感じる力はより強くなり、より重くなっていく。俺はその力に押しつぶされる。

「・・・認めるか。」

彼女と約束したんだよ！彼を救うと！！  
アンナ

俺は六足の獣の力を全て両腕へと流す。だが二人はそれを超える勢いで力を集中させる。

「ぐおおおおっ！！！！」

このままじゃ・・・！！

俺が二人に殺される。それはその時に起こった。それは雷だった。いや、光だった。その光はこの結界に力尽で侵入し周囲を破壊しながら俺達に向かってくる。

・・・こんな時に!!

その力の正体を理解した俺の心は絶望で染まる。だがその光はもう目の前に迫ってきていた。

「くっそおおおおお!!」

その光は俺達を呑み込んだ。

side 三人称

「・・・白騎士。」

マリアは屋根の上から結界に侵入した光の人物の名を口にする。

「（再び神の邪魔をするか・・・可能であれば始末しろと仰せつかったが・・・）」

マリアはその手に持った十字剣を力強く握る。そうでなければあの光にいる者の恐怖に呑まれそうだったからだ。

「Red Devil!!」

マリアは背後から聞こえた声に意識を戻し十字剣を投げつける。

ガキイイン！！

その剣は紅い翼とぶつかる。

「……吸血鬼。」

「死になさい聖職者。」

二人は睨み合うと一瞬にしてお互いを殺さんと剣と翼をぶつけ合う。

「やっぱり貴方とは決着をつけないといけないよね。」

「何時も邪魔ばかりをして……。」

夜空の中を金と銀がぶつかり合う金が紅い翼を振るえば銀が剣で受け流す。銀が剣を飛ばせば金は紅い翼で打ち落とす。二つは互角の勝負を繰り広げていた。

「塵へと還れ。」

「磔にされなさい。」

二人の言葉と共に高ぶる魔力。それは結界を揺らしなおも高まっていく。そして二つの影は交錯した。



side 三人称

「・・・・・・・・がつ。」

五分。瓦礫の中に埋もれたユーヘルトが動き出すことが出来るのに掛かった時間だ。あの光はそこにいた三人を吹き飛ばし周囲にあったものをすべて破壊した。直撃でなくともそれを食らい五分で動けるようになったのも異常だが、それ以上にユーヘルトは不可解だった。

「（あいつが襲ってこない？）」

あの光が自らの予想した者であればこれほどの絶好の機会を逃すはずがない。いや例え動けたとしても襲ってくるだろう。だから不可解だった。何故襲ってこないのか。

「・・・・・・・・つう。」

ユーヘルトは瓦礫をどかし起き上がる。そして見たのは焼け焦げた大地と燃え広がる業火。さながらそれは世界の終わりのようであった。

「・・・・・・・・。」

ユーヘルトは傷だらけの体を引き摺り歩いていく。やがて何かが破壊する音が聞こえると共にその音が何なのか分かった。そこにはあの光と巨人が戦っていた。そして光の正体はやはり・・・

「・・・グローリア。」

ユーヘルトは呟く。グローリアは自らを根源化させ巨人に挑む。巨人もまた根源化したグローリアを最優先破壊対象と認識したのかグローリアのみに集中している。

「・・・・・・・・つ。」

ユーヘルトは背後に飛び退く。その瞬間先程までユーヘルトがいた場所に剣が突き刺さる。俺はその剣を放った人物を見る。その人物は屋根から飛び降り無数の剣を展開する。

「Eve。」

ユーヘルトはその人物を見て呟くと共に影を出現させる。夜はまだ始まったばかりだった。

## 五十七話目 視蟲（後書き）

書き方が話によって異なっていますがそれはこれからの書き方を考えてのものなのでご了承ください。

この章が終わったら一気にキャラ紹介したいと思います。その時には細かく設定を公開したいと思います。恐らくキャラ紹介で二話分くらいあるかと・・・。

## 五十八話 その心に抱くもの（前書き）

書き方だいが変えてみました。あと今体調が優れていないのでそこまで長くなく、自分で何を書いているのかよくわかっていません。あとで後で書き直して再び投稿しようと思います。

復活。書き直しました。

## 五十八話 その心に抱くもの

side 三人称

「オオオッ                    !!」

ユーヘルトは影を放つと共に Eve へと駆ける。対する Eve は展開されている剣を放ち影を霧散させ向かってくるユーヘルトへと迎撃のため放つ。

「                   つ」

だが向かってくる剣を前にしてもユーヘルトはその足を止めることなく前へと出る。その体を剣の群れが飲み込むがその全てをユーヘルトは紙一重で躲けていく。それを見た Eve はこれ以上の接近を危険と判断したのか巨大な十字剣を上空に出現させる。その数実に三十、その全ての剣の切先が目の前にいるユーヘルトに向けられる。

「暴蝶。」

ユーヘルトはその剣の出現を確認すると漆黒の蝶達を呼び出し十字剣へと向かわせる。激突する銀の刃と黒き蝶。それは互いを喰らい合いながら空を染めていく。

「死鴉。」

その光景をみてユーヘルトはもう一疋の獣を呼び出す。それは巨大な一羽の鴉だった。その鴉は呼び出されると共に剣の群れへと飛んでいく。鴉が剣の群れを通り過ぎていく度に碎け、朽ちていく剣。

だがそれでも剣は止まることなく逆にその数を増やし加速していく。徐々に鴉の体へと突き刺さっていく剣。やがてそれは鴉を被い地へと落とした。だが鴉が地へと落ちると共に蝶の群れは剣を押し返しその全てを破壊し消えていった。ユーヘルトはその光景を一瞥しながらもEveへと疾走する。

「喰らい尽せ。」

その言葉と共にEveへと向かう黒竜。それをEveは新たに出現させた剣で迎撃する。だが黒竜は向かってくる剣をもともせずEveへと疾走する。

「あるべき秩序。」  
オーダー・ワン

Eveは抑揚のない声で呟き目の前に迫る黒竜へ光を放つ。放たれた光は数多の剣をもともしなかった黒竜の鱗を一瞬で破壊しその体を焼き尽くしていく。黒竜は悲鳴を上げること出来ずにその体を焼かれていきやがて消えた。

「シッ  
！」

恐らくは黒竜の陰に隠れていたのだろう。黒竜が消えると共に現れたユーヘルトはEveの懷に潜り込むと右手に持つ剣を一閃。それはEveに致命傷を負わすことは出来なかったが装甲の一部を破壊していた。後退しようとするEveをユーヘルトは追撃していく。距離が近いがために得意の剣の群れを使えずEveは次々に装甲を破壊されていく。ユーヘルトが貫かんと剣の切っ先を向けた瞬間上空から巨大な十字剣が落とされる。それはEveが自らを巻き込んで放った苦肉の策。その剣は両者の間に落ち分断する。

「危険 対象への攻撃パターンを変更。」

ボロボロの姿になりながらもEveはそう言つて魔力を集中させる。するとEveの背後に一つの巨大な魔方陣が出現する。

「焼き尽くす劫火の剣。レーヴァテイン」

その言葉と共に背後の魔方陣から現れるのは刀身が炎で包まれた一本の剣。見ただけで分かる。それがどれ程のものであるのかを。ユ―ヘルトはその剣から感じる圧力に自然と右手に持つ剣を強く握り締める。

「 発射。」

それは放たれると共に一瞬にして世界を燃やす巨大な炎になりユ―ヘルトへと向かう。それをユ―ヘルトは魔力を集中させた剣を構え迎え撃つ。

「我が勝利が為に!!!」ワン・フォー・ワン

光を放つユ―ヘルトの剣。光り輝く剣と燃え滾る劫火の剣が衝突した瞬間巨大な火柱が出来る。それはユ―ヘルトとEveの二人を呑み込みさらに広がっていく。

辺り一面が赤く燃え焦げ臭い匂いがする火柱の中、そこに二人は立っていた。建物は燃え地面はクレーターのようになり中心は挟られている。周囲を漂う空気は高温とかし二人の喉を焼くような錯覚を感じるほどだった。逃げ場など何処にもない。周囲は全て世界を燃やす炎の壁、それは二人の体など一瞬で燃やし尽くし灰すら残さないだろう。二人は自らの魔力を高めていく。それは大気を揺るがし二人のいる空間すら歪める。

「  
破壊する銀冠」  
アリアンフロド

「  
始まりの剣」  
テンベスト

まるで月光のように輝き総てを破壊する魔力を放つ剣とまさに嵐のように猛々しく総てを巻き込んでいく魔力の奔流を感じさせる剣。それは互いに一步も譲らずに激突する。ぶつかり合うたびに激しく散る火花と陥没する地面。両者は崩れ燃えていく大地を力強く踏みしめ打ち合う、その力は弱まるどころかむしろ強まっていく。剣で迎撃し貫こうとする Eve と影で応戦し切り裂かんとする ユーヘルト。その二人の姿はまるで踊っているかのように見えた。やがてそこは濃厚な魔力に満たされ常人なら息をすることすら出来ないだろう。全力を尽くして殺し合う二人。だが変化が起きた。高まる魔力と共に展開される魔方阵。そこには先ほどと全く同じ剣が出現していた。

「焼き尽くす劫火の剣」  
レーヴァテイン

再び落とされる世界を焼き尽くす炎それは真下にいる ユーヘルトを逃さずに衝突した。

「オオオオオオオオオオオオオオオオ  
!!!!!!!!!!」

ユーヘルトは吠える。目の前にある炎を打ち破らんと。だがその炎は止まること無く ユーヘルトの剣を破壊し直撃する。

「ぐっ、ガッ……ハア!!!!!!?」

その剣はユーヘルトを燃やしつくす。まるでそれが ユーヘルトへの





その拳はEveの胸へと吸い込まれていき                      その心臓  
を貫いた。そしてその瞬間、Eveの体から眩い光が漏れだす。  
このまま決める！！

それはユーヘルトが自らが出せる全ての力を出した一撃だった。その  
衝撃によってEveの顔を覆っていた仮面が壊れ、剥がれ落ちる。  
今まで仮面が覆い隠していた顔。そこから此方を見ていたのは

「……久しぶり。」

彼女<sup>あまつき</sup>だった。その姿を見たユーヘルトは優しく微笑む。

「……ああ、久しぶり。」

その言葉と共に光は二人を呑み込んでいった。

## 五十八話 その心に抱くもの（後書き）

復活じゃー！ー！！まさかの今日も寝込むはめになるとは・・・  
恐ろしい。というわけで書き直しました五十八話。 Eve 天月。  
これは最初から決めていました。

それからアリアンフロドは女神の名前で意味は「銀の円盤」などといったものがあります。

## 五十九話 破壊する環と砕けた剣（前書き）

注意！！今回は前回五十八話の改訂版を先に読まないと恐らく話がわかりません。まだ読んでいない方は先に前回の話を見ることを御薦めします。

## 五十九話 破壊する環と砕けた剣

side 三人称

壊れた瓦礫の道をユーヘルトは走っていた。向かうのは未だに戦闘が続いている中央広場。一疋の獣と一体の秩序の巨人、それは戦火を広げながら互いに譲らず膠着状態に入っていた。いくら結界内とはいえこれ以上戦火が広がればそれは結界の外へも被害が出る。その最悪の未来を想像をしていながらユーヘルトの心は静かだった。ユーヘルトは自然と自らの右腕を見る。そこには切り落とされた腕の代わりに光沢を放つ黒い腕が付いていた。ユーヘルトはそれを見て微笑む。

「・・・頼むぞ。」

それに応えるかのように僅かに右腕が震えたような気がした。ユーヘルトはそれを感じつつ広場へと走っていった。

Eveから放たれた光に飲まれたユーヘルトが目を開けて見たのは何処までも広がる白い世界と一つの扉。いや、背後を見ると真後ろにもう一つ扉があった。ユーヘルトが目の前にある白い扉へ一歩進むと扉の前に光が集まりだしやがて一人の少女の形になった。長い銀髪、宝石を思わせる綺麗な碧眼。

・・・ああ、君は変わらないな。

ユーヘルトは一步步彼女へと近づいていく。

「・・・久しぶり、なのかな？」

「さあな、少なくとも俺とは初めましてだな。」

初めまして。そうこれはユーヘルトの出会った彼女おまじきではない。

「ありがとう。最初のユーヘルトにこの名をくれて。」

「どういたしまして。ただ、私としては最初の貴方と今の貴方は同じに感じるんだけどね。」

天月は苦笑する。そう最初、目の前にいるのは最初の運命で出会った彼女。だがその姿も口調もすべて彼女と同じであった。

「夢現か。」

「そう。彼が私を持ってきたの。」

「この世界は。」

「私の根源化によって創ったのよ。今私が望む間だけここは世界の時間から切り離された世界。」

「それが私の根源。」

彼女は笑った。ユーヘルトはそれを見て納得したのか頷く。

「なるほどな。」

「ねえ　　。」

天月は小さな声で言う。どこか縋るような期待するような声色で・・。

「ここで私と一緒にいようよ。」

「・・・・・・。」

「ここならずつといられる。ここなら私は貴方と一緒にいられる。」

天月はユーヘルトに抱きつき言う。だがユーヘルトの答えは

「駄目だ。」

短く断言し首を横に振る。

「俺は進むと決めた。今なら分かる。何故俺がこの獣になったのか。」

「・・・・・・。」

「進まなくちゃならない。俺は今まで多くの者を殺し、殺された。ここで止まったらそいつらの命全てが無駄になる。何より俺自身が世界を変えたいと願った。お前との約束だからでなく、俺自身の願いで・・。」

「　　そっか。」

天月はそう言うところから離れ後ろを向く。

「嫉妬、だったんだ。」

「……………」

「あの子は貴方と一緒にいられる。けど私はもう死んじゃって貴方の隣にいないことなんて出来ない。世界に色を付けるのだから私がするんだって決めたのにあの子が付けちゃって……………」

「このままじゃ私、貴方に忘れられちゃう。そう思うと怖くて仕方なかった。私はずっと貴方を独り占めしたかったのに貴方の心は彼女のことでたくさんになっていく。」

「ねえ、ユーヘルト。答えて。」

天月はそう言うところからユーヘルトを見る。その瞳には彼女が今まで見たことのないほどの思いが出ていた。

逃げられない。これは逃げてはいけない問題だ。そう感じたユーヘルトも真剣な表情をする。

「彼女のこと愛してる？」

「ああ。」

短く、だが迷うことなく言った一言。天月はユーヘルトの瞳を見る。ユーヘルトもまた天月の瞳から目を逸らさずに見つめる。

「そう、なんだね。」



天月のその言葉と共に彼女の瞳からは涙が溢れる。

「やっぱり、そうなんだ・・・。」

「・・・・・・・・。」

天月の涙と共に徐々に崩れていく白い空間。見れば先程まであった扉も消えている。それを見たユーヘルトは天月へ振り向く。

「　　　つ。」

だが次に出るはずだった言葉は天月の唇によって塞がれていた。ほんの数秒、けれどまるで永遠であったかのように感じた瞬間。やがて離れる二人の唇。天月はゆっくりと離れ突然の行動に呆然とするユーヘルト。天月はそんなユーヘルトに優しく抱きつく。

「でも、このまま負けるのは癪だから　　。」

ずっと貴方の傍にいてやるんだから。

その言葉と共に光の粒子になって消える天月。その粒子は徐々にユーヘルトの右腕に集まっていく。やがて温かな光が消えると共にそこには真つ黒に染まった腕が出現する。だが不思議と不快感や、恐怖は感じなく。そこに元からあったかのように感じと何か温かなものを感じた。

「・・・・・・・・お前なのか。」

ユーヘルトは黒い右腕を撫でる。少しだけそれに応えるかのように右腕が震えた。そして体内に感じる最後の一筋の気配。

「　　ありがとう。」

ユーヘルトは呟く。見ればもう空間の殆どが壊れている。ユーヘルトが何かを感じ取り背後を見るとそこには一つの黒い扉が現れていた。

最後まで迷惑掛けっ放しだな。

ユーヘルトは苦笑すると扉を開き走っていった。

「　　見えた。」

やがて広場にたどり着いたユーヘルトが見たのはボロボロの姿になった巨人と狂った笑いを上げながら立つグローリアの姿だった。

「ヒヒヒイ、ヒヤハハハハハハハハハハ！！！！ねえ！？そんなものなの！！？秩序の力ってそんなものなのかなあ！！！！」

巨人の頭を踏みつけながら笑うグローリア。　　だが

「オオオオオ　　！！！！」

その体はユーヘルトに殴り倒され吹き飛んでいった。

「・・・・・・・・・・ジル。」

ユーヘルトは倒れている少年を見る。巨人もジルが倒れたことによ

ってもう満足に動けないのだろう。

「今助けてやる。」

ユーヘルトはそう言って白い焰をジルに放つ。それはジルの体を燃やしゃがて巨人とともに消えていった。

「・・・・・・・・・・。」

ユーヘルトは静かに黙祷し目を開けるとグローリアを見る。

「ああ！来てくれたんだ！！完全な姿になって君は僕の前に来てくれるなんて！！！」

グローリアの顔が愉悦に染まる。

「悪いな。言っただろう。」

ユーヘルトは右手に魔力を込める。

「絶対に逃げ延びるってよ！！！」

溢れ出す魔力。それはグローリアから放たれる力に全く引けをとっていない。

ああ、この器が欲しいんだろ？だったらくれてやるよ！！！！だが

「その力を支配すんのこの俺だ！！！」

ようやく分かった何故この獣が出現したのか。それは繋ぐため、そして継ぐため！！！！永遠にこの平和（皆という時間）が続いて欲しい

いと思ったから何度も運命を繰り返した。皆の思いを繋ぐために俺は環になった。今まで死んだ奴らの思いを継ぐためにこの力を得た。そして歪んだ姿がこの蛇の力。失いたくないから繋ぎ止める。死んだ者すらも永遠の環へと繋ぐ死の鎖。

「見せてやるよ！！獣の力を！！！！」

そうだ紡げ。この力（獣）の本質を、俺の力を！！！！今必要なものは絶対なる破壊！総てを壊す破壊の力だ！！

「Toric Bauder Stra?e Schlange  
n 円環創るは蛇の道。」

「Wird behaiten und macht es; Sie. Ich werde Ihnen gyve adnehmen. 囚われし貴方。貴方の枷を私が外そう」

「Seven Steuer Sprint scheint  
疾走せしは七つの輝き。」

「Ich werde alles von Ihnen erhalten. 貴方の全てを私は受け入れよう。」

「Versuchte Zerst?rung des sen, was seinen Glanz 其の輝きこそが至高の破壊。」

「Ach, Geliebte Sie. Ich setzt efort, nur Sie zu fordern. ああ、愛しき貴方。私は貴方だけを求め続けた。」

「Und selbst? berlassen wei?en  
Staub der Zerst?rung durch Ver  
brennen als aller Schlaganfall  
- 一撃をもって破壊しろ総てを燃やし塵すら残すな。」

「Nur ich werde Sie lieben. 私  
だけが貴方を愛そう。」

「Ich bete. Wenn es ewig bitt  
einer mit Ihnen sein will. Wen  
nich Sie ewig bitt  
lieben wi  
ll. 私は願う。どうか永遠に貴方と一つでありたいと。ど  
うか貴方を永遠に愛していたいと。」

「Der Mund Himmel? berflutet La  
nd 天は朽ちて地は沈め。」

「Ich fange alles von Ihnen 貴方  
の全てを私は掬いとる。」

「Da auch die Zerst?rung der we  
i?en Tier zu vernichten, sonde  
rnde Unterangeweiht. ただ

総てを破壊する獣の如く運命すらも破壊しろ。」

「Bewegung 発動」

「Das Br?llen der Bestie ewige  
Vernichtung enden 終焉・永劫破壊す獣の

咆哮  
「

「White Rose ist tot Hass-Liebe  
- Drama      愛憎劇・穢れ亡き白薔薇  
」

紡ぎ終える二人の願い。それは世界を創りあげる一つの創造。ユー  
ヘルトは全身が赤黒く染まり背中からは三対の巨大な赤黒い杭が生  
え獣の咆哮を上げる。対するグローリアも全身を白く輝かせ狂った  
笑いを上げる。

破壊と愛の根源化。魔獣と白騎士は自らの想いを掲げ、衝突した。

## 五十九話 破壊する環と砕けた剣（後書き）

ユーヘルトの根源化達成。詠唱考えるのすごい時間かかりました。翻訳つかって書いてますがこれも本当に合っているか分かりません。もし分かる方がいましたらご指摘お願いします。あとこれから期限なしで詠唱なんかの募集もしたいと思います。これだ！と思ったのがございましたらどうぞ送ってください。

六十話 The world to desire (前書き)

タイトルは『望む世界』です。







ルトが近づけばグローリアは決死覚悟でユーヘルトの肉体の一部を  
 決る。ユーヘルトとてその再生能力がグローリアのように無限大で  
 ある筈がない。ユーヘルトの再生能力は自らが喰らったモノたちの  
 命の分である。喰らったもの総てを繋ぎ自らの再生能力にあてる。  
 詰まるところユーヘルトは喰らった分だけ命のストックがある。今  
 まで食らった数それは100万を超えるまさに不死の軍団である。  
 総てを削りきるのにどれほどの時間と命を失うだろうか。幸いな  
 はグローリア自信が既に狂っていたことであろう。八つ裂きにし杭  
 を突刺すユーヘルト。光の熱量によつて燃やし激突していくグロ  
 リア。正しく二人の戦いは次元を超えたものであった。

「才  
才  
才  
才  
才  
才  
才  
才」

!!!!

ユーヘルトは右腕でグローリアを吹き飛ばすと共に両の掌に力を集中させる。そして形成されるのは空間すらも破壊していく破壊の渦。ユーヘルトは容赦なくそれをグローリアへ放つ。だがただで食らうほどグローリアは狂ってなどいない。

ענענענענענענע

!!!!!!

光、そうとしか形容できないそれはグローリアから放たれると共に破壊の渦にぶつかる。

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ

!!!!!!

周囲の空間全てを巻き込んで二つの力はぶつかり合う。だがやはり相性の問題なのだろう。破壊の渦は徐々にグローリアへと迫る。だがグローリアの笑が消えることなくその体からは魔力が吹き荒れる。そして破壊の渦がぶつかる瞬間グローリアが消えた。いや、そう見

えただけである。事実ユーヘルトの目は僅かだがグローリアを捉えている。グローリアは先程の攻撃を自らが光となることで避けたのだ。確かにグローリアがユーヘルトへ攻撃するには自らの命一つを犠牲にする必要がある。事実グローリアはそれを承知の上でユーヘルトを攻めていたのである。だが攻撃をしてこないグローリアを見てユーヘルトはその行動の意味が読めず。疑問に思う。

ナラバ

ユーヘルトがとる行動は単純明快。何かする前に破壊の範囲を広げればいいだけである。それがグローリアの狙いだと気付かずに。

パリン！！

まるでガラスが割るような音をだし結界が壊れたのである。当然これだけの戦闘だ。それが人目につかない訳がない。だが

「ワガセカイヨ                      ！！」

ユーヘルトの言葉と共に新たな結界が張られる。いや、それは結界ではなく世界。根源と至ることによって生まれる世界である。だがこれはユーヘルト一人ではできない現象であった。

本来根源化には流出型と形成型がある。流出型は自らの根源の世界を流出させ世界を上書きする。対して形成型は自らを一つの世界として能力を宿すものである。流出型に形成型を使うことなど出来ずその逆もまた然り。ユーヘルトは形成型である筈だ                      それなのに世界を上書きしている。その原因は彼の右腕。天月の力が宿った右腕は彼に流出型の能力を与えていた。

「ハカイノイズエトナレ

！！！！！！！！」

その言葉と共に崩壊していく世界。それはグローリアへの決定的な

一撃になった筈だった。

「そう簡単に終わらせませんよ。」

その言葉と共に崩壊が止まる。止められたのだ新たな世界の上書きによって……。ユーヘルトはこれを行なった者を見る。

「ムゲン!!」

そして夢現がその両手に受け止めているのは

「アヤ　　!!!」

「さあ、始めましょう！役者は揃った！！今この瞬間を持って我々は始まりを迎える!!!」

それは新たな世界の始まりであり今までの世界の終わりの合図だった。

## 六十話 The world to desire (後書き)

ちよつと短め・・・かな？この章ももうすぐ終わり。次回は今までで一番大規模な戦闘になります。

## 六十一話 男が願った唯一つの世界

崩壊が止まった世界。そこに役者が揃った。全身を黒いスーツに同じく黒い帽子をかぶる細めの男。全身を白く輝かせる軍服の女性。全身が赤黒く染まり背中から赤黒い杭を生やした男。そして

「アヤ。」

空中にある椅子に鎖で縛り付けられている一人の少女。

「道化。」

「何です？グローリア。」

「邪魔をするな　　！！！」

グローリアは夢現へ飛び掛る。

「おっと！？危ない危ない。流出させてなかったら死んでましたよ？」

だが切り裂かれた筈の夢現はグローリアの背後に現れる。

「まあ話聞けや糞女。どっちみち世界樹の所有権持つてる俺に勝てる確率なんて極僅かなんだからよ。」

「ムゲン。」

「おや、ユーヘルト（……）。遂に到達しましたか。  
素晴らしい！！今貴方は総ての貴方を超えた！！今この瞬間をも  
つて運命は開いていく！！」

「アヤヲ、カエシテモラオウ。」

「彼女を？そりゃ無理な相談ですねえ。返すわけないでしょう！！  
？」

「オ、オ　　！！」

その言葉と同時にユーヘルトは夢現へ駆ける。

領域、自らがもつ領域にさえいれれば破壊できる！！

ユーヘルトが夢現へ迫るなか。夢現はそれを前にしても自然体でい  
る。

「根源にまで至ったのはいいが、俺も至ってるってこと忘れてねえ  
か？」

その言葉と同時にユーヘルトの体が止まる。

「　　！？」

「ククク、世界樹の補正がある俺とただ根源化に至っただけのお前  
じゃどちらが優勢かなんて分かったもんだろ？ここは俺の世界だ。」

動けない。何かされていてもこの体せかいの前では破壊される。なのに

ユーヘルトはその現象に困惑していた。ただ動きを止めるだけなら



ばグローリアの攻撃を食らっていた時点で既に死んでいる。だがそれと同時にユーヘルトの予測はより確実なものになっていく。

やはり

「夢現<sup>ゆめうつ</sup>の世界。」

「御名答。まあ分かったからってどうなるもんでもないがな。全くこんなところで使う予定なんてなかったてのによお。白騎士様の乱入で早めの御披露目になっちまったじゃねえか。」

夢現は肩を竦める。

「で、わかりますか？彼女をここに連れてきた理由。」

そう言つて夢現は彩を見る。

「『聖女』の魂の欠片。だが今までの運命に欠片は出現せずこの運命にだけ現れた。グローリアもそうだ。知ってます？彼女貴方が死んだあとの未来で現れてるんですよ？」

「・・・・・・・・・・。」

その言葉に夢現を睨みつけるグローリア。

「それだけじゃない。今回の運命は大きく変わっている。同じ環の上を歩んでいる筈なのに……。この運命は転換点なんですよ。絶望が希望が、二つに一つの運命。その総てが貴方と彩に掛かっている。故に」

「滅びろ。」

その言葉と同時に周囲からユーヘルトを鎖がのびユーヘルトを縛り付ける。

「ッ!？」

壊れない。その鎖はユーヘルトの領域に入っていないながら壊れることなくユーヘルトを縛り付ける。それと同時に再び世界が塗り替えられる。

そこは黄昏の世界だった。海で囲まれた小さな島その中心には白い石柱があり空には黄昏の空が広がっている

「どうよ『聖女』の欠片の力は。まあ、聖女の力なんてとづくに超えちまつてるんだけどよ。」

「彼女は確かに聖女の一部だった。だが今、彼女は一つの存在としてここにいます。これこそがもう一つの鍵である女神の力だよ!! テメエさえ消せば絶望が生まれることなんてねえ!!」

夢現は鎖に縛り付けられているユーヘルトへ夢現は膨大な魔力の塊を放つ。夢現の根源によって創り出された一撃。それは動けないユーヘルトの体など一瞬で消し去るだろう。

「この人は死なせない!!!」

だがその一撃をグローリアが黙って見ている筈がない。グローリアは光となってその塊へぶつかる。只の肉体であつたならば打ち負けることは必須。だがグローリアは根源へと至った一人である。その力は想いの分だけ増していく。

殺させない。

自らが思つ人を殺したくないという想い。それは只純粹な想いだつた。だからこそだろうが、その力は無類の強さを發揮する。グローリアはその塊に亀裂を入れ破壊していく。

「つち、面倒臭い奴だ。」

「ムゲン                      !!!」

破壊された魔力の塊を突破しユーヘルトが現れる。その姿を見た夢現は初めてその顔を驚愕に染める。

「どうやってあの鎖を破壊しやがった？」

「オレハ                      」

「一人じゃない。」

夢現は声が聞こえたような気がした。自らが殺した女の声が……。夢現は声の聞こえた方を見る。

そこには黒く染まる右腕があつた。

「天月か。」

夢現はその声の名を口にする。

「オレハモウマヨワナイ。」

「ミチヲオシエテクレルヒトト

待っている人がいるから



Entlang ihrer Schicksale im  
Lauf der Zeit      その時と共に運命と共に歩い  
ていこう

Die Leute suchen das Glück je  
den erreichen      人は皆幸福を求め手を伸ばす

Ich irgendwie Welt  
どうか世界よ

Dieser Friede auf der gan  
zen Welt haben diesen Moment  
noch einmal Jeder lacht in dem  
Moment Zeigen Sie mir wieder i  
rgendwie      この刹那が再び廻りこの平穩がある世界を  
皆が笑える刹那の時を      どうかもう一度みせてくれ

Aktivierung      発  
動

Maigrät      廻れ

Aber sobald das Schwe  
rt invariant  ただ一度の不変の剣

「                   全くその闘志には適わねえよ。」

小さな声、今まで聞いたことのない優しい声で夢現は呟く。その声は決して誰にも聞こえずかき消される。

「流出、形成。その二つを持ち合わせたからこそ出来る芸当。ああ、間違いなくお前は特異点として覚醒してやがるよ！！だからよおもう容赦しねえ。」

「全力で」

「デメエを！！」

「「ぶつ倒す！！！！」」

黄昏の世界の中、二人の願いがぶつかった。

## 六十一話 男が願った唯一つの世界（後書き）

次回ユーヘルトVS夢現

グローリアの出番も少しあります。ごめんよグローリア。

## 六十二話 救出 撤退？

黄昏の空で二人の男が激突していた。

「オラア！！」

ユーヘルトは目の前にいる夢現を殴りつける。だが夢現が黙ってそれを受ける筈がなくその拳を掴むとユーヘルトの鳩尾へ膝蹴りを入れる。

「ッ！？」

その衝撃に声を出せずよろめくユーヘルト。夢現はその隙を逃さずにユーヘルトへ一枚のトランプカードを飛ばす。

「爆ぜろ。」

その言葉と同時にカードはユーヘルトへ触れると爆炎と轟音を響かせ爆発した。

「

」

妙だ。

夢現はそう感じていた。先程の戦闘からユーヘルトは夢現の能力の影響を受けていない。世界樹の補正がある自分の根源と同じだけの力が出せるのもおかしいが最も奇妙なこと  
それは  
奴の可能性が分らない？



今までユーヘルトたちが起こす行動の可能性は全て視えていた。だが今のユーヘルトの行動は全ての可能性から外れている。夢現はそれが余りにも不気味に感じた。

「つち　　。」

これが根源化だったとしても世界樹の管理下にある世界で分からない筈がない。夢現はその原因を探っていく。

何か、何かを見落としている。

やがて夢現はある一つの答えに辿り着いた。

『一人じゃない』

ああ、そうだ。あの声の主。思い出せ奴が入っていた肉体<sup>もの</sup>の核を

「　　お前、E v eを喰ったのか。」

「　　」

「どつりで世界樹の影響を及ぼさないのか。E v eの体は禁断の果<sup>エ</sup>実<sup>デ</sup>を基盤にした擬似的な根源。成程、種から木を生やしたのか。」

木に実った果実はやがて種から木を生やす。ユーヘルトが行なったのはそれと同じ行為だ。禁断の果実から新たな世界樹を創り出す。それによりユーヘルトは夢現の世界樹の管理から外れ夢現と同じ土俵に立つことが出来る。

「ああ、もうテメエが俺の未来を視ることなんざ不可能だよ。そして　　」

ユーヘルトは夢現へと駆ける。その手には一本の剣が握られていた。

「これが俺の願いだ。」

その言葉と共に振るわれる剣。

「九撃閃光」

一振りであつた筈の剣は九の剣閃を放つ。その攻撃に夢現は対応できず切り裂かれる。だが

「つめんなあ!!」

夢現はその直撃を食らいながらもユーヘルトへ手を向ける。その手からは隕石のような規模を誇る巨大な火炎弾が放たれる。

「ッ！」

零距离で放たれたそれはユーヘルトを確実に捉えた。火炎弾はユーヘルトの肉体を塵すら残さずに燃やしたように思えた。

「ハアッ      !！」

だがその火炎を振り払いユーヘルトは現れるその姿は僅かに火傷の跡があるがそれ以外の外傷は見当たらない。

「厄介な能力だ。」

致命傷になりうる攻撃を躲し、刹那を廻り合わせて九の斬撃を放つ。

時間と運命を操る能力。

「お前に言われたくはねえよ!!」

ユーヘルトの斬撃を夢現は受け止める。

「そんなもんで俺の夢を壊せると思っなよ

!!」

「んなもん俺の現実でぶっ壊してやるよ!!」

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ

!!!!!!!!!!!!

互いの世界を飲み込まんと二つの力がぶつかりあう。それは黄昏の世界さえも揺るがしていく。剣を捌き脇腹へ放とうとする夢現の一撃をユーヘルトは運命を掴み取ることによって躲し後退しようとする。だがそれを夢現の夢の世界によって追撃し破壊しようとする。互いの根源の能力によって最初の一撃からユーヘルトは時間を操れず、夢現は一撃必殺の力を出せずにいる。

「ラアッ

!!」

「ッ!!」

夢現が手を振るうと無数の弾丸がユーヘルトへと襲いかかる。だがその攻撃をユーヘルトは躲し、破壊しながら前へ進む。だが前へ出るほどにその弾丸の数は多くなり自らを殺さんと迫り来る。

「ハッ

!!」

弾丸がユーヘルトに当たる瞬間その姿がぶれる。それを見た夢現は辺りを警戒する。やがて夢現は何か横切る影を捉えた。その何かは紫電の光だけを残し向かってきている。まさしく雷速。自らの体を雷へと変化させユーヘルトは迫り来る弾丸の雨を躲し続ける。

「ハアッ！！」

雷化によって目の前に現れたユーヘルトは手に持った剣を夢現に振りかぶる。

「無茶はするもんじゃねえなあ！！？」

だがその一撃を夢現は紙一重で躲す。見ればユーヘルトの体は無理な雷化によって所々が焼け焦げていた。夢現はユーヘルトの動きが鈍った瞬間、真上から黒竜を放つ。その黒竜はユーヘルトを飲み込み爆発した。

「がっ　　！」

「俺の世界は獣すら再現可能なんだよ！！」

そして背後から現れるのは七疋の獣。獣達は現れると同時にユーヘルトへと向かう。

「消え失せる！！」

ユーヘルトは右手に持つ剣を投擲する構えを取る。ユーヘルトが剣を投擲した瞬間、放たれた剣は巨大になりそれに比例するようにその質量も増していく。剣は紫電を放ちながら迫り来る獣達を両断していきその力は夢現をも飲み込もうと迫っていく。

「つち！」

夢現はその剣をみると舌打ちをし懷から一つの仮面を取り出した。それはサーカスなどでピエロが使つようなものでなくただ目と口の形に穴が空いただけの白い仮面。

「憤怒の巨人」

その言葉と共に仮面は碎ける。だが代わりに碎けた仮面は夢現の背後に収束する。そこに居たのは一体の巨人だった。姿はジルが宿していた巨人と変わらない。ただ、その巨人は全て黒だった。まるで憎悪に蝕まれたかのように巨人の体は黒く染まっており瞳だけは赤くひかっている。

「……………」

巨人の声にならない叫び。それと共に放たれた拳はユーヘルトの放った剣がぶつかり 辺り一帯に轟音を響かせた。

「……………」

海に囲まれた島の中央そこにグローリアはいた。そしてグローリアの目の前にあるのは一つの白い石柱。<sup>モノリス</sup>そして石柱に鎖で縛られているのは

「 彩。」

グローリアは一步近づく。

「僕は君が嫌いだ。」

「あの人の近くにいて、あの人から愛されているのに彼を救えないでいた君が嫌いだ。」

グローリアは拳を固く握る。

「 けど、君を殺したらあの人はきつと道を見失うから。」

その言葉と共にグローリアは一步ずつ歩いていく。 全ては  
あの人の為に。 そう思いながら。

剣閃と共に放たれる紫電。だがそれを上回るよう膨大な熱量を持った炎が空を焼く。飛び交う紫電と火炎は互いにぶつかり合い飲み込んでいく。そしてそれを放つ二人は高速で空を駆けていた。

「 ！」

「 ツ。」

互いに言葉はなくそれに応えるように放たれる一撃。それは終わることなく永遠に続くかのように思えた。                      だが

「                      なっ！？」

その言葉を発したのはどちらだっただろうか。黄昏の空は少しずつ歪み始めていた。そして二人が気づくのは同時だった。

「彩！」

ユーヘルトは小島に見えた一人の少女へ叫ぶ。

「っ！グローリアか。」

夢現は忌々しそうに彼女を開放したであろう人物の名を口にする。これ以上ユーヘルトを彼女へと向かわせないようにするべく夢現は迫る。だが夢現は小島から自分へ向かってくる影を捉え止まった。

「消えちゃいなよ！道化があ！！！！！」

「糞女！テメエの御陰で台無しだろうが！！！！！」

自らへ迫るグローリアを迎撃するべく夢現は構える。グローリアはその速度をさらに上げ夢現へと疾走した。

「彩！」

砂浜に降り立ったユーヘルトは目の前にいる少女の名を呼ぶ。

「ユー。」

彩もまた目の前にいるユーヘルトを見て微笑む。

「目が覚めたのか。」

「うん、彼女が助けてくれたの。」

そう言つて彩は夢現へと迫る光を指さす。

「グローリア。」

彼女が何の為に彩を助けたのかは分からない。だが

「話はこの世界を出てからにしよう。」

「うん。」

彩はそう言つて目を瞑る。恐らくはまだ根源化に慣れていないのだろう。だがやがて彩が目を瞑ると共に世界は元に戻っていく。

「夢現。」

ユーヘルトはグローリアによつて足止めを食らっている男を見る。遙か上空、恐らくはそこにいるのだろう。常人では見えないが自分の目には僅かにだが閃光と共に映し出される二人の姿が見えた。



「ユー！」

その声に呼ばれて後ろ向けば四人がユーヘルトたちの下へ駆けてきていた。マリアの姿はない。恐らく夢現の下へ向かったのだろう。

「彩！おかえりー！！」

その声と共に抱きつくフィーナ。彩も最初は驚いていたが徐々に微笑んだ。

「再開の言葉より逃げる方を優先したほうが良いんじゃないか？」

いつの間にか教授は能力で一つの魔方陣を出現させている。それを見た俺達は互いに頷き合う。

「ああ、そうだな。グローリアがどれだけ時間を稼いでくれるか分からないしな。」

「こっち側なのか？」

「知るか。少なくとも今は敵じゃないんだろ。」

俺達はそう言って一人ずつ魔方陣へと入っていく。最後、ユーヘルトは入る前に一度空を見上げた。

「グローリア。」

彼女が何をもって俺を助けてくれたのかは分からない。それに彼女は俺が死んでから現れたと言っていた。

彼女が何なのかは分からないが。今は助けてもらったことに礼を言うべきだろう。

「ありがとう。」

ユーヘルトはそう言うと言魔方阵の中へと入っていった。

そこにはもう人の姿はなく。ただ夜の冷えた風が吹いているだけだった。

## 六十二話 救出 撤退？（後書き）

・・・難しい。人の心の描写は難しいです。畜生、何で皆そんなに上手いんですかorz

はいこんな感じでこの章は終了です。中途半端な気がしてしまうけれど仕方がないんだ。仕方がないんだ（；；；）

次回はキャラ紹介の予定。けど根源化含めてすごい長くなるから書くのが辛いです。もしかしたら番外編やるかも（おい！  
なんにしても多分次の更新は火曜日・・・か？

これ完結したらもう一回構成をきちんとしたりメイク版を出そうと思っている自分がいいます。どうしようキャラへの愛は溢れて来てるのに上手く表現できるだけの腕がない。

まあ作者の自己満足で投稿すると思います。一人ぐらいいは読む人・・・いるといいなあ。

### 第三回 ガチキャラ紹介！？（前書き）

キャラ紹介。会話などありません。今回は根源組です予想以上に多すぎたため最初はこれだけで勘弁してください。

### 第三回 ガチキャラ紹介！？

・根源化：自らを自分だけの世界として構築すること。これによって創られる世界は自らの願いが大きく出るため当然その願い、もしくは自らの能力にあつた法則ちからを手に入れる。

・流出型：自らが創つた世界に相手を引きずり込む。そのため引きずり込まれた相手及び自分に対してその能力が発動される。またその世界では自らと同等の力量を持つていない限り発動した者が主導権を握る。

・形成型：自らの肉体を世界として構成したもの。おもに自分に対しての能力が発動する。また自らが世界という一つになっているため既存の法則は受け付けない。

#### 名前

・ユーヘルト・ヴァーミリオン

・根源：流出型及び形成型

#### 能力

・蹂躪せし暴君：あらゆるものを喰らう力。概念なども喰らうことはできるが魔力の消費が多過ぎのと集中力が必要なので戦闘中の行使は不可能。

ユーヘルトの何時までも続けばいいという願いが獣によって歪んでいき永遠にいる 喰らうことで永遠に共にいるというようなもの



時間 例：攻撃する過程の時間を飛ばすことによって一振りで何撃もの攻撃を繰り出す。など・・・

事象 例：届かない攻撃を届かせる。 躲せない一撃を躲す。など…

ただこれは相手が根源として同等かそれ以上にいるか世界樹を所有していると距離などによっては届いても防御される、完全には躲せないということが起きる。通常的能力者や生物たちへは一撃必殺の能力となる。

年齢

・不明・・・恐らく全ての運命を総合させると六百億は超えるかと。

身長

・179cm

体重

・73kg

瞳の色

・紅（獣が揃ったため強制的に拘束術式が解けたため）

髪

・黒髪（上に同じく） 肩にかかる程度

趣味

・物作り 読書 フィーナと遊ぶこと 街へ出かけること 桜を見ること

嫌いなもの

・ G 雨 根性のない奴 夢現 アリスの修行

かつて伯爵と呼ばれていた人物が獣としての能力が暴走しないように境界へ至った際に若返った姿。獣の能力によって何度も運命を繰り返しているが徐々に運命を変えてきてこの運命において完全に脱出を果たした。アマテラスによって強制的に神の一柱とされていたが神社が消されたことと覚えていた者達がすべて神社に関する記憶を失ったため神ではなくなった。

記憶は死ぬごとに封印を掛けられていたが徐々に戻り完全に記憶は戻っている。過去の記憶によって戦い方も遥かな高みに至る。

また Eve との戦いで利き腕である右腕を切り落とされるが Eve の中にいた天月の力を右腕に宿しているため黒く染まった腕が生えている。流出型でもあるのはこの影響。

名前

・ 彩

・ 根源：流出型及び形成型

能力

・ 古き者の伝説 天地創造：自らが記憶しているものをすべて再現可能。本人がその能力を把握していなかったため神及び英雄の使用した武器だけだったが、把握した今では総てを再現可能。ただ本人



がその負担にあまり耐えられないため連続及びあまり大きなことはできない。

・ ??? (根源) ∴ 不明

年齢

・ 約一億。 . . . . . すくなくとも八千は超えている、と思う

身長

・ 167cm

瞳の色

・ 茶色

髪

・ 茶髪 腰ぐらいまでの長さ

趣味

・ 家事全般 のんびりすること ユーヘルトをいじること フィーナと遊ぶこと 皆で街へ遊びに出かけること

嫌いなもの

・ ユーヘルとの勝ち誇った顔 一人でいること 厄介事 ユーヘルトと敵対すること

『聖女』と呼ばれた天月の魂の欠片から生まれた存在。欠片であったが完全な『個』へとなったことにより『女神』としての力を持っている。他のどの運命でも現れずこの運命にだけ現れている。夢現と何かしらの関係がある模様。もとは天月の魂の欠片であったため

流出型であつたが完全な『個』としての彩になつたことにより形成型の力も使える。

名前

・夢現

・根源：流出型

能力

・不明：自らが望む夢の世界へ相手を引きずり込む。自らの夢であるためその世界で夢現が想像したことは現実となる。ただ根源化したものへの即死攻撃は不可能。世界樹の所有権を持っているため力の底上げ及び相手のおこした行動によつて発生する全ての事象を理解することができる（世界樹を持っているユーヘルトには効かない）。

年齢

・不明：……恐らくユーヘルトとより年上

身長

・184cm

瞳の色

・金

髪

・黒髪

趣味

・他人を嘲笑うこと 恐怖に染めること ユーヘルトをいじること

嫌いなもの

・雑魚がでしゃばること ユーヘルトが生きること 自分の用意した計画を邪魔されること

ユーヘルトによって繰り返す運命を破壊されることを望んでいる。  
ユーヘルトが生存していることで絶望が生まれると言っているが詳細は不明。ほとんどのことが謎に包まれている。

名前

・グローリア

根源：形成型

能力

・愛憎劇・穢れ亡き白薔薇：自らが対象へ想う大きさの分だけ自身の回復能力や一発の重さスピードが変わる。それが純粹であり大きいほどにその力は増す。どれだけ小さくとも素手で戦車を易易と破壊する程度の力があり、速さは最低でも光速を出せるなど速さだけならば四人中最速。だがよくも悪くも想いの力に左右される。

年齢

・不明

身長

・ 172 cm

瞳の色

・ 青

髪

・ 白髪 長さは腰ほど

趣味

・ ユーヘルトにどう愛情を伝えるか考えること ユーヘルト探し

嫌いなもの

・ 獲物を取られること ユーヘルトを傷つけるもの

夢現について謎の人物。ユーヘルトの死後の運命で現れるらしいが何故か出現。本人も語ろうとしない。ユーヘルトに対して異常なまでの愛を抱いていおり殺し自らと溶け合おうとする。彼女が何故そこまでこだわるのかは不明。また感情が激しくユーヘルトを前にすると暴走することが多い。ただ理性は持ち合わせている模様。

### 第三回 ガチキャラ紹介！？（後書き）

と、こんな感じです。彩は根源なのか？と思っただ方。はい、根源に至っています。

四人の力関係などは最後の紹介の法でやらせていただきます。今回はこんなもので……。それでは！！

### 第三回 ガチキャラ紹介式（前書き）

投稿できなくて申し訳ありませんでした。

さあ、式を始めようと思いましたが。

作「うっはww無理だわ。二回じゃ終わらねえww」  
友「じゃ、三回目まで番外編入れて続けられ？」  
作「・・・番・・・外編・・・だと？」

とのことでもしかしたら番外編がはいるかも。

今回はユーヘルト側の紹介です。

### 第三回 ガチキャラ紹介式

名前

・フィーナ・ヴァレンシュタイン

能力

・壊れた玩具の心臓：ブローケン・ユア・マインド任意の空間にあるものを破壊する能力。最近  
は集中力も増し能力をより効率良く使いこなせるようになったもよ  
う。

年齢

・6000・・・ぐらい？

身長

・147cm

瞳の色

・紅

髪

・金髪 サイドポニー

趣味

・遊ぶこと 出かけること

嫌いなもの

・友達が傷つくこと 遊び相手がなくなること

前回までの運命で出会ったことはあるが自分のもつ能力を恐れて部屋に引き込まっているのがほとんどだった。ユーヘルトが彼女を拉致・・もとい連れ出して以降少しだけ外に出られるようになったらしい（正確には自室の外）。今回の運命では最初はやはり引きこもっていたが自分で克服したらしい。また姉であるアリスからは可愛がられており本人も満足している。

名前

・アリス・ヴァレンシュタイン

能力

・Red Devil

年齢

・本人が憶えている限りの運命を総合すると約400億ぐらい

身長

・173cm

瞳の色

・紅

髪

・金髪 腰ほどの長さ

趣味

・旅 血液採取（主にユーヘルト） 紅茶を飲むこと 読書



嫌いなもの

・マリア 教授（嫌いというより苦手） 待たされること

繰り返す運命のうちやがて綻びが生じたことで記憶が引き継がれた。伯爵の時から友人で相棒。付き合いはガンドールの次に長く、様々な場所を旅していた。昔はやはり吸血鬼のように吸血行為をしていたが伯爵と出会い、戦闘。ボロ雑巾のようにされ吸血衝動を喰われた。だが今でも昔からの癖でユーヘルトの血を吸うこともしばしば。

名前

・夜桜華詠

能力

・黄竜：黄龍を呼び出す。及び龍脈の操作が可能。その土地の龍脈の分だけ力は増大する。また仲間への受け渡しも可能。

・麟：麒麟を呼び出す。また雷を操ることが可能。

身長

・168cm

髪

・桜色 腰ほどの長さ

趣味

・のほほんとしてること 桜を見ること 皆で笑っていること

嫌いなもの

・家来を傷つけるもの　曇　崩狐

今までの運命で京都での戦闘の際に戦死していたが今回の運命には生存。基本的にゆるい人物であり規則など作っても本人が忘れて最初に破ることなどもしばしば。またにこにこしていること多く本気なのか冗談なのか判別がしづらい。一応霊ではあるが何故か実態があるという特殊な存在。触れる食える寝れるとどう考えても霊とは思えないことをしている。  
昔は本当に城の姫であつたらしい。

名前

・水月刀断

能力

・断魂剣：夢桜によって切り裂いたものを断つ。また魔力など目に見えないものでも断てる。他にも自らの刀の範囲外であってもその対象に向けて刀を振ることとその対象を断つこともできる。

身長

・182cm

体重

・78?

瞳の色

・黒

髪

・青 後ろ髪を紐で結っている

趣味

・刀の手入れ 華詠の世話 庭の手入れ 縛鎖との手合わせ

嫌いなもの

・主に仇名すもの 裏切り

華詠の世話兼城の者への指示など普段から働きすぎで倒れるのではと心配されている。昔から華詠に仕えているらしく忠誠を誓っている。ユーヘルトを本気にさせるなど実力は高く、部下からも信頼されている。ただ主のことになると周りが見えならしく暴走することも・・・

名前

・爆鎖

能力

・爆神：爆炎、爆発などを操る

身長

・258cm

体重

・120?

瞳の色

・黒

趣味

・酒を飲むこと、喧嘩

嫌いなもの

・戦いの邪魔をするモノ

肌八赤くまさに赤鬼と呼べる風貌。やはり鬼のために力は強くそこらの雑魚など一撃で消し飛ばす。酒が大好きで何かあるとすぐに宴会をはじめようとしようとし暴れだすこともある。昔は鬼神と言われ恐れられていたらしい。なんでも昔は酒呑童子たちと暴れまわっていたそうだ。

### 第三回 ガチキャラ紹介式（後書き）

ちよつとここで一回区切ります。残りのメンバーはまた次回で。

## 番外編 ある冬の日のこと（前書き）

二日ぶりです。休んだ分のテストなどで手がいっぱいになり遅れてしまいました。

今回番外編です。まあ恐らく本編では起こることのない話です。・

・番外編ならまたあるかも。

そしてキャラの印象が変わるかもしれませんがあくまでこれは本編に一切関係ありません。またこの番外編は少しだけ設定を変え一部の方（というか一人）の精神が安定しております。（少なくとも最初は）

## 番外編 ある冬の日のこと

冬、この言葉を聞いて一体何を思い浮かべるだろう。ある人は炬燵、ある人は雪、クリスマスや正月、お年玉と答える人もいるだろう。だが今の俺がこれを聞いて思い浮かべるのは

闘いだ。

「……」

もう冬となり外では地面を白く染めるように雪が降っている。そんななか我が家では炬燵に入りテーブルにある一つの戦場を眺めていた。戦場は肉やネギ、豆腐など様々な具材を煮ていた。ここまできえは分かるだろう。そう鍋だ。そして俺の目の前にはかつてないほどの強敵がいる。隣にいる奴から順に言おう。

「食卓の皆さんこんにちは。」

まず右隣はお茶を飲みながら鍋を見ている茶髪の少女 彩だ。  
そして更に隣、つまり俺の対面にいるのは

「やはり鍋はいいですねえ。」

黒髪にスーツを着た細めの男 夢現。更に俺の左隣に座るのは

「ていうか何で夢現がいるんだい？ 僕に寄越してさっさと帰んなよ。」

白髪で相変わらずの軍服姿をした少女

グローリアだ。

「お前等とつと帰れ。」

「やだ。」

「無理ですね。」

「何でだよ！？お前らは敵だろうが！！」

「全く、ユーヘルトは心の狭い男ですねえ。そんなんだから禿げるんですよ。」

「禿げてねえよ！！」

「いやいや、心は随分と禿げてますよ？」

「何それ！？俺はそんなもん初めて聞いたぞ！何だよ心が禿げてるって！！？」

「五月蠅いわよユー。そんなに暴れたら鍋がひっくり返るでしょ。」

「……………はい。」

彩の言葉に俺は静かに座った。目の前では夢現がドヤ顔をしてやがる。くそ、ぶん殴りてえええ！！！！

俺が必死に抑えているとグローリアが口を開く。



「夢現。」

「何ですかグローリア？」

「その顔今まで見たゴキ○リの中で一番キモイからやめて。」

グローリアの真顔のセリフに夢現は余程ショックを受けたのか頂垂れて落ち込んでいた。っは、ざまあ。散々人のことを遊んでやがったからだよ！！

「ユー。」

「ん？どうした彩？」

「その顔キモイからやめて。」

「・・・・・・はい。」

何だろ目から汗が出てきた。畜生止まんねえぞ。

「ちょっとグローリア！！何時の間にそんなに食べてるのよ！！」

その声に俺と夢現もグローリアを見る。そこには肉を食べて至福の顔を浮かべているグローリア。

つぶち！！その顔を見ていた俺に何かが切れる音が聞こえた。

「グローリアア！！なあに俺の肉食ってんだテメエ！！！」

その言葉に俺は夢現の器を見る。そこには確かにさっきまではあったはずの肉が全て消えていた。そしてもう一度グローリアを見て俺

は思わず顔を引き攣らせる。

「…………グローリア。」

「なに？ユーヘルト？」

グローリアは満面の笑で俺を見る。

「……………何で根源化してんの？」

「やだなあ。夢現に嫌がらせするためじゃないか。」

そんな笑顔で言われても。

「死ねやあグローリア！！！」

その言葉と共に夢現が根源化する。夢現は自らの世界に俺達を引き込んだ。…………夢現の世界で浮かぶ炬燵。そしてそこに座る俺と彩。…………すごいシニールだ。

「…………さて食うか。」

向こうで戦い始めた二人を無視して俺達は箸を持ち鍋を食おうとし俺の動きが止まる。

「…………どうしたの？」

「……………。」

彩の言葉に俺は肩を震わせる。何故…………何故…………

「何故俺の肉が消えてるんだーーーー！！！！！！」

畜生！油断した！！まさか俺の肉を取られるとは……。誰だ誰がとりやがった！！

俺は隣にいる彩と向こうで戦う二人を見る。

「見えた！」

戦ってる二人。よく見れば口を動かしている。消えた俺の肉と戦う二人の口の中に入ったもの……。

二人の口の中の物〃俺の消えた肉

「コロス。」

俺は立ち上がる。

Wenn nicht, ohne anzuhalt  
en f  
ort  
時は止まることなく進むもの

Welches Schicksal wird mit  
der Zeit gehen  
運命は時と共に歩いていくもの

Es ist kostbar vor allem, vor

allein die Herren Arys      それは何より  
も尊き、何よりも高みにありしもの

Entlang ihrer Schicksale im  
Lauf der Zeit      その時と共に運命と共に歩い  
ていこう

Die Leute suchen das Glück je  
den erreichten      人は皆幸福を求め手を伸ばす

Ich irgendwie Welt  
どうか世界よ

Dieser Friede auf der gan  
zen Welt haben diese Momente  
noch einmal Jeder lacht in dem  
Moment Zeigen Sie mir wieder i  
rgendwie      この刹那が再び廻りこの平穩がある世界を  
皆が笑える刹那の時を      どうかもう一度みせてくれ

Aktivierung      発

動

M a i g r e t      廻れ

r t   i n v a r i a n t      A b e r   s o b a l d   d a s   S c h w e  
ただ一度の不変の剣

「待てやテメエ等あ!!!」

その言葉と共に俺は二人の戦いへと飛び込んでいく。

「……あれ？私は？」

一人残された彩は首を傾げていた。

「肉の敵!!」

その言葉と共にユーヘルトは夢現を蹴り飛ばす。

「っ！いきなり何だテメエ。」

「テメエ等何俺の肉食つてんだあ。 ああん？」

「僕は食べてないよー。」

「じゃあその肉はなんだ？」

「拾った。」

「何処で？」

「ユーヘルトの器で。」

「結局俺の肉食ってんじゃねえかあ!!」

「グローリア。態々言ってるじゃねえよ。」

「ユーヘルトには嘘は付けないんだあ。」

「クロスクロスクロス!!!」

ユーヘルトは一瞬でグローリアの背後に回り殴りつける。それとほぼ同時に夢現を襲う痛みと衝撃。二人その衝撃に耐え切れず吹き飛ばされる。ユーヘルトは追撃をかけようとするが夢現から無数の鎖が伸びる。

「雁字搦めにしてやるよ!!」

「オオオ      ツ!!」

ユーヘルトは絡みつく鎖を全て断ち切る。

「一緒になろうヨ!!」

ユーヘルトが動き出そうとした瞬間にグローリアがユーヘルトに音速を超えた一撃を放つ。ユーヘルトはその攻撃を喰らった      かの

ように見えた。

「食らってたまるか。」

ユーヘルトはグローリアから離れた場所に現れる。

「吹き飛ばす」

夢現のつぶやきと共に二人が爆炎に飲み込まれる。

「舐めんじゃねえ!!」

だがその爆炎の中から無傷とは言わなくとも無事な様子の二人が現れる。

「ずっと眠っちゃえ。」

グローリアが光の速さで夢現へ疾走する。

「受け止める。」

その言葉と共に夢現に激突するグローリア。しかし光の一撃を食らおうとも夢現は倒れない。

「オオオオオ                   !!」

「ッラア                   !」

「ハッ                   」

次第に激しくなっていく三人の戦い。それは鍋のある炬燵にまで及ぼうとしていた。

「いい加減にしなさい!!!」

その言葉と三人の動きが止まる。

「あんた達そんなに決着をつけたいなら

彩はそう言って一つの箱を取り出す。

「これで決めなさい!!」

出されたのはひとつの箱。それには「人生ゲーム」とデカデカと書かれたタイトルがあった。

「……」

それを見る三人。

「これで決着をつけなさい。肉もこのゲームで決めなさい。」

「……」

三人は顔を見合わせる。別にこのまま戦っても構はしない。ただ先頭の余波が鍋に及ぶのは避けたい。結果三人が取れる選択はひとつしかなく……。

三人は頷いた。

「なら準備するわよ。」



その言葉と同時にひとつのテーブルが創られる。そして置かれる人生ゲームの箱。三人もしぶしぶ椅子に座り始めた。

「おい、巫山戯んな。肉横取り可能ってどういうことだ!？」

「僕のネギがゆで卵になるって何!？」

「……乾燥した肉って酷くないですか？」

「ありがたく肉はもらっていくわー。」

神社の居間。そこには人生ゲームと鍋を囲む四人の姿があった。四人は恐怖に声を上げたり涙を流していたりしているがどこかその表情は普段から見られない楽しそうな表情だった。

今日も我が家は賑やかです。

彩の創った人生ゲームによって決められた勝負は更に三人の勝負を泥沼化させたというの余談である。

## 番外編 ある冬の日のこと（後書き）

今回はここまで。続きは次回。鍋美味しいですね。私は大好きです。という訳で番外編、この三人が仲良く笑っている姿。絶対にありえないだろうけど何となくいいと思ってしまいました。

次回はキャラ紹介ユーヘルト側後編です。

### 第三回 ガチキャラ紹介？

名前

・黒曜

能力

・音域：音を扱う能力。また振動や術式を音として認識して操ることが出来る。ピアノ線を振動させ電ノコのようにしたり音を相手に衝撃波のようにぶつけることも出来る。ピアノ線は黒曜の魔術によるもの。目が見えない為戦闘時は必ず能力によって音を感じ取って敵の場所や行動を把握している。

年齢

・1億以上

身長

・176cm

体重

・65？

髪

・金髪 後ろで縛っている

趣味

・ピアノを弾くこと 料理 読書 教授の手伝い

嫌いなもの

・友人を傷つけられること　ピアノを弾く邪魔をされること　勝ち逃げ

伯爵の友人の中では最も常識を分かっている人物。温和な性格で頼りになる人物だが一度怒り出すと今までの鬱憤を晴らすかのよう  
に暴れ手が付けられなくなる。ピアノを何よりも大切にし自らの体の一部と言っている。本来彼の能力はピアノがあつて能力が発動される。その力は伯爵を追い詰めるほどだとか。昔は盲目のピアニストと呼ばれていた。

名前

・教授（本名不明）

能力

・不明

年齢

・一億以上（少なくともアリスより年上）

身長

・162cm

瞳の色

・茶

髪

・淡いピンク　ポニーテール

趣味

・機械いじり 黒曜のピアノの調律 アリスいじり

嫌いなもの

・研究を馬鹿にされること 機械を壊されること

伯爵の友人よく研究室に引きこもって研究ばかりしている。猫又のように猫の尻尾が二本ある。アリスより年上でアリスの小さい頃からの様子をよく知っておりそれをネタにしてアリスをからかっている子。

名前

あずま りゅうげん  
・東 竜玄

能力

・青竜…文字通り青竜を呼び出す。また水や氷を操ることができる。

年齢

・33歳

身長

・183cm

体重

・76?

瞳の色

・黒

髪

・黒髪 短髪

趣味

・酒を飲むこと 遊びに行くこと（主にキャバクラ）

嫌いなもの

・人間人を傷つけるもの 仲間を傷つけるもの 自分の力に過信する者

四方院家の長をやっている。本来は華詠の役目でもあるが本人がやる気がないため先代からそう決められた。普段は酒や女のことばかり考えているがやるときはやる男。頭もなかなかきれ面倒見も良かったため部下や仲間達からは信頼されている。初対面の相手には御巫山戯なしで真面目なフリをする。

名前

しろかぜ

・白風 とらこ 虎子

能力

・白虎：文字通り白虎を呼び出す。風を自由に扱うことができる。

年齢

・13歳

身長

・143cm

体重

・43kg

瞳の色

・黒

髪

・茶髪 ショート

趣味

・プラモ作り 勉強

嫌いなもの

・だらしない態度 周りに迷惑や心配をかけること

四方院家の中では最年少真面目な性格。普段からだらしない竜玄によく説教をする姿を見かけるとか。それでも竜玄とは親友であり信頼しているらしい。能力も他の三人に劣らず使いこなしている。最近では密かにプラモ作りにはまっていると本人は指先の訓練だとかなんとか・・・。

名前

・亀井きい 花湖かこ

能力

・玄武：玄武を呼び出す。氷や大地を操る。また金属なども操ることが出来る。

年齢

・24歳

身長

・ 168cm

瞳

・ 茶

髪

・ 茶髪 腰にとどくかとかないか

趣味

・ 茶道 百合と買い物に行くこと

嫌いなもの

・ 花を傷つけられること 仲間を傷つけるもの

四方院家の北を守護している。普段は着物を着ており華詠を慕っている。守りに特化しており戦闘はそこまで強いわけではない。ただそれでもフィーナと互角に戦えるだけの实力をもっている。

名前

・ 朱堂院 すどういん 百合 ゆり

能力

・ 朱雀：朱雀を呼び出す。炎を操ることができ、半不死の体になれる。

年齢

・ 16歳



身長

・ 157cm

瞳の色

・ 黒

髪

・ 茶髪 ショートボブ(?)

趣味

・ 買い物 バイト 華詠と話すこと 皆で遊ぶこと

嫌いなもの

・ ゴキ○リ

基本的には優しく真面目な性格。ただ周りの人物にいつの間にか主導権を奪われ巻き込まれることもしばしば。動物を撫でているのをよく見かけるらしい。店では看板娘として働いている。店のみんなからも頼りにされている。

名前

・ タマ

猫。それ以上でもそれ以下でもない

### 第三回 ガチキャラ紹介？（後書き）

ユーヘルト側はこれで終わりです。次回は夢現側の説明をしたいと思います。

### 第三回 ガチキャラ紹介よん（前書き）

夢現側不明な人多すぎだろー！ー！ー！！！！

天照大神や須佐之男たちはどちら側というのが今のところ本編で出ていないため記載されていません。

### 第三回 ガチキャラ紹介よん

名前

・マリア

能力

・不明

年齢

・一億以上

身長

・169cm

瞳の色

・碧眼

髪

・銀髪 腰ほどの長さ

趣味

・愛を説くこと 夢現の身の回りのこと

嫌いなもの

・アリス 異教徒 夢現の敵

夢現直属の部下。夢現のことを神といい夢現の命令であれば何であろつとも言つたことを聞く。アリスとは繰り返される運命の中で戦

い続けている。お互いがお互いのことを何よりも嫌っており街中で会うだけでも戦闘をはじめようとする。

名前

・ Eve

能力

・ 聖者の行進：自らの魔力がある限り無限に剣を生成、射出できる。  
生成する剣に条件はなくどんなものであれ剣であれば生成可能。

身長

・ 164cm

聖女の魂が入ったもの。禁断の果実をから創られておりその体は根源に近い存在となっている。今はユーヘルトに喰われ右腕に宿っている。

名前

・ 崩狐

能力

・ 不明

年齢

・ 3千万

身長

・ 169cm

瞳の色  
・黒

瞳の色  
・黒髪

趣味

・果物を食べること 街を徘徊すること 尻尾の手入れ

嫌いなもの

・利用されること 華詠 芸術が分からないもの

太古の時代より生き続けた妖狐。その尾は九本であるが、正確には確認されているのが九本というだけ。今は夢現のもとに所属している。忌渦飢とは昔から面識があるもよう。

名前

・忌渦飢

能力

・不明：風に関するものらしいが

年齢

・4千万

身長

・189cm

体重

・ 78 ?

瞳の色

・ 黒

髪

・ 黒髪

趣味

・ 筋トレ

嫌いなもの

・ 猫 戦う気のないものが戦場にいること

何よりも戦うことを欲する男。縛鎖や刀断との決着を望んでいる。  
太古より生きる大蛇で崩狐より生きている年月は長い。腕を失い今は義手をしている。

名前

・ 帽子屋

能力

・ 不明

年齢

・ 不明

身長

・ 174 cm

・ 不明 体重

素性の全てが謎の生物（？）何が目的なのかも分かっていない。



### 第三回 ガチキャラ紹介よん（後書き）

・・・・新しくまた小説始めちゃいました。そっちの方は多分休日に投稿するのが多いかと思います。

## 六十三話 北欧（前書き）

お久しぶり（？）です。今後の展開などを整理していて間が空いてしまいました。あと新しい小説の投稿で・・・これからもしかしたら二日に一回の更新ペースになるかもしれません。

## 六十三話 北欧

side ユーヘルト

こんにちは。ユーヘルトです。

「・・・・・・・・・・。」

只今絶賛空の旅でございます。何でこうなったか？まあ、あれだ教授のミス・・・・・・・・だと信じたい。

「どうしてこうなるかなあ。」

実を言うと俺。もう魔力切れで方陣すら出現できない為着地もできない。何故そんな余裕なのかって？そんなもの決まってる。突風が俺を襲う。それに目を瞑っていると突然何かに引っ張られた。

「相変わらず滅茶苦茶な奴だ。」

俺が目を開けるとそこには見知らぬ美少女。だがさっきの気配は・・

「・・・・・・・・オーデインか。」

「ああ。」

さっきの余裕はこいつが来ると分かっていたから。・・・・・・・・女の姿で来るとは思はなかったが。

「色々聞きたいことがあるようだがまずは下に降りるぞ。私も聞きたいことがある。」

そう言つて地上へ俺を引つ張つていくオーデイン。流石にこれだけの高度で降りたことはないから結構ビビる。

「……他の四人は？」

「私が見たのはお前だけだぞ？……まあ、そのうち集まってくるだろう。」

「……そうだな。」

少なくとも黒曜は俺の場所を特定できるだろう。時間は掛かると思うがそれで全員集合することは出来る。俺がそんなことを考えていると地上についたのかオーデインは突然掴んでいた手を離す。

「のわっ!？」

突然離され俺は思わず地面に顔面ダイブをしてしまう。痛い。魔力切れと疲労困憊でもう殆ど動けねえんだよ。

「だらしない。」

「……黙れ、男女。」

俺がそう言つた瞬間オーデインからブチッという何かが切れる音が聞こえた。

「私だつて好きでこんな姿になつたんじゃない！！人間というこんな脆い肉体に・・・おまけに何だ学生とは！！？御陰で口調までこんなことになつてしまったではないか！！！」

オーデインは俺の襟首を掴んで思い切り揺らす。

「おい！やめろ話せ！！？」

「何でこんな姿なんだ！！何とか言えユーヘルト！！！」

お前に揺さぶられて話せねえよ！！夜空の中俺とオーデインの叫び声が響いた。

side 三人称

「・・・・・・・・・・。」

ある店の店内。そこにぐったりとした表情の二人が顔を伏せて座っていた。やがて顔を上げたユーヘルトは対面にいるオーデインに声を掛けた。

「で、その姿は何なんだ？」

オーデインも顔を上げるがその表情はユーヘルトよりも疲れきっているものだった。

「ああ、この姿な。」

前にあったときは記憶にあった通りの男の姿だった。それにオーデインは学生と言った。恐らく何かあったのだらうと、ユーヘルトは考えた。

「実はな……ロキに殺された。」

「……は？」

「……何とか残りの力を振り絞って転生したがこの体になってしまったんだ。」

ロキに殺された？ユーヘルトは疑問に思った。そもそもロキは既に死んでいた筈。それが再び生き返るなどありえない。

「……まさか。」

「夢現だろうな。」

「……最悪だな。」

まさか、こんなところにまで手を回しているとは。ユーヘルトは小さく舌打ちをするとオーデインに目を向ける。

「で、その姿になったと。」

「ああ。奴等は今転生した私を探しているはずだ。」

「他の奴等は？」

「トール達は死んではいない。ただ今は人間の姿で溶け込んでいる。」

「成程。」

流石にオーデインでも数の差を覆すことなど出来ない。それはどの歴史においても証明されていることだ。

「私は奴らを倒す。ユーヘルトよ。お前の力も私は借りたいのだ。」

「……いいぜ。ただし……俺たちにも協力しろ。」

それこそがユーヘルトの狙い。数の差、これはどうあがいても夢現達の方が圧倒的に上だ。使えるものは全て使う。それならばこの程度の協力など構はしない。ユーヘルトはそう考えた。

「分かっている。何より前回の最後は私も認められないからな。」

「」

その言葉にユーヘルトは目を見開いた。此奴は今何と言った？

「何でお前が……。」

「前回のことを知っているのか？」

「……ああ。」

オーデインは肩を竦める。

「私も知らん。ただ覚えているのは前回のことだけだ。」

「……そうか。」

「それについては今考えることではないだろう。それより……。」

オーデインはほんの一瞬、力を開放する。そこから感じる力は前回の比ではない。そのことにユーヘルトはさらに驚愕を覚えた。ほとんどの神は自らを鍛えるということはしない。それは生まれながらにして遥高みの力を持ち。それに満足してしまっているからだ。

「一手死合でもしたいものだ。」

「……殺すのは無しだぞ。」

「分かっておる。」

オーデインは不敵な笑みを浮かべて頷く。

「場所はこちら。俺も魔力の回復をしたいからな。時間をもらうぞ。」

「構わぬ。」

ユーヘルトもオーデインも前回の決着については不満がある。二人は真剣な表情で互いを見ると運ばれてきた料理に手を付けたのだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9678u/>

---

廻る運命と囚われた神様

2011年11月23日11時50分発行